

---

# アルス×マクス

キダイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アルスマグス

### 【Nコード】

N1720W

### 【作者名】

キダイ

### 【あらすじ】

ここは『術』と言う魔法に似た文化が科学の代わりに発達した世界

旅の途中、諸事情により食料を全てなくしてしまったため餓死寸前の状態まで追い込まれてしまった主人公の少年ユアン。そんな彼を救ったのは、まだ年端も行かぬ幼い少女だった。その恩を返すためユアンは少女の旅に同行する羽目になったのだが、どうやら彼女は人には言えない事情を抱えているようで……。これは様々なキャラクター、様々な『術』、そしてユアン「バロウズと言う一人の少

年の人生を描いた、主人公トラブル巻き込まれ型王道バトルファンタジーです！ ギャグ・ほのぼの・コメディ5割、バトル&シリアス5割ぐらいでやっていけたらいいなと思っています。ついでに主人公最強モノではなく、ヒロイン最強モノです。

## アルス×マクス

この惑星には二つの世界がある。

『アルス宗教をなくした世界』と、『マクス科学をなくした世界』。

それらは決して交われない。

交わらないのでもなく、交わる気がない訳でもない。交わる事ができないのだ。

なぜならそれらの間には一枚の『壁』があるから。

その『壁』は長く高く分厚く強固。星を縦に横断し、決して越える事はできない。絶対の壁。

人々はそれをこう呼んだ。

『アブソルート絶対者による不滅の天壁』と……。

この物語はそんな二つの世界の内、『マクス科学をなくした世界』でのお話です。

## アルス×マゲス（後書き）

かなり大雑把な厨二病丸出し世界観の説明です。  
続き読んでくれたら嬉しいです。

ちなみに今のところ本編ではこの設定は全く使いません ><  
飽くまでそういう世界観だと理解してもらえればそれだけで十分  
です。

## 1 ゴーレム

とある荒野に遺跡群があった。

大昔はどこかの国の都だったらしく、結構立派なギリシア建築に似た壁・柱・石段などが広範囲に並んでいる。昼間なら神秘的に見えるだろうが、真夜中だと少し不気味に感じられるところだった。

そんな（おそらく）神聖な場所であろう遺跡の中で、

「うぎゃアあああああああああああああああああああああああああ  
あああっ！！」

情けない声を上げながら慌しく走り回っている少年が一人。

「なんでこっちに来るんだよおおおおおおおおおおおっ！」

絶叫している少年の名前はユアン＝バロウズ。

歳は十六。髪と瞳は黒。背丈は歳相応。

服装は裾が膝下まである黒色のショートパンツに赤色のT＝シャツ。  
ッ。

その上からロングゴートを羽織っていて、右手首には銀色のチェーンに吊るされた日本刀の柄だけストラップ。

そんな思春期丸出しな格好をしているどこにでも居そうな少年は、旅人だ。

そして彼は今全力で走っていた。

理由は簡単。  
追われているからだ。

全長五メートルを越す、岩で創られたゴーレムに。

それは周りにある遺跡の残骸を固めて無理やり肢体の形にしたよ  
うなものだった。しかし頭は無く、左右の大きさはバラバラで右腕  
が左腕の三倍は太くて長い。

そんな歪なゴーレムが一步前に踏み出すたびに、地面が大きく揺  
さぶられる。

(どうしてこいつは俺を追いかけてくるんだーっ！)

とか心の中で言っているユアンだが、実はその理由は分かっ  
てい

た。  
それは、

ゴーレムの上でダイナミックに用を足したからだ。

全く持つてくだらない理由わけである。

端から見たらただの露出魔へんたいだ。

最初は突然の尿意から起きた、ただの好奇心だった。

遺跡の外は一八〇度地平線しか見えないし真夜中だし自分以外誰  
もいないし静かだし月が輝いてるし星が綺麗だし、だから『高い所  
でいたいな』と思ったのだ。

そして見つけたのが、頭のない巨大な石像だった。

その石像はその場で堂々と立っていたのではなく、何故か膝立ち

だった。それでも高さは相当なものだったので、彼は迷わず石像に登っていきその上で豪快に排泄物を放出した。

壮大な景色。しなやかな風。

もの凄く清々しかった。

心の中の楔くさびから解き放たれた気分だった。

そんな天からの幸せは、しかし長くは続かなかった。

突然、足元が揺れた。

それが、石像が立ち上がったものだとして理解した時には、既に手遅れ。

神聖な場所をその場の好奇心で汚した少年に神の鉄鎚を下すべく、『ゴーレム』は始動した。

><><><><><

そんなバカで哀れでヘンタイな少年を、遠くから眺めている者がいた。

十四・五歳ぐらいの娘だ。

背丈は同年代の女の子よりは少々低め。

上は薄茶色のブレザーで、下は赤と黒のチェックが入ったプリーツスカート。

ピンク色の短髪の上からは、魔女が被っていそうなつばの広い三角帽子に、紫色のローブ。

容姿はとても端麗で、いたずら好きそうな顔立ちをしているが、

学校では絶対にモテているだろうと言い切れるほど。

そんな娘は、遺跡にある高さ五メートル程の柱の上に腰を掛けていた。

そして彼女は優しい音色で小さく笑う。

「あんなアホな事する人、初めてみた」

## 1 ゴーレム（後書き）

まだまだ拙い文章の上、ヘンタイ混ざっていますが続き読んでくれ  
たら嬉しいです。

## 2 稲妻

この世には科学技術は存在しない。

代わりに『術』と言う魔法に似た力が存在する。

炎や風を熾したり、水や土を出現させたり、光や音を放ったり。

そんな事が物や機械なしで出来るのだ。

そして人は誰しも体内に『元力<sup>マゲナ</sup>』と言うエネルギーを持っている。その総量は人によって差はあり、修行などをして増える事はないが、この世界の人間は『元力<sup>マゲナ</sup>』を使い『術』を発動させるのだ。

ゴーレムもそんな『術』の一種で今回の場合はトラップ式ゴーレムと言い、何らかの条件が満たされると自動的に発動し条件にあった標的を叩き潰す、主に建造物の護衛に使われるものだ。ゴーレムを動かすためのエネルギーは、基本的にゴーレム本体 主に胴体の中心部に貯められている。

(だからエネルギーである元力<sup>マゲナ</sup>が切れるまで、逃げ回っていれば良い訳なんだが……)

「いったい、いつになったら止まるんだよおおおおおおおおお  
！」

絶叫するユアンの後を、ゴーレムは乾いた大地を容赦なく踏み潰しながら追いかけて来る。

(ちくしょう、俺の力だけじゃあいつは止められないっ)

ゴーレムが地面を踏み締める度に起こる地震に似た振動に、毎回足を掬われそうになる。

(そう言えば攻撃すれば元力マクナを減らす事ができるって聞いた事があるな)

そんな事を思い出しユアンは走りながら後ろを振り向く。すると、ゴーレムが己の巨大な右腕を、拳を握って振り上げていた。

「やば、いッ!」

だが、気付いた時には遅かった。

ゴーレムは釘を打ち付けるように、標的を叩き潰すためその岩塊を振り下ろす。

瞬間、

轟ッ!! と言う振動に大地が、音に大気が震えた。

ところが、それは右腕が振り下ろされたものではない。

ゴーレムの右腕が、左からの不意な攻撃により破壊されたものだった。上腕部分が砕け散り、残った前腕部分が回転しながら飛んでいく。

再び揺れが両足に伝わった。視界の隅に濛々と込み上げている粉塵が映り込む。吹っ飛んでいった前腕部が遺跡内のどこかに落下したのだろう。

「は……?」

思わず立ち止まっていたユアンには、意味が分からなかった。彼にはゴーレムの腕が突然吹き飛んだように見えたのだ。

しかし、ゴーレムはその程度では止まらない。右が消えたのなら次は左で、と言うように腕を振り上げ再び標的を圧殺するべく動き出す。

呆然としていたユアンだったが、そこへ声が聞こえてきた。

「その面白い人、ぼーっとしてたら死んじゃうよ」

そんな声を聞いたと思ったら、

一体いつ現れたのか、その女の子は目の前に立っていた。

ユアンに背を向け、ゴーレムの真正面に。

女の子は紫色のローブを羽織り、つばの広い三角帽子を被っていた。

そして右手には一・五メートルほどの杖を握っていた。先端がUFOキャッチャーのアームのような形状をした、三つの爪が付いている。そのため杖と言うより槍に近い。

「さて、ゴーレムには止まってもらおうよ」

そう言っ杖の先端に付いている三つの爪をゴーレムに向けた女の子は、

「術式の発動」

そのまま陽気に唄い出す。

「わたしはあなた精霊の書の契約に基づく」

とても綺麗な音色に、ユアンは思わず聞きいつていた。

対しゴーレムは左肘を引き、今度こそ標的を潰すために狙いを定める。

「わたしのちからと元力の形成、ひきかえに座標の固定」

と、そこである変化に気付いた。

杖の先端に付いている三つの爪の中心。その中で、何かが煌いたのだ。

最初のうちは断続的で不安定なものだったが、

「おおきなおととひかりをちようだい光と音を超越した現象」

次第に大きくなっていき、それを見ていたユアンが何らかの『術』だと判断した時には、

「トルトニストルトニス」

女の子は既に詠唱を終えており、ゴーレムは左拳を前に突き出し、それは起こった。

ドゴンッ！と、耳をつんざくような轟音と、視界を覆うような閃光を纏った白い稲妻が、三つの爪の中から発射された。

ほぼ同時に発射されたゴーレムの拳を消し飛ばし、そのまま肢体の中心に突き刺さる。

それは天から降る落雷そのものだった。

あまりの光量にユアンは目を瞑っていたが、またすぐに瞼を開く。

「……嘘だろ」

そして、第一声は再びの絶句だった。

簡潔に言おう。

ゴーレムの胴体に直径二メートル以上ある風穴が空いていた。

一瞬動きを止めていたゴーレムだが、全身に亀裂が走りガラガラと崩れ去る。

崩れる音が悲鳴のように聞こえたのは気のせいか。

大量の遺跡の残骸に地面が震える。灰色の粉塵が視界を覆う。

(……止まった?)

灰色のカーテンが視界を仕切っているせいで確信はできないが、十中八九ゴーレムは壊れているだろう。

(何だかよくわかんねーけど、助かった)

ようやく安堵の息を出したユアンだが、そこで再び女の子の声が聞こえた。

「あーもうこれうっとうしいっ!」

投げやりの声が届くと同時に、前方から不自然な風が吹いた。それは粉塵を攫って行きユアンの視界を解き放つ。

目の前に現れたのは魔女のような女の子。

彼女はユアンに視線を向けると、のん気な声で言葉を発する。

「やっほー 大丈夫だったあ？」

### 3 落ちてゆく

真っ暗な遺跡の中を歩いている人影が二つあった。

「あのゴーレム、体が風化してたから簡単に穴開いたね」

「あんたの術の威力がすごかったただけだと思うけど」

「えーそんな事ないよー」

ユアンは魔女のような格好をした女の子と、なぜか一緒に歩いていた。と言うか彼女が勝手に付いて来ているのだ。

「でも君、もうちょっと周り警戒した方がいいよ。誰かが色々見るかもしれないし」

その言葉にユアンは、ドキッと肩を大きく震わせた。

「もしかして……、見てた？ 俺の」

豪快な滝を、とまでは流石に言えなかった。彼は口に溜まった唾を飲み込み、彼女の返答を待つ。しばらく考え込んでいた女の子は人差し指で自分の頬を触って、

「さあ？」

とか言いつつも顔はとても面白そうに笑っている。

彼女は確実に見ていた。態度から見てそう確信したユアンは、どうしようもなく死にたくな<sup>レ</sup>った。名前も知らない女の子に自分の息<sup>ア</sup>

子を見られていたのだから、当然と言えばそうなのだが。

「それよりさ、君はどこに向かっているの？」

そんな彼の心境などお構いなしに、女の子は普通に話し掛ける。

この娘かなりの大物だな、と思いつつ、

「どこって、荷物が置いてある場所だけど」

目的地を簡潔かつ曖昧に言った。と言うかあまり言葉を交わしたくないのだ。恥ずかしいから。

「それってあの煙が上がってるところらへんなの？」

向かっている方向から察したのか、女の子は小さく細い指で遺跡の中から上がっている煙を差す。ユアンもそれを確認して、

「ん？ まあそうだけど……、って煙？」

思わず足を止めてしまった。

「？ ーしたの？」

突然立ち止まったユアンに女の子は首を傾げているが、彼は気にも止めていない。

どうして煙が上がっているのか。すぐには分からなかったが、今までの事を全て思い返してみても、心当たりを見つけた。

「確かあっちの方向って……」

ゴーレムの右腕が吹っ飛んでったような。

そう思った瞬間。

ユアンの頭の中に最悪な状況が思い浮かんできた。

それは。

自分の荷物が上から降って来たであろう遺跡の残骸に、押し潰されていくのではないかと。

あれは煙ではなく、ゴーレムの右腕が落下した際に起こった粉塵なのではないかと。

気付いたら彼は走り出していた。

女の子を一人置いて。全力で走っていた。

そして案の定、彼の視界には最悪な光景が映っていた。

「嘘だろ、俺の荷物が……」

そこには元々、小さな神殿が建っていた。小屋ぐらいの大きさだ。四本の柱が正方形の石段の角に立っていて、屋根も崩れていなかった。おそらく、この遺跡群の中で唯一崩れずに建っていた神殿だったのだろう。

だが、今はもう粉塵が立ち込める瓦礫の山に成り果てていた。神殿に置いてあったユアンの旅の荷物を埋めて。

「そんな、俺はこれからどうすればいいんだ……」

バッグは二つあった。一つは旅の着替えなどが入っていて、もう一つは食料が入っていた。

しかし、それらはもうない。

旅に必要な物資は全て瓦礫の下だ。

試合に負けたプロボクサーみたく、地面に膝を付いたユアン。そんな心を砕かれた少年に、後ろから慌てて追って来た魔女のような格好をした女の子が、

「うわーこれはひどい。なーに？ 君の荷物この下にあつたの？ ついてないねー。まあ死ななかつただけマシじゃない？」

と、他人事自分には関係ありません感丸出しな事を言ってきたので、ユアンは思わず、

「マシじゃねーよっ！！！」

ツツコンでいた。

「このままじゃ確実に死ぬよ餓死するよ飢え死にするよ食料ないんだぞそんな状態でこんな荒野の真ん中で生きていける訳ねーだろどーすんだよこのままじゃ誰にも見送られずに天に召されるよ子ども天使が迎えに来ちゃっうよ何でいつもいつも俺はこうなんだあああああああああああつ！！！」

遺跡にユアンの悲痛な叫び声が響き渡ったが、隣にいる女の子は全く変わらぬお気楽態度で、

「子ども天使いいじゃん。きっと幸せになれるよ。あの世で」

「そんな幸せまだいらなから幸せになるならこの世でなりたいからっ！！！」

「大丈夫。天国に行く時はあたしがちゃんと見送ってあげるから安心して」



のバッグだけ飛ばされたのだろう。

経緯は何にせよ、その事実によアンは泣きそうになった。  
絶望の中からの、ほんの僅かな天の救いに。

「これで何とかなるでしょ？」

「……ああ」

あれさえあれば旅は続けられる。たとえ食料が入っている方のバッグじゃなくても、きつと何とか

「ならねーよっ！ー！」

食料がなければ餓死エンドは変わらない。天からの救いは本当に  
僅かだった。

再び頭を抱えて唸っているユアンだったが、そこで不意に気配を  
感じた。

(……?)

誰かに見られているような感じがして、彼は頭を上げようとする。  
だがその前に、

背中を裂くような殺気が襲った。

「ッ！」

先程までの能天気な絶望気分が弾け飛ぶ。

ユアンは反射的に後ろを振り返っていた。  
しかしそこにあるのは暗闇に沈む遺跡だけ。変わったところは何もない。

(何だ、今の……)

尋常な殺気ではなかった。もしかしたら今の一瞬で自分は死んでいたかもしれない。そんな風に思わせられるほどの悪寒を感じた。

(気のせい……、じゃねーよな)

あれほどの気配が思い違いだったとは考え難い。現に体中から気持ちの悪い汗がじつとりと纏わりついている。

当初、この遺跡には自分以外誰もいないと思っていた。こんな滅んだ都に住んでいる者などいる訳がないと思っていた。

だが自分以外に人はいた。  
隣に立っている女の子が正にそれだ。

他にも人がいるかもしれない。ここに住んでいる人とかがいるかもしれない。もっと得たいの知れない何かがあるかもしれない。

(何にしても……)

ここは危険だ。

彼はそう直感した。

急いで遺跡から出ようと思い、バッグを取りに行こうと一歩前に出たユアンだったが、

「ごめんね」

不意に後ろからそんな声が聞こえてきた。悲しそうな、辛そうな

音色で。

それが魔女のような格好をした女の子のものだと判断したユアンは、彼女に視線を向けようとして、

背後から強烈な突風が吹きつけてきた。

髪が靡き、衣服に引かれて体が揺れる。

そして気が付くと、

ユアン「バロウズは大空を舞っていた。

「……は？」

三六〇度見渡す限りの星空の中、間抜けた声が口から漏れる。

空中で数秒、無重力状態が続いていた彼の体が地上からの重力に引かれ出すのと、

彼の表情がじわじわと青白くなっていくのは比例していた。

「なつななつ、なんじゃこりゃあああああああああああああああああああ  
ああああああっ!?!?」

ついでに本日六度目の絶叫が迸り、

そうしてユアンは、上空一〇〇メートル地点から地上へ落下していった。

## 1 空腹

ユアン「バロウズは生きていた。

上空一〇〇メートル地点から落下しといてどうして生きているのか。

それは本人にも分からない。体はどこにも怪我をした部分はなく、相変わらずの健康体だ。

ただ、気が付いたら遺跡の外側に倒れていて、夜が明け陽が昇っていた。

「まったく、何であいつはいきなり俺をふっ飛ばしたんだ？」

そんな疑問も、一週間経てば案外どうでもよくなってしまうもの。

「現在時刻はお昼過ぎ。」

荒れた大地に容赦なく降り注ぐ太陽の光の下、彼は転がっていた長い木の枝を杖のように地面に突きながら、覚束ない足取りで歩いていた。

「……くそ、もう季節的には秋の中間ぐらいだって言うのに、なんでここ一週間に限って真夏日が続くんだよ」

ユアンは一度立ち止まって、ギラギラと照り付ける無慈悲な太陽を睨みつける。だがそんな事をしたところで太陽の野郎が日差しを和らげてくれる訳もなく、光を直接見たせいで視界が眩んで倒れかける。

「ちくしょう。バッグの隣にお供え物みたいに置いてあった食料と

水は四日前に底を尽き、照り付ける太陽のせいで体力はどんどん奪われて、夜は寝たいのに腹が減りすぎて眠れない。金はあるからどこかで飯を食いたいんだけど、辺りに町の気配はなし。

まあ当たり前って言ったら当たり前なんだがな。予定じゃ後三日ぐらいは歩かなくちゃいけないはずだし……。ふっふふ、ここまで来ると笑えてくる。まさに不の輪廻だな」

笑っている場合ではないと分かっているが、こんなどうにもならない現実を突きつけられて正常でいる方が難しい。

ユアンは再び歩き出したが体は不安定に左右に揺れている。歩くスピードはハイハイする赤ちゃんより遅い。

視界が歪む。目の前の風景が霞んで見えてくる。

頭がくらくらする。いつ意識が跳んでもおかしくない極限の状態だ。

汗はもう出ない。そんな水分は既に体の中には存在しない。

「……………これから俺、どーなるんだろ？」

ほとんど停止しかけている脳みそで、ユアンは軽く自分の未来を想像してみた。

まず最初に日射病と言う言葉が浮かび、次に脱水症状と言う症状名が浮遊する。トドメに熱中症と言うとんでもない病名が頭の中を支配して、

「……………これは、マジでシャレになんねーぞ」

乾いた喉から出たのは霞んだ絶望の言葉。歩く力を無くしたユアンは乾いた地面に膝をつき、そのまま焼ける大地にうつ伏せで倒れこむ。ジユワ、と肉が焼けるような音がしたけどきつと幻聴だろう。

幻聴だと信じたい。

カラン、と木の杖が地面に転がり落ちる音が耳に届くのを最後に、視界の全てが暗闇に支配される。

そうして、不幸な旅人ユアンは荒れた大地の真ん中で動かなくな  
った。

## 2 出会い

額に冷たい感覚が伝わってきた。

「……………うっ」

鈍い痛みが頭の中を走り抜ける。そのせいで思わずうめいてしまった。

嫌な寝起きだ、と思いながらユアンは重く閉ざされた瞼をゆつくり開くと、視界に入ってきたのは『黒』だった。ただしその『黒』は完全なる『黒』ではなく、所々小さな光が輝いている『黒』だった。

そう、例えるなら星空。

「……………」

素直に綺麗だと思った。光の数は少ないが、それでも綺麗だと思った。そんな事を考えられるぐらいに思考が回復したユアンはそこでようやくある事に気付く。

「……………何で俺、こんなところで寝てんだ？　つーか何で俺生きてんだ？」

普通なら荒野の真ん中で干からびていたはずだ。別に死にたかった訳ではないが、そうなっていないければ不自然だった。

額には湿ったタオルが置かれていて、明らかに誰かに看病された感丸出しだ。

すると、

「そんなの私が助けたからに決まってるんだよ」

突然、そんな風に女の子の声が聞こえた。音源を辿って首を右に振ると、そこには小さな少女が地面に女の子座りをしていた。

「おはよう。って言っても、もう夜なんだけどね」

ひまわりのように微笑む少女。

夜だと言うのにその笑顔は妙に輝いているように見えた。

髪の色はブラウンで長くもなく短くもないセミロングヘア。白く柔らかそうな肌に、毛先が外側に若干ウェーブがかっているのが印象的な娘だった。

歳は十二・三歳ぐらいで背丈も歳相応かそれ以下。まだ幼さが残っている顔つきだが、将来はきっと美人になるだろうと思うほど整っている。

服装はひらひらした白いマキシワンピースの上に、前を開けたまま丈の長いベージュのナチュラルコートを着ている。彼女の隣には黒いツイード帽子と荷台の付いた大きなスニーカーが置いてあった。

服やブーツには所々汚れが目立っているが破れたり、穴が開いていたりはない。どうやらかなり上等な物のようだ。

「でもびっくりしたよ。こんなところに人が倒れてるなんて。最初見たときはもう死んじゃってると思っちゃって穴の中に埋めてあげようとしたんだけど、土かぶせてる途中で体が動いたときはかなり

焦ったね。危うく生き埋めにしちゃうところだったし」

てへへっ、と笑いながらとんでもない事を言い出す少女にユアンはぎょっとした。

(だから俺の体はこんなにも砂だらけなのか)

ま、でもぎょっとしたり服が汚れるだけで済んで良かったなー、とポジティブな方に考え直すと、

「っーか何で俺を助けてくれたんだ？」

「何でって、人を助けるのに理由なんているの？」

「いや、別になくてもいいんだけどさ」

ユアンは曖昧な表情で言う。

「でもあえて理由を付けるなら、話し相手がほしかったんだよ。一人で旅するのって結構寂しいでしょ？」

まるでユアンもそう思っているのだろうと決め付けるような言い方だった。

(話し相手がほしかった、か)

その気持ちは分からない事もなかった。

実際ユアンは一週間前に魔女っ娘見たいな女の子に出会って以来、誰とも会話していなかった。途中で誰とも合わなかったからだ。そもそもこんなところで人に会うほうが珍しい。

となると、この会話は一週間ぶりと言う事になる。

会話が出来ないと言うものは結構精神にくるものだ。

普段おしゃべりな人に一週間誰とも喋らずに過ごしてみても、言っても一〇〇パーセントそれは達成されないだろう。それはもうその人にとって拷問に近い行為なのだから。

例えあまり喋らない人でも、一言も喋らずに過ごすのは不可能と言っていていいだろう。

ただ、誰かと喋りたいからと言ってやたらめったら他人に話し掛けるのも頂けない。

世界にはたくさんの人たちがいる。

一〇〇人いれば一〇〇通りの人格がある。

誰とも何ら隔たり無く会話が出来る人もいれば、その逆で人見知りな人もいる。もっと大げさに言うと、道行く人が皆悪人でないように、皆善人も限らないのだ。

詰まるところ何が言いたいのかと言うと、こんな荒れた大地の真ん中でぶっ倒れている得体のしれない人間を助けるなんて馬鹿かお前？ という事だ。もしかしたらそいつは何処かの刑務所から脱獄した死刑囚かもしれない。助けようと近づいた途端、ナイフで脅してきて身包みを全て剥がされるかもしれない。もしくは、最悪殺される事もあるだろう。

さすがにそんな事はないだろう、いくら何でもネガティブ思考すぎるだろう、と思う奴もいるかもしれないが、実際ユアンは以前これと似たような目を経験済みだ。

だから彼は経験上、彼女に言う。

「お前なあ、そんな理由で無暗に他人を助けると、そのうち大変な目に遭うかもしんねーぞ」

「別に無暗に助けられている訳じゃないよ。ちゃんとその人の顔を見て、良い人が悪い人を見分けてるしね」

「それを『無暗』って言うんだよ。外見だけで人間見てんじゃねーぞ」

「大丈夫だよ。私の人を見る目は確かだし。貴方だって別に悪い人じゃないでしょ？」

小首を傾げて尋ねる少女にユアンは一瞬たじろぐが、すぐに気を取り直して、

「さあ？ どうだろうな」

彼は彼女の質問をわざとらしく曖昧な言い方で答えると、また辺りを見渡す。

二人がいるのはやはり荒れた大地の真ん中。しかしすぐ隣に枯れた小さな木が一本植わっている。

「そう言えばどうしてあんな所で倒れてたの？ やっぱり食料が底を尽きたとか？」

「まあそんなところだ」

彼は少女を一切見ずに答える。

「食料の買い溜めしてなかったの？」

「してたさ、もちろん。でも一週間前、俺のちよつとした好奇心のせいで機動しちまったゴーレムに追い掛け回された拳句に、約二週間分の食料が入ったバツクを潰されてちまったんだよ」

「ゴーレムに？ こんな荒野の真ん中で？」

「ああ」

「……」

「なんだよその可哀想なものでも見ているような目は」

「貴方つてもしかして不幸なお人なの？」

「幸運なお人じゃあないだろうな」

「……、」

少女は俯いて黙りこんでしまった。ユアンにはどうして少女が黙り込むのか分からなかったが、数秒経ってから彼女は突然顔を上げると、

「そう言えばまだ自己紹介してなかったね」

いきなり何だよ、とユアンが思っている事などお構いなしに、彼女はそのまま話を続ける。

「私の名前はキャロル＝マーキュリー。よろしくね」

「……」

勝手に自己紹介を始めたキャロルと名乗る少女は、『貴方の名前は？』と首を傾げて尋ねてくる。一応は命を救ってくれた恩人なので名乗らない訳にもいかず、ユアンはいかにも面倒臭そうな表情＋素っ気ない態度で言った。

「ユアン＝バロウズだ」

と言うか人前で自己紹介をするのが苦手なだけだったりする。

「ユアンね、よろしく」

いきなり呼び捨てかよ、と思ったが口には出さなかった。ユアンは差し出された小さな手を握って握手すると、すぐに手を放して彼女から目を逸らすように再び辺りを見渡す。

「……先はまだ遠いな」

「それでもないよ」

「あ？」

「あと一日ぐらい歩けば町につけるはずだよ」

あと一日で町に付く？ てっきりまだ三日は掛かると思ってたんだけど、と思ったが彼はこれも口には出さなかった。

「そんな事より貴方お腹空かせているんですよ？」

「まあそうだけど」

「私の食べ物に分けてあげてもいいよ」

「ホントか?!」

思わず大声を出してしまったユアンに、キャロルは無邪気な顔で『いいよ』と言う。

「でもね、その代わりに二つ条件があるの」

「……条件？」

意味ありげな言葉にユアンは何か言い知れぬ予感（悪い方の）を抱くと、キャロルはニコリとかわいく笑って、

「しばらくの間、私の命令ならなんでも聞く、『家来』になってほしいんだ」

### 3 家来

「思ったより早くついたね」

そう言ったのはキャロルと言う少女。

「はあはあ……、そっそっだな」

膝に手をついて息を荒げながら答えているのはユアンと言う少年。

(そりゃ早くも着くдарつ。全力で走ったんだからな。俺がお前を背負ってっ！)

結局ユアンは彼女の家来になる事なってしまった。

このまま食料に飢えて餓死するのも嫌だったし、彼女から食料を奪って逃げるなんて考えは答えるまでもなく切り捨てた。あと一日で町に付くなら何も食べなくてもなんとかなるかもー、とも思ったが、キャロルが目の前で心底美味しそうに干し肉やら干し魚などを食いやがるせいで、空腹に負けて食料を貰いうけてしまったのが全ての原因。

そして何よりの原因は、キャロルが出した条件を甘くみてしまった事。

(『家来になってほしい』と言っても相手は所詮子どもだ。そんなにキツイ要求はしてこないだろう)

当時のユアンはそう考えた。

そして案の定と言うべきか、予想どおり彼女は子どもらしく、唐

突な思いつきで、

「じゃあ町までわたしをおんぶしながら走ってね」

それから約十五時間、途中三回ほど休憩を挟みながら、彼はキャロル（と自分と彼女の荷物）を背負い走り続けた。そうして二人はようやく町を見つける事ができたのだ。

「走ってる最中、感覚が訳わかんなかった。もう一步も動ける気しねー」

「なに弱音吐いてるの？ まだ泊まる宿も見つけてないんだから、休むのはその後」

「ん？ ちょっと待て。今のお前の言い方だと、まだ俺ら一緒に行動するみたいじゃないか」

「？ わたしここでお別れなんて言っただけ？」

「……」

マジかよ、とユアンは絶句せざるを得なかった。

（これ以上こいつと一緒にいたら身がもたねーぞっ）

「って顔してるね」

キャロルのいきなりの言葉に、心臓の鼓動が一瞬大きくなった。

そんなユアンを見て彼女は小さく笑うと、

「大丈夫。もうあんな要求はしないから」

状況にもよるけど、と付け足すと、彼女は『行こ』と陽気な声でユアンを先導する。

「……」

一人先に歩き出したキャロルの背中を見ながら、ユアンは思う。  
気のせいかな、さっき一瞬だけ彼女の表情が暗くなったような気がした、と。

><><><><><

『リーヴァリー』

町の入り口にそう書いてある看板が立ててあったから、おそらくそれがこの町の名前だろう。

町のほとんどはレンガ造りの建物で、二階から三階建ての家が多く並んでいる。地面は平らな石が敷き詰められている石畳の路面で、見た目はとてもおしゃやかな感じだった。しかしまだ太陽も沈みきっていないのに、町の外を歩いている人が極端に少ない、かなり静かな町だった。

「なんだか寂しそうな町だね。人が全然歩いてないよ」

少し小声で言うキャラルに対し、ユアンはつまらなそうに、

「世界にはたくさんの町がある。大きな町や綺麗な町があるように小さな町や汚い町もある。だから活気がある町があればその逆で気を無くした町もあるもんなんだよ」

「それ誰の受け売り？」

「誰のでもねーよ」

それは長い間旅をしているユアンだから言える事だった。旅の途中、近くの町に立ち寄る事なんてごく普通の事。立ち寄らなければ旅に必要な物資を調達できないからだ。

「私はまだ旅に出てから日が浅いからそう言うのはちょっと分からないかな。私の生まれた町はとも賑やかだったから」

彼女の声は何故かとても小さく、弱弱しかった。そんな彼女を尻目に見ているユアンは唐突にこんな事を尋ねた。

「そう言えば、なんでお前みたいな子どもが一人で旅なんかしてるだ？」

思えばどうして最初に尋ねなかったのか、不思議なほど単純な質問だった。だが、

「それは……」

彼女は言葉を詰まらせた。何かいけない事を聞いてしまったのか？ とユアンは思っ、なんとかフォローを入れようとする。

「別に追及するつもりはねーから。言いたくなったらまた言ってくれ」

数秒の沈黙の後、『うん』と小さく頷く少女を見て、ユアンは背中  
中に背負っているバックを背負い直す。

そのまま二人は町の中央通だろう、広い石畳の道を並んで歩いて  
いく。

そして二人は宿を見つけるまで、一言も言葉を交わさなかった。

## 4 宿探し

片側三車線の道路並に広い石畳の道に、両脇から挟むように建ち並ぶレンガの建物。

その内の一つに、『HOTEL』と大きく書かれた看板が立ててある建物があった。その建物は四階建てで、他の建物と比べると幅はあまりない。

そんなホテルの前で大小二つの人影が立ち尽くしていた。

「何やってるの？ 早く入ろうよ」

キャロルは、いつまでたっても突っ立ったままでホテルの中に入ろうとしないユアンの腕を引っ張って、引き入れようとしている。だがユアンはそこから動こうとしない。いつまでたっても看板を見上げたままだった。

（……このホテルは、果たして本当に『ただのホテル』なのだろうか）

ユアンの頭から知恵熱が噴出す。彼は頭をフル回転させてある事を考えているのだ。

そのある事を説明するには少し昔話をしなければならぬ。

それはまだ彼が彼の『師匠』と旅をしていた時の話。

><><><><><

その日、ユアンは師匠に命令されて、旅の途中で立ち寄った町で宿を探していた。

町は深夜十一時過ぎだというのに祭のように活気に溢れていて、とても光輝いていた。

彼は周りをキョロキョロしながら歩いていると、ふと、木造の建物だが古びた感じはなく、ピンク色に輝く装飾が施されている二階建ての建物が視界に入った。その建物の二階には『HOTEL』と書かれた看板が掛かっている。

「まずはここだな」

そう言うと彼は迷わず入っていく。

店の中は薄暗かったが、とても洒落たところだった。客も多く（主に男女の二人組み）結構繁盛しているようだ。

「ここなら師匠も納得するだろ」

うんうん、と相槌を打つ無知な純情少年ユアン。

彼の師匠は汚い宿やホテルは極端に嫌う性格なので、値が張っていても綺麗なところを見つけないと半殺しにされかねないのだ。

ユアンは部屋の予約を取るために受付まで行くと、従業員のおねーさんに突然年齢を聞かれた。

予約を取る際に年齢を聞かれる事はたまにある。そしてそう言うところは大概『未成年の方は予約を取れません』とか何とか言い出すから、その時は迷わず『俺は二〇歳です』と言い張れ、と師匠に教えられていた。

ユアンは師匠の言うとおりに『俺は二〇歳だー！』と大声で叫ぶ

と、従業員のおねーさんは『うふふ元気な子ね』と笑った。どうやら信じてくれた(?) ようで、今度は何名様かを尋ねてきた。ここは普通に自分を含めて二名だと言ったユアンは、そのまま部屋の番号を教えてもらい鍵を受け取った。

外で師匠を待つこと一〇分。

遅い何してやがったんだバカヤロー！ と言ったら地面に埋められた。師匠は優しくないので頭まで埋められた。地面の中で大声で謝ると掘り出してくれたが、一発顔面を思い切り殴られ一〇メートル以上吹き飛ばされた。

これからはなめた口を聞くのはやめよう、と心に誓いながらユアンは師匠を予約したホテルまで案内する。

ここで先に説明しなくてはならない事が一つある。

それはユアンの師匠が女で、しかもかなりの美人だという事だ。

見た目は二〇代前半で背は一七〇センチ以上と女性にしては高く、さらに肌は白く体は出る所は出ていて、締まる所はきっちり締まっているナイスボディ。化粧をしなくても十分美人な顔立ちだと言うのに、さらにその美しさを際立たせるために施されたプロ顔負けのメイクと、黄金のように輝く金髪のロングヘアで道行く男心を一発ドキーン！

服装も服装で当時の彼女は、足首まであるオレンジ色のゆったりとしたスカート。なのだが腰から下へ、チャイナドレスのように切断されているせいで、歩く度に隙間から真っ白な生足がこんにちとはさようならを繰り返している。そして上は豊満な胸に巻いてある布が一枚と、背中の中間までしかない上着を羽織っている。前は開きっぱなしで、おへそと胸の谷間が丸出しと言つ派手すぎるセン

スだった。

結局のところ、ユアンの師匠は容姿も服装も人並み外れているのだ。

まあ外見がそんなだから回りに注目されがちで、時々馬鹿な男どもがナンパしてくる。

そいつらは言うまでもなく師匠に半殺しにされるか、一生男として生きられない体にされている。意外にガードはダイヤモンドより固かった。

話を元に戻して、二人は目的のホテルの前までやってくると同時にそこで立ち止まる。師匠はゆっくりとした動作で看板を見上げ、数秒何も喋らなかつた。

しばらく経って再びゆっくりとした動作で視線を下げ、そのままユアンに視線を向ける。彼は何の気なしに師匠と視線を合わせた途端、ゾツと全身に寒気が走った。

笑顔。

師匠の顔には完璧な笑顔があつた。

ユアンは知っていた。師匠が完璧な笑顔を作る時、それは大きな災いの前触れだと言う事を。そして、

ダンッ！！ と彼女は地面をしっかり踏み締めて、右の拳を岩石のように硬く握り締めると、

「このセクハラ野郎が！ どっからどう見てもラブホじゃねーかああああああああああああああああああああああああああああ

あッ！」

絶叫と共に硬く握り締められた拳が、

ドンッ！！ と鈍い音を立ててユアンの顔面にめり込んだ。

足の裏が地面から離れると同時に空中で体を回転させながら飛んでいく。そのまま五〇メートル以上飛んでいったユアンは、地面に大の字になりながら気絶した。

これが最初の失敗であり、『セクハラ野郎』と言うあだ名がついた記念すべき(?)日でもある。

それから『これが最初』と言う事はもちろん二回、三回と同じような事を繰り返し、その度に殴り飛ばされていた。ついでに最大飛距離は一七メートル。腕力だけで五〇キロ近い人間の体をそのまま飛ばすなんて、自分の師匠ながらつくづく怪物だなと思ってしまう。

まあそんな事が過去にあったユアンは、普通のホテルと普通じゃないホテルを間違えないように、宿選びはかなり慎重なのだ(普通は間違えないのだが)。

しかも今回は特に注意をしなければならない。なぜなら現在、彼の腕を引っ張りながらホテルの中へ一緒に入ろうとしているのは、見た目十二・三歳の女の子だ。もしこの『HOTEL』が『LOVE』の付いているホテルだったらどうする? どころかどう見ても幼い女の子を連れ込んでやましい事をしようとしているただの変態

だ。

だからここは慎重にいかねばならない。  
自分の名誉のためにも。

(どこかに、このホテルは普通のホテルだと証明するものはないのか……！)

ユアンはもの凄い形相で建物の隅々まで目を配らせる。そんな彼を見てキャロルは怪訝な顔をしながら尋ねてきた。

「ねえ、さっきから何ジロジロしてるの？ 病気なの？」

「ちげーよ、これは確認だ。このホテルが普通のホテルかどうか確認してんだよっ」

「言ってる意味がいまいち分かんないんだけど」

「いーから子どもは黙ってる。これは大人の問題だ」

「むっ、なにかなその言い方。大人の問題って貴方もまだ子どもじゃないんやん」

「お前よりは大人だよ」

会話中もホテルの正面を凝視しているユアンに対し、キャロルはさらに強く彼の腕を引っ張る。するとその努力が実ったかのようにユアンの体がゆっくりと前に進み出す。

(軽く見渡した感じじゃ普通のホテルのようだな)

でもまだ気は抜けない、とホテルの中に入った途端に部屋の中に隈無く視線を向ける。

内装は質素でこれと言って目立つものは何もない。元々部屋が狭いのには無駄に長いソファを置いてあるせいで余計狭く感じる。すると受付らしき足の高い机の向こうに、六〇歳過ぎの白髪が目立つおじいさんが座っていた。おそらくこのホテルのオーナーだろう。

「いらっしやい。部屋なら空いとるよ」

とてもゆっくりとした口調だった。

はあ、とユアンは周りに向けている視線を緩めて気の抜けた返事をした。そしてしばらく時計のチクタク音だけが場を支配すると、おじいさんは机の引き出しから部屋の鍵を取り出した。

「三階の三〇二号室が空いとるから、そこを使ってくれ」

口調もゆっくりなら動作もゆっくりらしく、映画をスローで見ているかのような動作でおじいさんはユアンに部屋の鍵を……、投げつける！ もの凄いスピードで！

「え？」

いきなりプロ野球のピッチャーが投げる球並のスピードで飛んできた鍵に、ユアンは反応できず、そのまま鳩尾にクリーンヒット。あまりの衝撃に床の上でのたうち回っていると、

「おいおい、情けないのー最近の若いもんは」

「……いきなり何すんだよっ！ こんな不意打ち食らわせやがって」

「不意打ち？ どこがじゃ。わしは真正面から投げたじゃろう。フツーに」

「どこがフツーだ！ 明らかに異常だろ今のは！ それに俺たちまだここに泊まるなんて言っていないだけどっ！」

「言っただけでもどうせ泊まるんだろ？ お前さんらは。それにその鍵を受け取った以上、お前さんらがこのホテルに泊まる事は決めたのじゃ。異論は認めん。ついでに言うところの宿はお前さんたちのような奴のためにあるのだからな。分かったらさっさと部屋へ行つて来い」

「……なんだよそれ」

思わずうめいてしまったユアン。

「言っただけでもどうしようもないよ。今日はもうここに泊まる」

今まで黙っていたキャロルの言葉にユアンは一瞬黙るが、やがて『そうだな』と呟くと鳩尾を押さえながら立ち上がり、三階に続く階段に向かう。

「まったく、何者だ？ あのじいさん」

ユアンは肩越しに後ろを振り向いて、もう一度おじいさんに視線を向ける。

「……」

だが、やはり普通の年寄りにしか見えなかった。

二人は狭くて急な階段を登っていき、三階にある三〇二号室の前で立ち止まる。

「ここだな」

「うん」

確認するようにひと言ずつ言葉を交わしたユアンとキャロル。

そして鍵を開けてドアノブに手を掛けたユアンはここに来て、ふとある事を思う。

(……この部屋って、二人部屋だよな?)

#### 4 宿探し（後書き）

ほんのちょっとだけユアンの過去を出してみました。まったくもってくだらない話ですけど……w

## 5 予感

時計のチクタク音が響く小さなホテルの小さなロビーで、六〇歳ぐらいの白髪が目立つおじいさんが受付の前で新聞を広げて座っていた。

だが彼の視線は新聞の文字にはいつていない。新聞を端に見て、ホテルの玄関のさらに向こう側、太陽が消えて完全に闇へ沈んだ石畳の道を眺めている。

「全く、なかなか面白い客が来たものだ。まあちと物足りない感があったが」

おじいさんの口調は先ほどのゆっくりしたものではなかった。どこか鋭さを感じさせられる。

「でも、今はそんな事などどうでもいいか」

誰もいないはずの真っ暗な石畳の道。しかし彼はそこに強い視線を注ぎ込んでいる。

「大勢でぞろぞろと、ここは団体客は受け付けておらんのだがな」

まるで何かを威嚇するように。

「……今夜は荒れるかもしれないな」

暗闇の向こう。そこに蠢くのは複数の影。

「もつとも、荒らすのはわしなんだがな」

不吉な言葉を放ったおじいさんは、椅子から消えた。

## 6 寝る所

「……まじかよ」

ユアン「バロウズの勘は妙なところで良く当たる。

彼は目の前の光景に絶句していた。彼の視線の先にあるのはあるホテルの一室。

そう。

『一人用』の普通の部屋だ。

「やっぱり、予想どおり狭い部屋だね」

そんな風に言ってくるキャロルを置いて、ユアンは思考をフル回転させる。

(どういつつもりだあのじじい！)

借りた部屋は一人用。本当に寝るだけの部屋らしく風呂やトイレなどは一切ない。あるのは一人用のベッドと小さな本棚、両開きの窓に彼より少し高いクローゼット、それと部屋の隅にある洗面台だけだった。

次いでその部屋を借りたのは二人組みの客。十五・六歳の少年と十二・三歳の少女。

このホテルはどうやら普通のホテルのようだ。しかし旅の途中でたまたま出会った少女と、(自分で言うのもなんだが)どこの馬の

骨とも分からない男が、同じ部屋で寝泊りするのはさすがにヤバイだろ、とユアンの健全な心がそう訴えている。

「……なあ、ちょっと聞いていいか？」

「なに？」

「俺たちここに泊まるんだよな」

「ん？ここに泊まるからここにいるんでしょ？なにいきなり訳の分からないこと言い出してるの？貴方、やっぱり病気なの？」

「いや病気じゃないけどさ。お前、この状況で何か思わないわけ？」

「なにかなんて曖昧な言い方じゃ分かんないけど」

言い難い事だからわざと曖昧にしてんだよそんなぐらい察しろ、とユアンが心の中で毒づいていると、不意にキャロルが、あつと何かを思いついたような表情をする。

「もしかして貴方、今夜どこで寝ようか迷ってるの？」

何かひっかかる言い方だったが意味的には間違っていないなかったの  
で、ユアンは軽く頷いて、

「ベッドは一つしかないし、勝手に他の部屋で寝ようにも鍵がないから入れないし。さすがに一緒に寝るってのは色々まずいから、つまり俺が言いたいのは……」

「どっちかが床で寝なきゃいけないってことでしょ？」

二人はしばらく黙り込む。ユアンは部屋の床を眺めていた。毎日掃除はしてあるようだが、もともと古いホテルらしく色々な染みや汚れやらがこべり付いている。ここは男であるユアンが率先して床を選ぶべきなのだろうが、やはりそれはできれば遠慮したい。誰だって硬い地面よりふわふわなベッドの方が良いに決まっている。

「こーなったら下のじいさんに頼んで部屋を代えてもらおうしかなさそうだな」

ユアンの意見に同意するように、キャロルは一回だけコクリと頷く。

><><><><><

先に結論を言っておこう。

結局、二人用の部屋に代えてもらう事はできなかった。

別に断られた訳ではない。ホテルのオーナーであるおじいさんが何処にもいなかったのだ。だがそんな事では諦められなかった二人は、受付の引き出しからこっそり鍵を入れ替えようとも考えたが、どの引き出しも鍵が掛かっけていて開けられず、ぶっ壊してやろうかと思ったユアンだったが『さすがにそれはダメだよ』とキャロルに注意されたため、仕方なく部屋に戻ることにした。

「……………」

「……」

部屋の壁の片隅に掛けられている、丸い時計のチクタク音が響き渡っている。

なぜか二人は沈黙していた。両思いの男女が気まずさのあまり喋れないような空気だ。

その後、これと言って何かが起こった訳でもない。部屋に荷物を置いてそのまま二人とも背中を向け、ベッドを挟むように腰を掛けた。ただそれだけだった。

そんな沈黙が数秒続くと、ついに耐え切れなくなったユアンは、

「そつそろそろ夕飯でも食いに行くか？」

なぜか緊張しながら尋ねると、キャロルは『うん』と返事をした。

## 7 一筋の光

静寂が支配する夜の大通りに、一筋の光があった。  
その光は剣のように鋭く、強靱だった。

一筋の光は動き回っていた。それこそ目で追うには速すぎるスピードで。数秒、その場に光の残像が残るほどに。闇の中に蠢く複数の黒い影を切り裂きながら。

赤い液体が宙を舞う。混乱しているような低い悲鳴が聞こえる。

次々と地面に沈んでいく影と、その場から一刻も早く逃げ出そうとしている影と、光に対抗しようとする影が入り乱れる。

しかしそれを遠くから見たら、虐殺の現場でも眺めているような一方的な光景だった。

虐殺を行っているのは一筋の光。虐殺に遭っているのは複数の黒い影。

それはまるで光と影の戦いだった。

いや、光による影への一方的な制裁、と言った方が正しいかもしれない。

一筋の光は一つの影を切り裂くと、また新たな影を追って動き出す。

すると一筋の光に対抗していた影の一つが、赤い炎を叩きつけようとする。

轟ッ！！ と荒々しく燃え盛る赤い炎は、しかし決して光には届

かない。なぜなら炎を出している付け根から斜めに切り落とされ、代わりに絶叫と赤い液体が溢れ出していたからだ。

影を切った光は、また新たな影に狙われる。

巨大なハンマーのような鈍器が一筋の光の上に襲い掛かった。だが光は動じない。その巨大なハンマーを影ごと両断すると、その後ろに銀色に輝く槍と剣を構えていた二つの影の間に一瞬で移動し、横に一線する。

飛沫が舞い、影は倒れて動かない。

徐々に減っていく影。一筋の光は影を切り裂く度に黒く染まり、一回振るって汚れを落とす。

悲鳴、絶叫、怒号に轟音。そして無言がその場の支配権を奪い取る。

両断し両断され、無言に怒号し悲鳴する。

そしていつしか影は消えていた。全滅したのか、どこかに逃げ去ったのか。一筋の光は標的を失ったことよって動きを止める。

再び静寂が夜の大通りを支配する。

一筋の光は夜空を見上げているように見えた。だが次の瞬間には光は消えていた。

そこに残っているのは、無残に切り捨てられた大小さまざまな影の残骸だけだった。

## 7 一筋の光（後書き）

台詞がないですね、はい。しかも短いしぶつちやけこれだけじゃ全くわからないと思います。伏線なんでこれも。

## 8 食事

今夜は星空がきれいだ。

片側三車線の道路並の幅を持つ町の中央通には、道を照らす街灯などはない。だが星や月、建物の中から漏れ出す光のおかげで割と明るかったりする。

やはり外出している町民はいなかった。建物の中から人の声は聞こえるが、誰も外を歩いていないせいで、どこか寂しさを感じる。

「やっぱり昼間に比べたら夜は冷えるね。もうちょっと厚着してこればよかったかも」

「別にすぐ店に入るんだし、その必要はないだろ」

「もー男は全然わかってない。冷えは女の敵なんだからね」

「なんだよそれ。どっかの方便か？」

「女の常識だよ」

辺りが静かなせいで二人の声は結構響いていた。

その時、地面から爆弾でも爆発したような振動が足に伝わってきた。

「？」

だがそれはすぐに収まり、また夜の中央通は静寂に支配されていく。微かに眉をひそめるユアンだったが、

「なんかやつぱりおかしいよ、この町。まだ寝るには早いのに、みんな家の中に閉じこもっちゃって」

キャロルがどこか不安そうな声でそんな事を言うから、あまり深くは考えなかった。

確かに彼女の言うとおり、まだ寝入るには早すぎる時間帯だ。日が落ちてからまだ一時間ちょっとしか経っていないのだから。

「いろいろあるんだろ。町の事情ってのがさ」

星空を見上げながらユアンはつまらなそうに答える。

><><><><><><

二人は並んで静かな夜の町を歩いていく。

そして夕方、町に入ってきた時とは反対側の町の出入り口付近まで行ったところで、一つの喫茶店を見つける。

新築なのかそこは他の建物よりも外装がきれいだった。

店の前には『Coffee Shop』と書かれた小さな看板が置いてある。その喫茶店は、カーテンの隙間から他の建物よりも強い光が漏れていて、複数の人の声が聞こえているのを考えると、どうやら数人客がいるらしい。

「この店は、他とは違って賑やかそうだな」

言ってユアン達は店の前までやってくる。

カランカラン、と扉を開けたら空っぽな音が聞こえた。一瞬店の中にいる店員や客が話を止めて扉に視線を向けるが、すぐにまた喋りだす。

店内は縦長で左側に長テーブルと一人用の椅子がずらりと並んでいて、その前が注文受付用のカウンターらしい。右側には四人から六人掛けのボックス席が五つほど並んでいる。

中にいる客は皆ゴツイ体つきの男ばかりで、一人でいる者からボックス席に四、五人固まっている者達もいる。煙草を吸っている人がいる辺り、どうやら禁煙ではないようだ。白い煙が店の中を漂っていて、未成年者にはあまりよろしくない環境だった。それに客は全員酒を飲んでいるようで喫茶店と言うよりは酒屋かバーに近い。

二人はかなり浮いていた。

だからと言ってまた他の店を探すのも面倒なので、ユアンはキャロルを先導しながらカウンターまで行くと、二人同時に一人用の椅子に腰をかける。するとカウンターに立っていた三〇代後半の筋肉質な男が、こちらに近づいてきて話し掛けてきた。おそらく店の従業員だろう。

「いらっしやい。注文は何にする？」

「えーっと、注文表みたいなのってありますか？ あつたらそれ貸してください。その中から選びますんで」

「おう。だつたらちよつと待ってな」

そう言つと筋肉質な従業員はカウンターの引き出しから、A4サイズの薄っぺらな本を取り出し長テーブルの上に置く。ユアンはそれを受け取るとキャロルとの間に本を開けて置いて、注文する品を選び出す。

「メニューは普通の喫茶店と変わらないな。お前注文決まったか？」

そんな事を言いながらユアンはキャロルの方に視線を向ける。すると彼女は、

「ぜんぶ」

と、一言。

思わずユアンはため息をついた。

「お前なあ、全部つて金はあるのかよ。つーかそれ以前に食いきれないだろ普通に考えて」

「わたしのお腹をふつうだと思ってる貴方、近い将来きつと痛い目みるよ」

「何で俺が痛い目みるんだよ」

「さー？ なんでだろうね」

「……」

思わせぶりの事を言うキャラルに対し、ユアンは怪訝な表情になる。

「なら貴方はなにを頼むの？」

「俺はまあカレーかな。最近食いたいなーって思ってたし。それとマカロニサラダとかもいいな」

「そっか、じゃあわたしもカルボナーラでいいや。あとステーキも」

「……わたしもってお前、何一つ俺と被ってねーじゃねーか」

そんなようなやり取りの末、二人はそれぞれ筋肉質な従業員に注文する。

それから五分間、テーブルの隅に置いてあったオセロで雑談をしながら遊んでいると、注文した品が一齐に長テーブルの上に並べられた。一品一品の量は普通と比べてやや多い、一・五人前ぐらいあるのだが今の彼らには関係ない。

実はユアンは一日前にキャラルから干し肉と干し魚をそれぞれ一切れずつ貰って以来、何も口にしていない。『二切れからは奴隷にレベルアップさせるから』と笑顔で言われたからだ。キャラルはキャラルで見た目に似合わず大食いらしく、自分より大きい豚の丸焼きぐらいなら三分で完食しまうらしい。

二人は一緒に『いただきます』と声を出して料理を一口、二口と食べていく。

><><><><><

そして食べ始めてから五分ちよつと経つた時には、二人は既に全ての料理を食べ終えていた。

「いやー久しぶりに腹いっぱい食つたなー」

「私はまだちよつと物足りないかも」

「お前あれだけ食ってまだ足りないのかよ」

彼女はこの五分ちよつとの間でカルボナーラは三回、ステーキは二回ほどおかわりしていた。しかもそれだけではなく、マヨネーズと塩こしょうで味付けされたジャガイモのサラダと、白米を三回も注文していた。

一体その小さな体のどこにそんなに入るんだ？ と疑問を持たずにはいられないユアンは、

「注文するのはいいけど、お前金はあるのか？」

今まで食べたものだけでも四〇〇〇ユード（四〇〇〇円と同じ）は越しているだろう。

旅人は大概お金をあまり持っていない。

ユアンにとつても今夜は結構痛い出費だ。それが四〇〇〇ユード（くどいようだが四〇〇〇円と同じ）まで来ると痛いじゃ済まない。旅に必要な物資が買えなくなってしまうからだ。

そんな事にも関わらずキャロルは無邪気な表情で、

「なに言っているの？ お金は貴方が全部払うんだよ？」

「……はい？」

聞き間違いだと思った。そう思ったからユアンは聞き返したのだ。しかし、

「だから貴方がわたしの分まで払うんだよ。貴方はわたしの家来なんだから、このぐらい当たり前でしょ？ それにわたしは貴方の『命』の恩人でもあるんだよ？」

「……」

聞き間違えではなかった。彼女は全てお前が払えと言ってきている。

「前々から思ってたけどお前……、Sだろ」

「？ Sってなに？」

こいつ素でSなのかよ将来本当に家来作って女王様とか言わせそう、と思ったが言葉にはださない。怒らせそうだから。

それに彼女が自分の命の恩人だと言うのは事実だし、期間限定だとしても今は彼女の家来だと言う事も前と同じで事実だ。彼はあまりにも大きな借りを彼女に作ってしまった。重すぎるぞ命の恩人。

「わかった。お前の飯代は俺が払うから、お願いだからこれ以上食わないでくれ」

ユアンは思わず頼みこんだ。これ以上何かを注文されたら財布の中が氷河期に突入してしまう。そんな事になったらもう旅なんてできなくなってしまう。だからユアンは懇願した。

「むうー」

そんな彼の言葉に、キャロルは頬を膨らませて不機嫌そうな表情になりながらも、一回ため息をつくと、

「しょうがないなー。今夜はこのぐらいにしといてあげるよ」

今夜は、と言う単語が気になったが、今は深く詮索しないでおこうと思った。

代金を払うためポケットから財布を取り出したユアンは、お金を筋肉質な従業員に渡しながらある事を尋ねる。

「なあ、なんでこの町は夜誰も外を歩いていないんだ？」

それは町に入ってから抱いていた疑問だった。キャロルもずっとその事が気になっていたようだから、ここでその理由を聞いておこうと思ったのだ。

まだ寝入るには早すぎる時間帯。

日が落ちてから一時間ちょっとしか経っていないのにも関わらず、町の住人は誰一人外を歩いていない。それにはおそらく理由がある。どうしても知らなければならぬと言う訳ではない。しかし、何となく知りたいと思った。

キャロルはユアンの言葉に興味を持ったのか、視線を彼に向けている。質問された筋肉質な従業員は『ああ、それはな』と最初に言

って、

「この町にある古い一つの言い伝えが原因なんだよ」

「言い伝え？」

「そいつを話すと少しばかり長くなる。それでもいいか？」

ユアンは首を縦に振った。どうせ部屋に戻っても後は寝るだけ。暇つぶしにはちょうどいいと思ったからだ。

それじゃあ話すぞ、と筋肉質な従業員は最初に区切って、

「それは今から五〇〇年以上も前の話だ」

## 8 食事（後書き）

ちなみにキャロルは食べても太らない体質です。

## 9 言伝え

この町には昔、『フォルティマグス最強の術師』と呼ばれる男が住んでいた。

その男は人や動物を無償で助けるために術を使い、本人もそれを生き甲斐としていた。町の住人は男に感謝し、皆友人のように接していた。

だがある日、男が愛していた一人の女性が不治の病に罹ってしまった。医者には余命一週間と先刻され、女性本人はもちろん、女性の家族、そして『フォルティマグス最強の術師』である男も嘆き悲しんだ。

男は女性の家族を励ますのと同時に、自分自身も励ますように『必ず彼女を助けてみせます』と約束した。女性の家族は男の言葉を信じた。男は今まで約束を破った事がなかったから。男には今まで助けられなかった者などいなかったから。

それからと言うもの男は時が経つのも忘れ、様々な医学書を読み、治癒の術式を学び、病を治すために死に物狂いで学んでいった。

そしてついに病を治す術式を完成させた男は、すぐさま走って女性の家に向かったそうだ。

走って走って走って走って……。

女性の家に着いた男は笑顔でその扉を開けた。

これで彼女を助けられる。これでみんな幸せだ。そう思いながら。

しかし、女性の家には誰もいなかった。女性本人も。その家族も。家具すらも無くなっていた。

あれから既に一ヶ月が経っていた。

対して女性の余命は一週間。

間に合わなかったのだ。

男はこのとき初めて約束を破ってしまった。

男はこのとき初めて誰かを助けられなかった。

その後、男は町に戻っていた。町の住人は男を見た途端、冷たい視線を向けてきた。

失望した、と。

町の住人はそう目で語りかけていた。

男は走った。走って走って走って走って走って……。

ただ只管に走った。全てを忘れようとするように。辛い現実から逃げ出そうとするように。

男の顔には絶望だけが濃く刻まれていた。

約束を破ってしまったことに対する絶望。町の住人に失望されたことに対する絶望。

そしてなにより、大切な人を失ったことに対する絶望。

男は生きる意味を無くし、気力を無くし、全てを無くした。

彼はもう、前には進めなかった。

気がついたら、男の手には一冊の本があった。

『アルス・ノトリア』

死者を復活させる事ができると言われる奇跡の書。

だが同時に『闇の書』と言われる禁書でもあった。中に目を通した者は例外なく闇の底に落ちていき、絶対的な悪に染まる。

しかし、男は迷わなかった。もう一度彼女に会えるならどんな事でもすると。どんな物にも頼ると。

どこまでも落ちていくと。

そうして男は『魔ジン』になった。

世界を破滅させるため、世界を闇に沈めるため、無慈悲な神を殺すため、

当初の目的を忘れた男は暴走し、荒れ狂う。

「わたしその話なら知ってるよ」

キャロルは唐突にそう言った。

「たしかそれって『大戦記』の裏話でしょ？」

「おお、嬢ちゃん物知りだな。その通りだよ。この話は世界的にも有名な『大戦記』の裏話。いや、その『大戦記』ができる前からある話だから前話になるのか？」

『大戦記』とは約四〇〇年前と約一〇〇年前に起こった二つの大きな戦争の物語だ。この話は全て実話らしく、約一〇〇年前に起こった戦争の戦場には、その時の傷跡がまだ生々しく残っているらしい。そんな事を思い出しながらユアンは筋肉質な従業員に金を渡すと、

「それでなんでその話が、この町の住人が外出しない理由になるんだ？」

「それはこれから話すんだよ」

言いながら筋肉質な従業員はユアンから受け取った金を引き出しにしまつて、

「『魔ジン』になった男は善意を無くし、悪意に染まった。簡単に言うと善人から悪人になつちまつたんだよ。それからと言うもの、男は悪の限りを尽くした。人殺しなんて日常茶飯事。盗みや破壊活

動と言った『人が嫌がること』を徹底的にやっていったらしい」

「誰も止めなかったのかよ。そいつの暴走」

「止めたかっただろうさ。でも元々化け物みたいに強い奴だったらしくて、力じゃ誰もそいつの暴走を止められなかったって話だ。だが、そんな男にも一つ弱点があった」

「弱点？」

「男は夜にしか動けないんだ。だからこの町の住人は、夜は外を歩かない。『魔ジン』に殺されちまうからな」

そんなような言い伝えはよく耳にする。夜は人食い狼が出るから子どもを外に出してはいけない、みたいな。この町もそれと同じ。住人は言い伝えを律儀に護っているのだ。

「と言う事は……あれ？　もしかしてこの町って『魔ジン』が生まれた町なの？」

「まあそうなるな」

まじかよ、とユアンは呟いた。

『魔ジン』それは悪の象徴。この世の闇を支配する魔王。『魔ジン』が復活する度に必ず大きな戦争が巻き起こると言われている、戦いの火種。全世界の敵。そして世界最強の術者。

この町は意外にとんでもない町なんじゃ……、とユアンは心の中で思っていると、服の袖を隣に座っているキャロルに引っ張られた。

「ねえ、もう帰ろうよ。わたし今日なんだか疲れちゃってはやく寝たいんだー」

ふわぁー、と彼女は大きな欠伸をしながら言う。さっきまで筋肉質な従業員の話に夢中で食いついていたのに、彼女はいつの間にか興味をなくしていた。

そう言うところは子どももっばいなー、と彼は思いながら、

「そうだな。おっさん、色々話聞かせてくれてありがとう」

「おう。また何か聞きたいことがあったらここに来な」

ああ、と軽く返事をした後、ユアンとキャロルは椅子から降りて店の出口まで歩いていく。

(『魔ジン』ねえ。まあ俺には一生縁のない話だけどな)

そう思いながら店の扉に手を掛けた、  
そのとき。

## 11 影三つ

片側三車線の道路並に広い町の中央通を走る人影が三つ。影の大きさは全てバラバラで、右から大中小となっている。

三つの影は何かから逃げるように必死に走っていた。

「くそツ！ なんなんだよあいつは！」

ずっと走っていたせいか、しゃがれた声で言ったのは左側の一番背が低い男だ。

「……『奴』の仲間なのかもしれない。この町、『教会』があるし。もしそうだったら僕らに勝ち目なんてないよー」

野太い声でネガティブな事をのろのろ言ったのが右側にいる、一番体が大きい男。

「あーもう、うぜーなてめえはいちいちよお！ んなネガティブな事ばっか言ってるねーでちょっとは何か考えやがれデカ物が！ ついでに言っと『奴』は的確じゃねーな。『奴ら』だ」

「……そんな事言われたってー。僕頭悪いしさー。デリックは何か良い方法ある？」

「残念ながら思いつかないな。あんな化け物とまともに戦える方法なんて」

言ったのはデリックと言う二人の真ん中を走っている男。彼は眼鏡を掛け直しながら、

「大体方法があればとづくに使っているさ。でも見ただろお前達も、あの『光』の動き。あれは普通じゃない。どう見ても『騎士』並かそれ以上の実力だよ」

「なんだよ『騎士』並って。んなもん相手にできるかよ。つーかなんでそんな奴がこんな町にいるんだよ」

「それはさっきバップが言ったように『奴ら』の仲間か、それともこの町を守る兵士か。どちらにしても俺たちの敵だって事には変わりないけどな」

「……それよりもどうする？ このまま帰っても僕達殺されちゃうと思うけど。先輩に」

「「……」」

体が一番大きなバップと言う男の言葉に、他の二人は思わず黙り込む。

「……そう言えばもうすぐ『奴ら』がいる喫茶店に着くんだけど」

「喫茶店？ どういうことだ？」

一番背の低い男      アルデが聞き返すと、

「……ほら、町の出入り口の近くにある喫茶店。あそこから『奴ら』の臭いがする」

言ってバップは、数十メートル先にある一つの喫茶店を指差す。

「あそこに『奴ら』がいるのか」

真ん中を走っているデリックが足を止めると同時に、他の二人もその場に立ち止まる。三人は喫茶店を凝視していると、一番背の低いアルデが口を開く。

「標的である『奴ら』は目と鼻の先。バップの鼻は確かだからあそこにいるのは間違いねーんだろうけど。このままつっこんでぶっ殺しに行くつてもありじゃねーの？」

「……僕はアルデの意見に賛成だなあ。あんな化け物とやり合うよりは『奴ら』を狙った方が断然ましだよ。それに任務が成功すれば先輩も許してくれるだろうし」

「確かにそうだな。それじゃあこのまま任務を果たしに行きますか」

三人は歩いて喫茶店の前まで行くと、一番体が大きいバップが作戦を話し出す。

実はバップはこの三人の中では一番頭が良かったりする。自分では頭が悪いと言っているが。

「……じゃあ僕が店の壁を扉ごとぶっ壊すから、その際にデリックの『スコープ』で標的を殺るって事で」

「おいおいそれじゃあ俺の出番がねーじゃねーか」

「……アルデは後方であの化け物が来ないか監視してて」

「バップてめえ俺に喧嘩売ってんのか、ああ?! 俺は今暴れてー」

「んだよ、むちゃくちゃ暴れてーんだよ！」

「暴れたいならあの化け物と一緒に暴れてればいいだろ」

「デリックてめえもふざけんなよ。あんなのと暴れられる訳ねーだろ。暴れる前に殺されるわ」

「お前もお前で結構ネガティブだよな」

デリックが溜め息まじりで言っていると、隣に立っていた大男のバップがどこから出したのか、長さ二メートルもある巨大なハンマーを肩に担いでいた。

「……二人とも、遊んでいる暇はないよ。死にたくなかったらさっさと殺そう」

突然バップの言葉が今までとは別人のように鋭くなった。彼は戦闘になると口調が極端に変わるのだ。それを聞いた他二人の表情にも緊張が走る。バップは一〇〇キロ以上もある巨大なハンマーを軽々と持ち上げ、振り被ると、

「……でも、少しはぶっ殺しがいがある相手だったらいいな」

それが合図のように、巨大なハンマーが喫茶店の壁を横薙ぎにする。

## 12 襲撃

「……」

ユアンはドアノブに手を掛けて、感じた。直感した。この扉を開けてはならないと。一刻も早くこの扉から距離を取らなければならぬと。

理由は分からない。ただ自分の生存本能がそう告げている。彼は横目で隣にあるカーテンの閉まった窓に視線を向ける。見た目はなんの変哲もないただの窓だ。しかし今重要なのはそこではない。そのわずかな隙間から妙な影が見えていた。

夜の闇に蠢く影。

そして、

「  
ッ！」

何かを確認する前に、ユアンはキャロルに飛びかかっていた。えっ？ と気の抜けた声が聞こえたが彼は無視して、倒れる彼女の体の下に自分の左腕を回してクッション変わりにする。疼痛な痛みが腕に伝わったがそんなものに気を取られている暇はなかった。なぜなら、

轟ッ！！ と爆音と共に、喫茶店の扉が周りの壁ごと横に薙ぎ払われたからだ。

強い風が店の中に吹き付けた。レンガ造りの壁の細かな残骸が、キャロルに覆いかぶさっているユアンの背中を叩く。幸い大きな塊は降ってこなかったが、だからと言って全く痛くない訳ではない。

客は粉塵が舞っている店の入り口を呆然と眺めていて、筋肉質な従業員は今にも泡を吹いて昏倒しそうな表情だった。おそらく皆、目の前で何が起こったのか理解が追いついていないのだろう。かく言うユアンも同じだった。何かが起こると予感はできて、起こる何かまでは予想できない。つまり彼も一体何が起こったのか、なぜ店の入り口が破壊されたのか、分からなかった。

( いったい、何が…… )

困惑するユアンだったが、ふと入り口付近に舞っている粉塵の中に大きな人影が現れた。高さ二メートル程もある巨大な影が。

「……標的見えるか、デリック」

「ああ、しっかり見えている。あとはこいつで頭を撃ちぬくだけだ」

ゆっくりとした口調の野太い声と、しっかりした滑舌のハスキーボイス。二人の男の声が倒れているユアンの耳に届いた瞬間、カチャツと言う金属と金属がぶつかるような音が聞こえた。

( ……？ あの音、金属か？ それに撃ちぬくって…… )

大きな人影の後ろから新たな人影が現れる。先ほど男の声は二つ聞こえてきた。おそらくその内のもう片方なのだろう。その影はほつそりとしていて、身長もユアンと対して変わらない。ただ、その影は腕を挙げてこちらに何かを向けていた。

( 金属で撃ちぬくって言ったらつまり……、あれしかねーじゃねーかッ！ )

ギリツ！！ と奥歯を噛み締めたユアンはすぐさま起き上がり、床を削るような勢いでキャロルの小さな体を抱えて左のボックス席に駆け込んだ。

三回の銃声が鳴った。最前まで二人が倒れていた床に直径一センチ程の風穴が複数開く。銃声はそれだけでは止まない。ユアンの背中を追いかけながら段々と近づいてくる。

(くそっ！ 何で俺が狙われてんだっ！)

舌打ちして彼はテーブルを縦に蹴り上げると、その影に身を隠す。そんなに長い距離を走った訳ではないのに、息が長距離走をした時のように荒い。拳銃で背中を狙われると言っあまりにも巨大なプレッシャーで、精神的に息切れ状態なのだ。

(何なんだよあいつらは！ いきなり現れて、いきなり物騒なもんぶっ放してきてっ！)

ユアンは考えながら息を整えていると、弾丸が盾にしているテーブルを貫通し頭を掠めていく。彼はそれに冷や汗をかきながら、

「このテーブルも長くはもたねーな。キャロル、お前は体勢を低くしてここで隠れてる！ その間にあのクソ野郎どもを黙らせやる！」

「黙らせやるって、どうやって！」

キャロルはユアンの膝の上で叫ぶが彼は取り合わない。彼女を床に降ろすと左手で縦に立てられているテーブルの上を掴んで、

「は？ んなもん決まってるだろ。『力』で、だよ」

そう言つとユアンは空いている右の掌を力強く握つて、開く。

(……この『力』を使うのはかなり久しぶりだな。まあでもやつと『アレ』を試せる機会ができたんだし、ここはポジティブに考えるべきだな)

思つてユアンは開いた右の掌を地面に向ける。

そしてその現象は起こつた。突如、彼の掌にドーナツ状で掌に余る程の大きさの、厚さは〇・一ミリほどの高速で回転している透明な空気の塊が形成された。周りにある空気がユアンの『力』によつて渦を巻き、圧縮され、形を成して、武器になつていく。

「……」

一方、キャロルはそれを見て黙り込んだ。彼女には分からなかつたのだ。ユアンの掌で起こっている現象が。それは『術』ではなかつた。全く『元力』<sup>マダナ</sup>を感じられないそれは、逆に得たいの知れないものに対する気持ち悪ささえも感じさせられる。

「準備完了つと」

そんな彼女の怯えた視線に全く気付かずに、ユアンは曲げていた膝を一気に伸ばし、ばねのように飛び上がると左手を軸にして、縦に立てられているテーブルを乗り越える。途中、数発の弾丸が彼の体を掠めたが無視して、後ろに引いていた高速で回転しているドーナツの薄い空気の塊を、腕を振るつて粉塵に映っている人影に向かつて放つ。

風を切り裂きながら手裏剣のように飛んで行く、高速で回転する

薄い空気の固まりは、粉塵を吹き飛ばしながら二つの影、特にほっそりとした体の影に向かっていく。

（まずはあの銃を使う奴からだッ！）

だが、ユアンが放った空気の手裏剣は突然軌道を変えて、その隣にいた大きな人影に突っこんでいった。

粉塵の向こうで、何かが舞った。

「……ぐっ！」

同時に痛みを堪えるような男の悲鳴も聞こえた。

テールを乗り越えたユアンは着地の衝撃を吸収するために膝を曲げてしゃがみこむ。彼は目の前で鬱陶しく舞っていた粉塵の一部が払われたのを確認して、目の前を凝視する。

（あれ？　なんか軌道逸れちまったなー。コントロールミスったか？　まあ一ヶ月も『力』使ってなかったら嫌でもそうなるか）

空気の手裏剣が軌道を変えたせいで、粉塵が払われた位置も狙いより大きく外れた。

濃く舞っていた粉塵の中から見えてきたのは身長一九〇センチもある、フード付きの黒いローブを着た力士みたいな大男だった。大男の右肩には二メートルを越える黒い巨大なハンマーが担がれていたが、反対側の左腕の側面からは赤い血液が衣服の裂け目から染み出していた。そのせいか大男は片膝を地面につき、じっとこちらを睨んでいる。

（あいつは近接戦闘型か。なら近づかなければいいだけだ。問題はもう一人の男……）

考えながらユアンは両の掌に、再びドーナツ状の高速回転する空気の手里剣を生み出す。

その間、約五秒強。

決して短いとはいえない時間。いや戦闘においては長すぎると言ってもいいだろう。だが大男の方とはもかく銃を持った男も立ったまま、何も仕掛けてこなかった。

（なめられなもんだな。不意をつく必要がないってか。ふざけやがってッ！）

しゃがんだ状態でユアンは両足に力を込める。そして一瞬の沈黙のあと、影は動き出す。

四回銃声が聞こえた。カーテンのように舞っている粉塵を貫いて、四発の弾丸が標的の体をぶち抜くために突き進む。だが弾丸は標的には当たらない。ユアンが曲げていた膝をばねのように使い勢い良く前へ踏み出した事によって、何もなくなった空間に弾丸が通り抜けていく。

（粉塵のおかげで弾丸の軌道がよくわかる。俺の動体視力を合わせればこのぐらい簡単にかわえられるんだよ！）

そして前に出た勢いを利用してように左の掌で高速回転する透明な空気の手裏剣を、弾丸を放った黒い影に向かって放つ。

（今度は逸れねえ絶対にッ！）

斬ッ！！と空気を裂く音が透明な手里剣の尾を引いて黒い影に迫っていく。だが、黒い影は少し身を屈めただけでそれを軽々とか

わし、同時にまた銃弾を放ってくる。

( なっ、あの野郎、俺と同じことをッ )

ユアンの手裏剣は飛ばすとき、周りの空気を押しよける性質がある。そのため肉眼では捉え難い透明な攻撃でも、粉塵の中を突き進めば弾丸が迫って来るよりも簡単に軌道を読めてしまうのだ。

( 俺の攻撃は弾丸よりもデカイし遅い。そーいうのがいろいろ重なつちまつたんだなくそつたれがッ )

「チッ！」

思わず舌打ちしたユアンに複数の弾丸が襲い掛かる。今はそれら全てをギリギリのタイミングで全てかわしているが、そんな奇跡に近い芸当が長く続くわけがなく。

( このままじゃ蜂の巣にされちまう！ 早く何とかしねーと )

ユアンの体に所々弾丸が掠めていく。

喫茶店の中は狭い。少し走っただけで破壊された店の入り口から外に出られてしまう。

( ここはいったん外へ脱出だ！ )

入り口の粉塵を裂いて転がるように外へ出たユアンは、すぐさま体勢を立て直し片膝を付いた状態で顔を上げる。だが、彼の前には巨大なハンマーを持った大男が立ち塞がっていた。

ズンツ、と言う振動が足に伝わった。目の前にいる身長一九〇センチの大男が一步前に出たのだ。

「……邪魔をするならここでお前を殺す。死にたくなかったら早めに立ち去ることを進めるが」

「はッ、それはこっちの台詞だ。人がせつかくいい気分で飯食い終わったって言うのによぉ、それを台無しにしやがって。何しに来たかは知らねーが、怪我したくなかったらこの喫茶店からさっさと失せやがれ！」

つつてももう怪我しちまってるか、そう付け足したユアンと大男が睨み合う。両者の眼差しには殺気しか籠っていない。

「……ふん。どうやら死にたいらしいな」

「お決まりの台詞を堂々といいやがって。聞いてるこっちが恥ずかしいっつーの」

「……減らず口を言いやがる。まあそんなふうに見えるのも今のうちだけだろっけどな」

なに？ とユアンは眉をひそめて、動きが止まった。

「な  
」

彼は見たのだ。大男の後ろにいるもう一人の眼鏡をかけた男（粉塵の外に出たから人影の姿が分かるようになった）。そいつが片手に銃身の長い銀色の回転式拳銃リボルバーを握りながら、キャロルの隠れている縦に立てられたテーブルに向かっていている事に。

（……ちよっと待て、あの男。一体何に向かってやがるんだ？ そ

もそもこいつらは一体何が狙いなんだ？)

嫌な予感がする。ユアンはそう感じた。大男はそんな彼の表情を見ると口元を歪ませて、

「……お前は何も知らないようだな。僕達の事も、あの子どものもも」

「な、に……？」

ユアンの頬に冷たい汗が流れる。眼鏡をかけている男はテーブルの前で足を止めた。そしてゆっくりと、回転式拳銃リボルバーの銃口をテーブルに向ける。

( )

大体は想像がつく。が、だからこそ認めたくない。認められる訳がない。

焦りの色が表情にまで出てきているユアンを見て、大男はニヤリと笑う。そしてゆっくりとした口調で、言葉を放つ。

「……僕達は、お前と一緒にいたあの子どもを殺しにきたんだよ」

聞いた時には既に弾丸は放たれていた。

二発、三発、弾丸がテーブルの真ん中に突き刺さり、そのまま貫いていく。

悲鳴は、ない。

いや、聞く前にユアンの体は動いていた。

「うっうおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおお！！」

店の中だけではなく、外にまで響き渡る声量で絶叫し、

ドンツ！ と地面を蹴り上げて、爆発的なスピードで眼鏡を掛けた男の下へ駆けていく。だがそれを遮るように黒い巨大なハンマーを両手で振り上げた大男が立ち塞がる。血が溢れ出ているのにも関わらず左腕をも使って。しっかりと両足で自分の体を支えて。その姿はまるで餅でもつくかのようだった。そう、人間と言つ肉を叩き潰すかのように。

そして大男は告げる。

「……さあかかって来い。叩き潰してやるよ」

## 12 襲撃（後書き）

バトルです！

表現とかいろいろ下手ですけど楽しんでいってくれたら幸いです。

### 13 第一ラウンド(前書き)

敵目線です。主人公目線ではないです。気をつけてください。

### 13 第一ラウンド

「邪魔をするなああああああ！！」

「…………ふん」

絶叫しながら突っこんで来る少年に対し、大男は鼻で嘲るように笑っただけ。

「…………そんなにあの子どもが大切だったか」

大男に、余裕の表情は消えない。

（この様子だともう何も考えていないだろう。ただ怒りのままに突っ込んで来るだけ）

なら、殺すのは簡単だ。

大男は知っている。経験上、怒り丸出しで突っこんでくる奴は、大抵何も考えていない事を。力任せに押ししてくるだけと言う事を。

（でも、僕に力で勝てる奴はいない）

視線と視線が一度だけ交差し、そして振り上げられたハンマーは少年の頭上に振り下ろされた。

ズドンッ！ と地震のような振動が地面を揺らす。一〇〇キロの重量と大男の腕力、それと（おそらく）破壊の術式も合わさった一撃必殺の大鎚。棒の先端に取り付けられた円柱状の大きな金属塊きんぞくかいは石畳の地面に半分以上めり込んでいた。それだけでどれだけの力が加わったのか想像できる。地面に突き刺さったハンマーを中心に、

四方八方石畳が砕けていく。

その下に人間がいたなら、その人間は形も残っていないだろう。そして一瞬前まで、そこには一人の少年がいた。

だが、そのハンマーの下には少年の体の残骸は何処にも存在しなかった。直撃していれば血液が辺りに飛び散っているはずなのに、その一滴すらも飛んでいない。

「……なに？」

大男は周りを見渡し、そして気付いた。少年が地面に食い込んだハンマーの前、ほんの数センチのところまで跳んでいる事に。つまり、ハンマーが頭上に振り下ろされる直前に、彼は足を止めて後ろに下がり、地面に伝わる振動を回避するために跳んだのだ。

（バカなッ！）

それは、怒りで冷静さを失った人間にはとてもできない行動だった。

大男は考える。なぜ、冷静さを失ったはずの相手があんな計算された行動を取れたのか。

（この男、もしかして……）

そして、ある事を思いついた。

（僕を……、ハメたのかッ?!）

もし、最初の絶叫そのものが演技だったら？ もし、少年が守るべき標的が隠れているテーブルを撃たれ、怒りを覚え絶叫し、怒り

のままに突っ込んで行くように見せかけていたとしたら……。

(……あり得ない。そんな、馬鹿な事がッ)

だが、そんな根も葉もない仮説を確信にする事が起こった。  
ニヤリ、と。

大男の目の前にいる少年が、笑っていた。  
まるで、うまくいった、と語っているかのように。

「ッ！」

少年はそのままハンマーの上に飛び乗ると、大男の顔面目掛けて右掌に渦巻く空気の凶器で切りかかる。それを回避しようと大男は長いグリップから手を放し、後ろに下がろうとした。しかし大男にはパワーはあってもスピードはない。対してユアンは跳んでいるにも関わらず、風を使いさらに迫るスピードを上げて、

斬ッ！！ と大男の顔面を横一線に切り裂いた。

赤い鮮血が横に散った。

「ガッがああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああ！！」

絶叫しながら大男の体は後ろに倒れ、その振動が地面を揺らす。ユアンはそのまま倒れている男の頭のすぐ上に着地する。大男は両手で顔面を覆いながら地面の上をのた打ち回っていた。手の隙間から今も赤い液体が溢れ出している。

最初の勝負は結した。

少年は殺意の籠った視線を眼鏡の男に向けて、奥歯を砕く勢いで  
噛み締める。

そして第二ラウンドが開始した。

## 14 第二ラウンド(前書き)

また敵目線です。

## 14 第二ラウンド

風を切る音と男のものがき苦しむ声が響く。

「バップ！」

叫んだのはデリックと言う眼鏡を掛けた男。

(くそっ、バップの野郎、あっさりやられやがって)

デリックは地面にしゃがみこんでいるユアンを背中越しに睨み付け、また睨み付けられている。

(しかしこいつもえぐい事をするな。一思いに殺してしまえばいいものを)

ユアンに顔面を引き裂かれたバップと言う大男は、重傷を負ってはいるもののまだ死んではいなかった。それを甘さと言う者もいれば生き地獄を味合わせている惨い奴と思う者もいる。デリックは明らかに後者だ。彼なら迷わず敵にトドメを刺すだろう。

数秒交差する殺気の籠った鋭い視線。

そしてデリックは無言のまま左手で左側にあるショルダーから、新たな回転式拳銃リボルバーを取り出し、振り返ってユアンにその二つの銃口を突きつける。

そのわずかな時間に、ユアンも左掌にドーナツ状に回転する空気の手裏剣を作り出し、地面に手はつかないものの、身を低くしてクラウチングスタートに似た体勢を取る。

両者の距離は一〇メートル強。十五歳ぐらいの少年なら三歩か四歩ぐらいでゼロにできる。だが二人とも飛び道具の使い手だ。一〇メートルなんて距離は距離の内に入らない。

短い沈黙のあと、先に動いたのはユアンだった。

再び爆発的な勢いで突っこんで行くユアンに対し、デリックはただ銃の引き金を引くだけ。

しかし、

デリックの拳銃から銃弾が放たれる事はなかった。それより先に、ユアンの手裏剣が彼の右肩を切り裂いたからだ。

「なッ！」

鮮血が空気の手裏剣の軌道を反って肩から飛び出す。

(……ばっかな、いつたい……いつの間につ……！)

「そっぴや言つてなかつたが」

ユアンの冷めた声がデリックの耳に入ってくる。彼の左手には未だに透明な手裏剣は回っている。

「俺のこの武器は」

だが、右手には何もなかった。

「別に腕を振るわなくても飛ぶんだよ」

デリックはバランスを崩し後ろに倒れかけるが、ギリギリのところで踏ん張ると体勢を立て直すために後ろに下がる。

(こいつ、思った以上に動きが速い。武器が透明で見難い事もあるだろうが、それにしても予想以上にやる相手だと言う事には変わらないか)

自分の呼吸が荒い事にデリックは歯噛みする。そしてユアンの左手に視線を向けた。

と、この時、彼はある違和感を持った。

(あいつの左手にある空気のカッター。なんか厚くないか？ 威力を強めたのか。それとも他に何か意味があるのか)

だが深く考えなかった。

二人の距離は五メートル強。不意打ちに近い攻撃を受けたデリックは左手の銃だけ構えなおし弾丸を放つたのと同時に、走ってきているユアンも左手の透明な手裏剣を、腕を横に振って放った。

鉛の弾丸と空気の手裏剣が交差する。

(よし、いける！ 俺が放った弾丸は命中コースだ。対してあいつの放った攻撃は体を軽く逸らせば簡単に回避できる)

デリックの予想は当たった。弾丸はユアンの右肩を貫通し、そのまま彼の体を後ろに倒れさせる。そして相手が放った空気の手裏剣は、デリックが右肩を後ろに引く事で軽々とかわした。

この勢いでさらに弾丸をユアンの体に打ち込めば、確実に形勢が逆転できる。

デリックの勝利は確定いた。

だが、現実とは違った。

なぜなら彼の体からは大量の赤い液体が噴出していたから。

「　　ッ?!」

一瞬、彼は自分の体に何が起こったのか分からなかった。相手の攻撃は完璧に見切っていたはずだった。かわしたはずだった。しかし彼は今、倒れかけている。汚い地面に引き寄せられるように。

「……………」

デリックは無言だった。無言のまま地面に倒れていった。

(……………くそつたれがッ)

背中に鈍い衝撃が走ったがそれはすぐに消え、今はもう何も感じられない。体の感覚が麻痺してしまっている事と、思考に集中しているから。

(いったい、どういう事だ?　俺はいつ攻撃を受けた)

あいての攻撃は今までと変わっていないが、

いや、一つ変わっていたところがある。

(カッターの厚さ……………、まさか!)

そうか、とデリックはここで納得した。

(攻撃の二枚重ね。手裏剣の下に予備の手裏剣を重ねて攻撃範囲を広めたな。ちくしょう、姑息なまねをしてくれるッ)

ユアンの放った手裏剣がデリックの横を通り過ぎる直前。手裏剣が二つに分離した。片方は予想通り通りすぎ、分離したもう片方は右腹から右胸にかけて真っ直ぐ切り裂いていった。

早いところ、ユアンはデリックの行動を読んでいたのだ。

(結局俺たちは、潰される運命だったと。この町でくたばる定めだったと。……つまりはそういう事か)

傷の深浅は分からない。最初に受けた傷から血を流し過ぎたせいで意識が朦朧としてきている。視界に映る星空も霞んで見えてきた。

(……ああ。やっぱりあんな『組織』なんかと、関わるんじゃ、なかった)

デリックの意識は途絶えた。

同時に二回目の勝敗も決した。

## 15 最終ラウンド

「痛っつ……」

ユアンは右肩を左手で押さえながら、上半身だけ起き上がった。肩から大量の鮮血が溢れ出し、傷口を押さえている左手は赤く染まっている。生暖かい液体が腕を伝って地面に落ちる。

焼けるような痛みに耐えながらユアンは辺りを見渡す。そしてまず視界に入ったのは、三メートルほど先に仰向けで倒れている眼鏡を掛けた男だった。

「倒した……のか？」

ほとんど賭けに近かった。手裏剣に手裏剣を重ねる技は今までやった試しがなかったから。以前からやってみようとは考えていたのだが、なかなか使える機会が訪れなかったのだ。

（分離せずにそのまま合体しちゃうんじゃないかと思ったけど、無事にうまくいってよかったー。これで俺のこの『力』はまだまだいろいろんな応用が利くって事が分かったな）

ユアンは新しい技を覚えた！ と言う訳なのだが、まだ安堵はできない。他の敵がどこかに潜んでいる可能性もある上に、彼にはまだやることあるからだ。

テーブルの向こうにいる一人の少女の安否。それを確認しなければ安息なんてとてもしゃないができない。

「……キャロル」

思わず少女の名前を口に出してしまったユアンだったが、

「なあに？」

「うわあ！」

いきなり隣から甘ったるい女の子の声が聞こえた。それに驚いたユアンはもの凄い速度で振り返ると、すぐ隣に一人の少女が膝立ちをしていた。

「思った以上の反応だったよ。そんなにびっくりした？」

「当たり前だ！ いきなり横から声をかけられたんだからな」

ユアンは少女の姿を見て、内心ほっとしていた。血などを出している様子はなく、何より生きていた事に安心していた。

「本当に黙らせちゃったね」

「なんだよお前。俺の言葉信じてなかったのか？」

「うん」

直球ストレートの即答だった。真っ直ぐすぎる返答と自分の信頼の無さにユアンが落ち込んでいると、

「でも助かったよ。貴方が床に伏せたらそのままの状態で、どこか別のところへ移動しろって言うてくれなかったら、今ごろ私死んでたよ」

あはは、と笑いながら言うキャラル。

「なんだか今でも信じられないなあ」

「おいおいなんだよそれ。お前も見てたんじゃねーのか？ 俺の活躍を」

「見てたよ。見てただけど何だかね」

なぜか曖昧な言い方しかしないキャラルに、ユアンは怪訝な表情になる。

「貴方って術師としての階級ってどのぐらいなの？」

「あ？ なんだよいきなり」

「いいから答えて」

キャラルが真顔で急かすように聞いてくるもので、ユアンは『見習い術師だけ』と言う。

「……見習い、ね」

「何でそんな事聞くんだよ？」

「なんでって、それは貴方の元力があまりにも小さいから」

と、喋っている途中、突然キャラルの口が止まった。そして彼女の瞳は信じられないものでも見ているかのように、怯えていた。驚いていたのではなく、怯えていた。

そんな彼女に首を傾げそうになったユアンだが、彼もすぐ異変に気付いた。

自分のすぐ後ろに何かが立ち上がった。ユアンはそう感じていた。同時に背筋に殺気のような寒いものが走る。

「……………」

ゴクリと口に溜まった唾を飲み込み、ゆっくりと後ろを振り向く。そして見た。

今にも巨大なハンマーを、キャロルとユアンの頭上に振り下ろそうとしている大男を。

「な　　ッ！」

さっきまでユアンの後ろで倒れていた黒いフード付きのローブを羽織った大男。ユアンが撃破したはずの敵。

大男の体はガクガクと震えていた。まるで雪の中を薄着で歩いているように。それに左腕の側面の布は赤黒く染まり、顔面、より正確に言うと両方の目からは横一線に赤い鮮血が今もなお、とどまる事無く溢れている。

おそらく視力はもうないだろう。それにとっても戦える状態でもない。そんな事は誰が見たって分かりきっていた。だが大男は的確に『敵』の位置を掴み取り、今また襲いかかろうとしている。

(……………何だ、こいつは)

驚きよりも、どちらかと言うと恐怖の方が大きかった。腕を裂か

れ、視界を奪われても動いている化け物に。普通なら大量出血で意識が跳んでいるはずなのに、大男は立っている。何も見えないはずなのに、ユアンたちの位置を捕らえられないはずなのに、大男は正確に二人の頭上にハンマーの頭部の狙いを定めている。

「……臭うぞ、臭うぞ！ 『風』と『天使』の臭いが！ 必ず殺してやる。必ず殺してやる！」

急いでこの場から離れようとした。だがすぐには体が動かない。肩の痛みに体力を持っていかれてしまっているようだった。隣にいるキャロルだけでも突き放そうと思ったが、それだけの時間がない。途中、遠くで大きな音がしたような気がしたが、ユアンは気にしている暇がない。

大男の腕に力が入るのが分かった。体の震えを抑えて地面をしつかりと踏み締め直しているのがわかった。

一瞬、大男の全ての動きが止まり、そして巨大なハンマーが振り下ろされる。

男が立ち上がったのを確認してから経った時間は約一〇秒。そして十一秒に達する時には、

ドゴンツ！ と言う鈍い音が響いていた。視界が真っ暗になる。体の中の骨が碎ける音がした。吐血する苦痛の音が聞こえた。

ユアンは死んだと思った。だが同時に死んだと思っている事に違和感を覚えた。

死んだのなら何も思えられないはず。何も考えられないはず。しかし自分は『死んだ』と思い、考えている。

そして彼はようやく気付いた。

視界以外はどれもユアンやキャロルのものではなかった事を。自分が生きている事を。

「……」

ユアンは思わず閉じてしまっていた視界を開いて、辺りを見渡す。相変わらず崩れた喫茶店の入り口前だった。次に視界に入ったのは大男が握っていた巨大なハンマーだった。それは彼のすぐ目の前に落下して、石畳の地面を粉碎していた。そしてその三メートル先で仰向けに倒れている大男と、その大きく出っ張った腹の上で転がっている小柄な男。

いったい何が起こったのか、理解できなかった。

潰されるはずだった自分が生きていて、潰すはずだった大男が吹き飛ばされ昏倒しているこの状況が。

と、その時だった。後ろから足音が聞こえてきたのは。

瞬間的に振り返ったユアンは無駄に広い町の中央通の真ん中に、ある一筋の光を見た。その光は揺れながらこちらに近づいてきている。ゆっくりと、だが確実に。

その光には殺意があった。だがそれはユアンやキャロルに向けられているものではないような気がする。喫茶店の壊れた入り口の中から漏れ出している光の中に、一筋の光は自ら正体を明かすかのように足を踏み入れる。そして、

ユアンたちが泊まる予定のホテルに居た、おじいさんが出てきた。

「……え？」

唾然とするしかなかった。暗い中央通からなぜこのタイミングでホテルのおじいさんが出てくるのか。そしてなぜおじいさんの右手

には真つ白な剣が握られているのか、分からなかったから。

ただ、ここで言える事が一つある。

それはホテルのオーナーであるおじいさんと、人を殺すための長さ一・五メートルほどの刃の狭い白い剣が不自然なほどに合致していると言つ事。普通の、平和な世界に生きる人間なら絶対にあり得ない事。つまり、それが意味する事は、

「……敵」

「安心せい。ワシはお前さんらの見方だ」

ユアンは思わずギョツとした。さっきの一言は一人事のつもりだった。隣にいるキャロルにも聞こえるか聞こえないかの音量で言つたつもりだった。にも関わらず、一メートル以上離れている剣を持つおじいさんは彼の言葉を聞き取り、なんなく答えた。

普通の人間の聴覚では絶対に出来ない事だ。地獄耳と言う領域を越えている。

困惑するユアンにおじいさんは気付かずに、

「やっぱりこやつらはお前さんらを狙っていたらしいな。先手を打つておいてよかった」

「……先手？」

慎重に聞き返すユアンに対して、おじいさんは気軽い調子で、

「ああ実はな、ついさっきこの中央通じゃないほうの大通りで、お前さんらを狙っていた黒いローブを着た人間達を四〇人ほど始末してきたところなんだよ」

「……は？」

話を聞いて、間抜けな声を出してしまった。立て続けに意味の分からない出来事や言葉を言われて思考がついていけなくなっている。肩の痛みも忘れて、ユアンは状況を整理するために一から質問する事に決めた。

「ちょっと待ってくれ。黒いローブの人間を四〇人ほど始末したってどういう事だ？ それってつまりこいつらの仲間って事なのか？」

「まあおそらくそうだろうな。着ているローブが同じだし」

「んであなたは他に四〇人いた黒いローブの人間達を一人で全員始末したって事なのか？」

「ああ」

とんでもない事を簡単に肯定したおじいさん。

(何なんだこの人は。四〇人のローブの人間って事はおそらく全員術者だよな。それを一人で片付けたってのか？ それが本当ならこのじいさん、とんでもねー怪物じゃねーか)

術者ランクは『魔道師』、それが戦闘に特化している『騎士』と言ったところか。

ユアンが頭の中をごちゃごちゃにしながら考えていると、おじいさんは不意に少し尖った口調で、

「まだやる気なのか？」

それは二人に対して言った言葉ではなかった。

「ちくしょう……！」

言ったのは、さっきまで大男の腹の上で転がっていた小柄な男だった。

「何なんだよ。……何なんだよお前は！」

小柄な男が着ている黒いローブには所々切り傷が入っていて、切り口には赤黒い染みが付いていた。呼吸は荒く、立っているのも辛そうに見える。男の両手には刀身が三〇センチ程度の双剣が握られているが、肝心の両腕が力なくだらりと垂れ下がっていてとても戦える様子ではなかった。

しかし男の瞳にはまだ戦意の火は消えておらず、その証拠に覚束ない足取りで一歩前に踏み出した。

「いきなり襲い掛かってきて、仲間のほとんどを切り裂きやがって！ お前のせいで俺達の任務は完璧に失敗だ！ お前のせいで俺達は今もう終わりだ！」

男の絶叫が響き渡る。理不尽な暴力に対する悲痛な叫びのようだった。だがおじいさんは進める足を一旦止めて、そして心の底からつまらなそうに、

「お前はそんな事を言える立場なのか？ 四〇人で二人の子どもを襲おうとしていた奴らが。ワシはただお前らに命を狙われている子羊を助けただけだ。どう見ても完全な『悪』はお前らだろうが」

おじいさんは吐き捨てるように言った。その言葉に小柄な男は黙

ってしまった。

「さて、どうするんだ？ 本当にまだやる気ならワシは確実にお前を殺すが……口振りじゃあ死にたくないようだけど？ 死にたいのなら向かってこい。死にたくないのならさっさとここから消えろ。二つに一つだ。さあ、どっちにする？」

「……ちくしょうッ」

小柄な男は奥歯を噛み締め、ゆっくりとした動作で双剣を鞘に納めた。そして後ろに倒れている大男の下へ安定しない足取りで歩いていく。大男に向かって何か喋りかけると、突然さつきまで昏倒していた大男が立ち上がり、眼鏡を掛けた男の方へ向かっていく。気を失っている眼鏡を掛けた男を担いだ大男と小柄な男は、そのまま何も言わずに暗い町の中央通に消えていった。

完全に気配が消えた事を確認すると、おじいさんは白い剣を黒い鞘に納めてユアンのいる方へ振り返る。

「無傷じゃあないようだが、まあ生きていてよかったよかった」

「あんたは一体何なんだ？」

「ん？ ワシはホテルのオーナーだけど？」

「いや、俺が聞きたいのはそういう事じゃなくて」

「まあそう焦るな。話なら後でしてやるから、今はその怪我を何とかせなあかんだろ？」

## 黒いローブの少年

「……なんだこの有様は」

少年の声が夜道に響き渡る。

そこは『リーヴァリー』と言う町の大通り。暗く、彼以外は誰もいない。

ただ、そこには大量の肉塊ひつが転がっていた。

「こいつら、なんで死んでんだよ」

フードの中から、目の前に広がっている光景を目に少年は啞然としている。

少年は左胸に蒼い薔薇の刺繍が施されている、フード付きの黒いローブを羽織っていた。そしてそれと同じ物を、彼の前で転がっている死体も羽織っている。色は少々、黒と言うより赤に近くなっているが。

「まったく、意味わかんねーよ。ターゲットはガキ一人だろ。一〇分で終わるだろ。なのになんででめーらは殺されてんだよ」

つつても、もう死んでるから誰も答えられねーか、と付け足した少年はボリボリと頭を掻きながら、面倒そうな態度で死体の元へ歩いていく。

この近辺では最近雨は降っていない。ところが水溜りの上を歩いているような足音が聞こえる。歩く度に赤い液体が少年のスボンの裾や、周りの地面を汚していく。

「うわっ、最悪。裾汚れちまったじゃねーか。こいつら無駄に血液流しすぎ」

はあくリーニングに出すのめんどくせー、と呟いている少年は、一つの死体の前で足を止めた。そこでしばらく悩んでいるような仕草をすると、

「ま、もう汚れてるからいいか」

言っと少年は靴のつま先で死体の頭を蹴飛ばした。当然ながらもう死んでいるので反応はない。

「んー、本当に死んでるようだな。じゃあ次はこうなった原因だ」

転がっている死体は全員術師で、術者階級はこれも全員『魔術師』だった。そこら辺の術師なんかよりは実力は上のはずだ。しかし全員殺されている。どれも死因が剣で切り裂かれて死んでいる辺り、どうやら仲間割れで殺し合ったようではなさそうだった。彼らの中で剣を持っているものが二、三人しかいないからだ。

「他の組織の集団に襲われた、って線は薄そうだな」

少年がそう思う根拠、それはその場の状態を見れば分かる。

そこには死体と死臭、赤い液体の水溜り以外、戦闘の形跡がほとんどなかった。唯一地面に、真つ二つに割れたハンマーが突き刺さっているが、それ以外は大きな破壊の跡がないのだ。集団戦になっていたら建物の壁などが破壊されていたり、戦闘範囲が建物の上など様々なところに広がっていたりしてもいいはずなのだが、この戦場にはそう言った跡が全くない。不気味なぐらいに静寂して

いて、戦闘が行われたのはこの大通りだけのようだった。

「殺され方は全員同じ、そんなもって集団戦の形跡はなし。だとしたら相手はもしかして、個人ひとりなのか？」

だがそれならそれで不自然だった。さっきも言ったように彼らは全員戦闘に特化した魔術師だ。それを四〇人も相手にした上、皆殺しにできる人間なんてそうそういる訳がない。

「武器が転がっている所を見ると、どうやら抗戦しようとしたらしいな」

それでも全員殺されていた。

(……この町にそれだけの術者がいるって事なのか?)

だとしたら、少々厄介だな、と彼は思う。その術者は十中八九、少年の敵だろう。任務中に邪魔されたら色々面倒な事になる。

(ま、そんな時はそんな時だな。死体の処理はキファーフさんの部隊に任せるとして……、ん?)

そこで少年は気付いた。大通りに倒れている彼の元部下たち。

(確か四十五人派遣したはずだけどな)

その人数が足りない事を。

三人いなかった。

死体を粉々に粉砕されたのかもしれないが、それはないと少年は否定した。それは相手の体を粉砕する理由がないからだ。これだけ派手にやっというて三人の体だけ木っ端微塵に破壊するなんて、どう考えてもおかしかった。と言うかそれ以前に人間の体を粉砕する術を使っていたら、もっと大きな破壊跡が残っているはず。だがここにはそんな大きな破損箇所は見つからない。

だとすると、違うところで殺されたか、もしくは……、

「運良く生き延びて、逃げやがったか」

少年が所属する組織、その中でも彼が属する派閥では任務の失敗は絶対に許されない。成功すればそれなりの報酬を受け取ったり階級が昇格したりする事があるが、もし失敗して逃げ帰ってきたら、その者は死を持って責任を負わされる。

「たく、大人しく全員殺されてればよかったのに。余計な仕事が増えちまっただろーが」

ボリボリと頭を掻きながら面倒くさそうに少年は言う。

「あーあー本当に」

だが、彼の表情は笑っていた。心の底から楽しそうに。

「めんどくせーな」

ニヤリと歪んだ笑みが作られる。

そして蒼い薔薇の下に『イツザ「ラージー」』と英語で刺繍を施されている黒いローブを羽織り直すと、少年は裏切り者の制裁に出か

けた。

## 黒いロープの少年（後書き）

背景と内容がやばいほど合ってるって思っているのは作者だけかな？

## 1 一時間後

町は暗闇に包まれていた。

地上からはほとんど光が放たれておらず、丸い月が空高くから照らしているだけ。人の声がほとんど聞こえず、虫の音が寂とした荒地から響いてきている。そんな町だが、あるホテルの一室だけ光が漏れていて、声が聞こえた。

「いッ」

右肩に激痛が走った。思わず体を跳ね上げると、

「こら！ 動いちゃダメだって！」

かわいらしい声で怒られてしまった。

今、ユアンはキャロルに傷の手当をしてもらっている最中だった。

「血は止まってるけどあんまり動くとまた噴出しちゃうかもしれないでしょ？」

「大丈夫だって。俺傷の治りはかなり早いから」

「そんなの全然言い訳になってないよ」

「いや言い訳じゃなくてマジなんだけど……」

「だいたい銃で撃たれてからまだ一時間しか経ってないのに、そんなに早く治る訳がないじゃん。本当ならもっとしつかりした治療を

しなきゃならないんだからね。これは飽くまで応急処置。明日になったら真つ先に病院行かなきゃだから！」

まったくなんでこの町の病院は夜やってないのー？ と若干お母さんみたいになっているキヤロルは、割りと元気だった。それを確認したユアンは視線を彼女から窓の外に向けて、ぼんやりと眺め出す。

あれから一時間が経った。

いや。喫茶店の一件からまだ一時間しか経っていなかった。

襲撃者が去った後、ユアン、キヤロルそしてホテルのオーナーであるおじいさんの三人は宿に戻る事にした。ユアンの肩の傷を手当する、と言う目的もあるのだが、一番の理由は敵の増援に見つからないよう隠れるためだった。このホテルには術的な結界が張ってあるらしく、その内容は『術者本人が招いた者以外にはここを認知できない』と言う事で、敵はここを見つけない事が難しいだろう、との事だ。

（あのじい、最初から俺らをここに泊めるつもりだったのか？ でなきゃ俺らはここを見つけれなかったはずだし）

ホントつくづく得たいの知れないじいだな、と思うユアン。

（まあ、あいつらが何なのか、どうして俺たちが狙われたのか、いろいろわかんねーけど、とりあえずは一安心してるところか）

二人が居るのはホテルの三階、夕方借りた部屋だった。目立つ家具などはなく、ベッドと本棚とクローゼット、それに両開きの窓だけの殺風景な一室だ。二人の荷物は部屋の隅っこに置いてあり、ベ

ツドの上にはおじいさんから借りた包帯と薬品が入った箱、つまり救急箱が開いたまま置いてある。

「はい、これでオッケー」

キャロルは肩に巻いた包帯を軽く縛ると、一発ユアンの背中を叩く。もちろんそんな事をすれば、

「ぐぎ　　ッ！」

傷口に響いてしまう訳で、ユアンは床の上をつめきながら転がりまわった。

「何すんだよ！　クソ痛ーぞ今の！」

「ほーら、何が早く治る方だ。まだまだ全然治ってないじゃん」

「そんなに早く治る訳ねーだろ！」

「あれえ？　さっきと言っている事が違うんだけど」

ニヤリ、と意地の悪そうな笑みを浮かべるキャロル。

「お前まさか俺にそれを言わせるために叩いたのか？！」

「まあね　　」

気楽そうに笑顔で答えるキャロルに本気で殴ってやるうかと思えたユアンだが、先ほどの叩きが思った以上に響いていてうまく立ち上がれない。そんな彼をキャロルは無視して立ち上がると、

「わたしこれからお風呂に入って来るけど、貴方は動いちゃダメだからね。ちゃんとそこで転がってるんだよ」

「随分とけが人の扱いが雑だな」

「わたしは看護師さんじゃないからね」

そう言いうと彼女は自分の鞆から着替えを取り出し、部屋を出て行った。

おそらく彼女は自分がいなくなってもユアンが動かないようにするため、傷口を叩いたのかもしれない。だが、もしそうなのならもうちょっと違うやり方をしてほしかった、と思うユアンだった。

><><><><><

それから五分後。

ユアンはようやく体を起こし、床に座ったままベッドに凭れかける事ができた。

「くそ……。キャロルのヤロウ。何か仕返ししてやらねーと気が済まねーぞ」

そんな事を呟きながら立ち上がったユアンだったが、ふと、彼の体がふらりと揺れた。そしてそのまま後ろのベッドに腰をかける形

で座り込む。

「……」

体に力が入らない。筋肉痛のような感覚が体全体を包んでいる。痛みはそれほどないのだが、とにかくだるかった。

「あーあ、やっぱり運動不足だったか」

本人はそう言っているが、実際『運動不足』なんて理由にもならない。

水分&栄養不足で倒れたのが昨日の昼頃。次に合計重量四〇キロ前後の荷物を背負って走ったのが、今日の朝から夕方ぐらいまでの出来事。そしてその後起こった不意の戦闘。

はつきり言って、体が悲鳴を上げない訳がなかった。

ユアンは全てを投げ出すようにベッドに身を預け、両手を軽く広げて天井を眺める。

「……本当に、なさけねーな」

意識がどんどん遠くなる。視界が眩み、何も考えられなくなり、ユアンはそのまま動かなくなった。

## 2 赤い『陣』

小鳥の囀りが鼓膜をつつく。

目を覚ましたら、優しい陽の光が視界に飛び込んできた。思わず開きかけた両目を閉じてしまいが、すぐにまた開き直す。

「……朝か」

ユアンは首を動かして時計の掛かっている壁に視線を向ける。

時刻は午前一〇時一〇分前後。朝と言えば朝なのだが、起きるにしては遅い時間帯だった。

「少し寝過ぎしちゃったな」

ぼんやりとした思考でそんな事を呟くユアンは、時計から視線を外し部屋の中を軽く見渡す。一人用のホテルの一室。その中には彼以外、誰もいなかった。一人用なのだから一人しかいないのは当たり前かもしれないが、彼の場合は違った。もう一人、彼以外に同じ部屋を借りた者がいる。

「……あいつ、どこ行ったんだ？」

ベッドから上半身を起こして、頭をボリボリ掻きながらユアンは言う。そこで彼は、ふと気付く。昨日の夜の全身筋肉痛みたいな体のだるさは消えていたが、代わりに自分の体が相当『臭う』と言う事に。

「そついや昨日風呂入らずに寝ちまったんだっけか」

ユアンは立ち上がると、部屋の隅に置いてある自分のバッグの中を漁り始める。中から着替えを取り出すと、そのまま部屋を出て行った。

「確か風呂は四階だっと思っていたよな」

狭く、一段一段が異様に高い階段を上っていく。四階も三階と建物の構造はほぼ同じだったが、上ってきて早々、目の前に他の部屋とは違う少し大きな扉が目に入ってきた。

「ここが風呂場のようだな」

そう言いながら扉を開き脱衣所に入っていく。中は思ったより広かった。このホテルの一室ほどの広さはあるだろう。

ユアンは入り口に置いてあった籠を一つ手に取ると、その中に着替えを入れて着ている服を脱ぐ。肩に巻いてある包帯を剥ぎ取るように外すと、タオルを左肩に乗せて風呂場に繋がる扉へ向かう。肩の傷は完全に塞がっており、見た感じ湯に浸かっても大丈夫そうだった。

「さーって何週間ぶりかの風呂だ。存分に綺麗になろー」

おー、と一人で言いながらユアンは木の扉に手を掛け、勢いよく右側にスライドさせる。すると視界が白い湯気に包まれた。

(……?)

おかしいな? とユアンは思った。今は朝の10時過ぎで風呂には普通誰も入っていないはず。なのにどうしてこんなにも湯気が充滿しているのか。

(誰かが入ってんのかな？ まあ別にいいか。風呂場は広いし、男  
同士なんだからーんの問題もない。……って、あれ？)

そこでユアンは再び思った。

(っーかこの風呂場って……、女湯と男湯、分かれてたっけ？)

その答えはすぐにわかった。なぜなら、

ユアンの視界に、生まれたままの姿でシャワーを浴びている、見  
慣れた少女が映っていたからだ。

「……………」

彼はその場で固まった。

少女は両手を上げてブラウンの髪を洗っている最中だった。

柔らかそうな肌に蒸気を纏った水が滴り、ほのかに赤みを帯びた  
背中には、髪からシャンプーの泡が落ちてきている。幸い彼女は背  
中を向けていたので大事な部分はほとんど見えなかった。しかし女  
の子の裸なんて生まれてこのかた見た事がない事もないユアンは、  
二の腕の下から覗く小さな膨らみを見て、

(っわー、今まで子どもだと思ってたけど、やっぱり子どもだな。  
全然ないよ。それにしても女の子の肌ってほんときれいだよな！。  
柔らかかそうで。ってなに俺は普通に鑑賞してんだ！？)

変態な感想を心の中で思っていたユアンは、すぐさま全裸の少女から視線を外そうとして、ふと気付いた。

少女の背中。細くて小さなその背中に、赤くて丸い『陣』（魔法陣のようなもの）が描かれている事に。

「……………」

思わずユアンは少女の背中（裸）に視線を戻していた。

女の子の背中にはあまりにも似つかないその『陣』は、彼女の背中を埋め尽くしていた。すぐに気付かなかったのは湯気で見難かったからだろう。

そしてユアンは彼女の背中に『陣』が描かれている疑問の他に、もう一つ気掛かりな事があった。それは、

（あの『陣』の形、一度似たような見た事がある。けど『あれ』は簡単に手に入るものでも扱えるものじゃねーし。それにあの『陣』、『あれ』と本当に似てるけど何かが違う。無理に強化されてるし、自動制御術式が変に組み込まれてるし……………」

リミッターと強制停止術式は付いてるようだけど、と彼は少女の背中から視線を外し、その場で『陣』について考え込もうとしていた。その時だった。

「すごく堂々とした覗きだね」

ゾクリと、冷え切った声が聞こえた。

温かい蒸気が舞っている使用中の風呂場ではあまりに相反する、

絶対零度のような感情の籠っていない声が。そしてユアンは外していた視線を前へと向ける。視線を向けてしまう。

少女は素っ裸の状態で肩越しに振り返っていた。悲鳴は上げなかった。ただ黙って覗きの現行犯であるユアンを見つめているだけ。対する彼は金縛りにあったかのように固まっていたので、しばらくの間二人の視線が絡み合い、時間が止まった。

「……………」

「……………」

人間を見ている瞳ではなかった。まるで捌かれた魚の残骸でも見ているかのような、気持ちの悪いモノでも見ているかのような、不の感情が詰まった瞳だった。

その場に、シャワーの音だけが響き渡る。

いったいどれだけの時が経ったのか、分からなかった。一秒が永遠に感じられ、呼吸すら忘れてしまいそうなのに、湿った空気が肌に染み込み、素っ裸の少女に視界を支配されている。

そして、気が付いたらユアンは風呂の扉を左にスライドさせていた。

トン、と扉が完全に閉まると、後ずさりをしながらゆっくりとその場から離れていく。するとシャワーの音が消えた風呂場から、少女の声が聞こえてきた。

少女は一言、

「……………ヘンタイ」

そう呟いた。

### 3 気まずさ

現在時刻十二時三〇分。

大勢の客で賑わう、とある飲食店の一席で、

「……」

ユアンのテンションは地の底まで落ちていた。自分の昼食がご飯と味噌汁だけなのに、キャロルはグラタンやらスパゲッティやらとても豪華だから、と言う訳ではない。

彼のテンションが下がっている理由。

それは、

空気が死んでいたからだ。

周りの客は楽しく雑談をしながら食事しているのに対し、この二人はその間逆な状態だった。

普通、女の子（三・四歳ほど年下だが）との二人きりの食事と言うのは、多少ドキドキしながらも何だかんだ楽しいはずだ。でも、彼女との昼食は苦痛でしかなかった。

まあ、ついさっき裸を見られた相手と気軽に会話しようと言う方が、無理があるかもしれないが。

「……なあキャロル」

ユアンは沈黙に耐えかねて、食べるのを一旦止めて思わず話し掛けていた。だが彼女は、

「今ごはん食べてるから話し掛けないで」

相変わらずの素っ気ない態度。キャロルは視線も向けず、食事のペースも一定なまま、冷たい声を放つだけ。

「いや、だからあれは単なる事故で、決してやましい事は何も考えてなかったからっ!」

「そんなの信じられないもん」

「何で信じられないの? どこから見ても事故じゃん。そして俺は健全な青少年じゃん」

「どこが? どこから見ても腐った覗き魔じゃん。あんなケダモノみたいな目でわたしの裸を見つめてさ」

そんな彼女の言葉を耳にしたのか、ゾクリ、と周りにいる他の客達から痛い視線を向けられる。そんな視線に急かされて、

「違う! いや違わないかもしれないけど違うんだ! あれはただの好奇心で」

「好奇心?! 好奇心で覗くなんて余計許せない。……初めてだったのに」

「……え?」

「まさかあんな形でなくしちゃうなんて」

「ええ?!」

「もうお嫁にいけないよっ！」

「えええええ?!」

女の子が言うと破壊力抜群な言葉の猛攻に遭い、ユアンは焦りまくっている。同時に周りからの視線が痛すぎる。視線だけで殺されそうだ。

風呂場での一件、ユアンはキャロルが出た後に一応風呂には入ったものの、更衣室の出入り口ですれ違った彼女のゴミクスでも見るような瞳が眼球に焼きついていて、恐怖のあまりゆっくりと浸かれなかった。

その後、風呂から出たユアンは部屋で待っていたキャロルと一緒に、町の中では大きい方の飲食店で昼食を取る事にした。もちろんその際の移動では彼女は数メートル、ユアンと距離をあけて歩いていた。

とまあこれが今までの経緯。

そして現在に至る訳だが。

(……はあ)

ユアンは頭を下げて、心の中で溜め息を付いた。

正直、部屋で待っていてくれていたのは嬉しかった。でも、

(完全に嫌われちゃったかな)

それ以上は喜べない。出来事的に男としては喜べたのかも知れないが、友達(?)としては全く喜べない。

彼はよく女の子に嫌われる。

理由は簡単で、いつもなぜか女の子にとっても失礼な事をしてしま  
うから。

さつきみたいに裸を見てしまったり、ぶつかって拍子に胸やらお  
尻やらを触ってしまったたり、水を被せて服を透かしてしまったり、  
などなど。ベタな事ばかりだが、それらは全て女の子に嫌われる行  
為だ。

(ほんと、何でもいつも俺はこうなんかな)

望んでいないのに、気が付いたらそんな事ばかりだ。他人(主に  
男共)からすれば羨ましい事この上ないだろうが、ユアンにとって  
はいい迷惑な『体質』だった。

ハッピー体質。

それがユアンの体質の名。名付けたのは彼の師匠だった。ついで  
に言うと彼の体質の被害を最も受けたのは彼の師匠だったりする。

(覗いて殺されかけるのは嫌だけど、急に態度が冷たくなるのはも  
っと嫌だな……)

すると、前の方から唐突に深いため息が聞こえた。

「わたしは貴方を勘違いしてたみたい」

ユアンが頭を上げて前を見ると、キャロルの透き通ったブラウン  
の瞳と目が合った。

「最初はクールで頼りがいがありそうで、ちょっとカッコいいなって思ってたんだけど、まさか覗きなんてする変態さんだったなんて」

「だからあれは誤解だって。本当にただの事故なんだって」

若干、涙声になりながらキャロルに懇願するユアン。

「事故、ね。……まあ、そうなんだろうけど」

「信じてくれるのか？」

「一応、貴方には命を助けてもらった恩もあるし、信じてあげないこともないけど。でも、そんな言い訳の前に何かすることが」

「ごめんなさい！ 本当にごめんなさい！」

「なっ、別に土下座までしなくていいよ。地面におでこ擦り付けなくてもいいからっ」

止めるキャロルを無視して、ユアンは全霊を込めた土下座をする。そしてこの後、彼女に自分の数少ない昼食をあげたりして、彼はどうにか許してもらった。

急に信じてくれた事を不思議には思ったがあまり深くは考えなかった。

結果良ければ全て良し。

確かにその通りだな、と思うユアンだった。

### 3 坂井もれ〔おぼた〕（前書も）

3 坂井もれの続もれです。

### 3 気まずさ「おまけ」

食事中の雑談。

キャロルの前にはピラミッド風に盛り付けがされたミートボールと、出来立てのコーンスープが追加されていた。

「つかさ、キャロルって昨日の夜、風呂入ったんだろ？ なんて朝も入ってたんだよ」

「汗をかいたからだよ」

「昨日そんなに暑かったっけ？」

「……うん。すごく暑かった」

なぜかユアンから視線を反らすキャロル。だが彼は気にせず、

「そつえばさ、キャロルって昨日どこで寝たんだ？」

「ッ…」

少女の動きが、止まった。

「？」

さつきから様子がおかしいキャロルにユアンは訝しげな表情になるが、

「もしかして、俺の隣で寝たとか？」

ふざけ半分で言ったのが運の尽き。

突然前から飛んできた熱々のミートボールがユアンの二つの眼球に直撃した。

「いぶがッ!？」

意味不明な悲鳴を上げてテーブルに突っ伏せるユアン。

そしてこの時、キャロルの顔が真っ赤に染まっていた事を、一時的に視界を奪われていた彼は知る由もなかった。

### 3 気まずさ「おまけ」(後書き)

ちなみに寝ている時にキャロルが汗をかいた理由は、隣の誰かさんが暑苦しかったから、だそうです。

結局のところ、今回の覗き事件は最初から最後までその誰かさんの自業自得ということですね。

#### 4 思い〔前編〕

時計の針は十二時五五分を指していた。

「それでこれからどうするの？」

成人男性の約五人分の昼食＋ユアンの昼食を一人で全て食べ終えた大食い少女キャロルが、不意にそんな事を言ってきた。

「そうだな、金はまだあるし、『中央都市』までの食料とかを買いに行こうかなって考えてるけど」

「貴方って『中央都市』に行きたいの？」

『中央都市』とは、世界の半分を支配している東西クロス教と言う宗教組織の首都。

この世界では宗教組織が国家としての役割を果たしている。

「そついや言つてなかったな。俺、ロンドン宗教団に入ろうと思ってるんだ。あそこなら色々珍しい情報とか入ってきそうだし、何より組織の『縛り』が一番緩いんだよ」

ロンドン宗教団。東西クロス教の一派で、術式の研究・解析・創作に発掘、それと対術師戦などに特化した組織。組織としての統一性は他の組織より緩めで、基本的に任務がない時は、所属の術者は自由行動を取れる。

「へー、貴方がねー、ロンドン宗教団にねー」

「おいキャロル。『お前じゃ入るのなんてムリムリ』って目が語りかけてくるんだけど」

「だってロンドン宗教団って『魔術師』以上じゃないと入れないんでしょ？ 貴方自分で『見習い』だって言ってたじゃん。それなのにどうやって入るつもりなの？」

「……」

キャロルの言うとおり、ロンドン宗教団は『魔術師』以上でなければ入れない。過去に『魔法師』ランクで入団した例もあるらしいが、『魔法師』以下の『見習い術師』では常識的に入る事はできないだろう。

そう、『常識的』には。

「まあ一般論だとそうなんだろうが、俺の場合は特別なんだよ」

「特別って、自分で言うのと恥ずかしくない？」

痛いものでも見たかのような的視線を向けてくるキャロルに、『うるせえ黙って聞いてろ』と制するユアン。

「俺はロンドン宗教団のトップに、ある手紙を届けなきゃならねーんだよ」

「？」

キャロルが首を傾げていると、ユアンはコートの懐から一枚の白い封筒を取り出した。

「これ、俺の師匠からの手紙。なんかしんないけど俺の師匠とロンドン宗教団のトップは知り合いみたいで、時々手紙とか出し合ってたんだよ。でも今回の手紙てがみは今までのとは格きやくが違ちがうかなり重要なものらしくて、『お前が届けてこい』って師匠に言われてるんだよ。まったく人使いの荒い人だぜ」

まあ、とユアンは続けて、

「ロンドン宗教団に入るってのは手紙を届けに行くついでなんだけど、師匠がせっかく紹介状書いてくれたんだから、ついでに入っちゃおうかなーってだけ。『見習い』だから入れないってんなら別に無理して入るつもりはねーんだ」

二枚重ねにしてあったのが、ユアンは白い手紙の後ろからもう一枚同じような手紙をキャロルに見せた。おそらくそれが師匠からの紹介状だろう。

「じゃあロンドン宗教団に入れなかったらどうするの？」

「その時は師匠を探してまた旅に出る予定」

「ふーん」

キャロルはそれ以上何も言ってこなかったから、ユアンは手紙を懐ふところにしまう。

「さて、飯も食ったことだし（俺は全然食ってねーけどな）買い物にでも行くか。お前はどうすんだ？」

「わたしは……、もうちょっとここに居ようかな」

「そっか。じゃあこっからは別行動だ。夕方、ホテルに集合ってことで」

コクリと俯いたままキャロルが頷くと、椅子から立ち上がったユアンは、彼女の隣を通過してそのまま飲食店の出口に向かおうとした。

だが……、

#### 4 思い〔前編〕（後書き）

長いと思ったので二つに分けました。  
次はこの二倍の長さだと思えます。

#### 4 思い〔後編〕

「待って」

立ち去ろうとするユアンだったが、キャロルの呼び止めに足を止める。

振り返ると彼女はユアンに背中を向けたまま、小さな人差し指でさっきまで彼が座っていた椅子を指している。

座れ。まだ行くな。

そう言っているようだった。ユアンは頭を掻きながら席について、反対側の席に視線を向ける。

「何だよ、まだ何かようか？」

「……………」

何も言い返してこないキャロルにユアンは首を傾げる。

(……………なんか雰囲氣的なもの凄く重要な話でもしそうな感じだな。もしかしたら自分の事を話す決心でもついたのでか？ 俺は今まで気使って聞かなかっただけ。まあここはあいつから話出すまで黙っておこ)

ユアンは背筋を伸ばしてキャロルを見据える。

<><><><><>

何分経ったのだろう。さっきより周りの音が異様に大きく聞こえてくる。一秒一秒が長く感じる。しかし、彼女はまだ視線を上げない。

(……ん)

外に視線を向けると町には沢山の人たちで賑わっていた。夜と違つてこの町は、昼間は活気があるようだ。しかし、彼女はまだ視線を上げない。

(……んん)

すると、開けてあつた窓の際に小鳥が一羽飛んできた。しかし、彼女はまだ視線を上げない。

(……んんん)

愛らしい声を出して、小さく跳ねながら近づいてくる小鳥。窓際からテーブルの上に飛び移った小鳥はそのままユアンの目の前で動きを止めた。しかし、彼女はまだ視線を上げない。

(……んんんんっ！)

しばらくユアンを見上げていた小鳥は、突然羽ばたいて彼の頭の



「貴方はわたしのせいで怪我をしたの。気付いてるんでしょ？ あの術師たちがわたしを狙ってたこと」

「……」

「多分、また来るよ、奴らの仲間。わたしを殺しに。そしたらまた貴方は巻き込まれるかもしれない。昨日以上の大怪我をしてしまうかもしれない」

ユアンは何も言わない。ただ黙って彼女の言葉を聞いているだけ。

「なのにどうして貴方はなにも聞いてこないの！？ どうしてまだわたしと一緒にいようとするの!？」

彼女の声は弱弱しいものから、強く訴えるような声が変わっていた。

そしてキャロルの言葉もそこで終わった。自分を責めているような声が止んだ。しばらく沈黙が続き、次に声を出したのはユアンだった。

「それで、お前は話す気になったのか？」

「……え？」

先ほどとは違う雰囲気。真剣な表情。

「俺は前に『言いたくなったら言ってくれ』って言ったろ。無理に追及するつもりもないって言ったはずだ」

「もしかして、それで何も聞かなかったの？」

「ああ。他人の事情にズカズカ首を突っ込むほど無神経な性格でもねーし、それに、命も救われたしな」

キャロルは驚いていた。信じられないのだろう。あれだけの被害を受けておきながら、たったそれだけの事で何も事情を聞かないユアンの事が。

「……意味わかんない。どうかしてるよ貴方。お人好しにもほどがある。偶然旅の途中で知り合っただけなのに、名前以外はお互い何も知らないのに、ホント、普通じゃないっ!」

キャロルは涙声だった。目尻に大粒の滴を抱えて、鼻を嚙って、一生懸命ユアンに思いをぶつけている。

「それ……、よく言われるよ」

ユアンはそう言うと席から立ち上がって、キャロルの隣まで歩いていく。足を止めると彼は彼女の頭にポンツと優しく掌を置いた。

「でも、ダメだな俺は。何も聞かない事が相手にとって良い事だと思っただけで、そいつは間違いだっただみただ」

同時に、彼は思った。自分はただ知るのが怖かったんじゃないのか、と。何も聞かない事が相手にとって良い事だ、なんてのはただの言い訳なんじゃないのかと。

命を狙われている人間に関わったって、どうせロクな事にはならない。面倒事に巻き込まれて怪我をするか、ひどい場合は死ぬのが落ちだ。

だが、それ以前に、と彼は思い、か弱い少女に言葉を放つ。

この時、ユアンとキャロル、二人のいる空間から、周りの音が消えた。そして、

「女の子を泣かしちまうのは、悪い事だからな」

そう。これが一番の理由<sup>わけ</sup>。

自分の考えが間違っていたと思った切っ掛け。するとキャロルの動きが、一瞬だけ止まった。

「よし、じゃあ聞く事にするよ。お前のこと、お前の事情。それでお前が泣き止むなら、それでいい」

ふるふると、少女の体が小刻みに震え出す。それはまるで、何か  
が耐え切れなくなって切れそうな感じだった。

「……いいの？ これ以上わたしの事を知ったら、きっと貴方も奴らに狙われるよ?」

「別にいい」

震える声で放った少女の問い掛けを、しかし少年は一瞬も待たず一言で答える。

「……いいの？ わたしと一緒に行動したらけがするよ?」

「別にいいっ!」

「……いいの!?! わたしの話聞いたら、奴ら本気で貴方を殺しに

くるよ!？」

「いいつつつてんだろ！ 何度も聞くな！ そんでさっさと事情を言いやがれ！」

キャロルは頭を上げる。そしてすぐにユアンと視線があつた。

涙が籠った弱弱いブラウンの瞳と、真っ直ぐ強靱な芯が通つた黒い瞳。

しばらく二人は互いの瞳を見つめ合っていたが、

ふえ、と。決壊寸前だったキャロルの瞳から、大量の涙が溢れてきた。

同時に、彼女は大声で泣いた。

泣き声は飲食店中に響いていたが、キャロルは気にしていない様子だった。ユアンに抱きつき、涙で濡れた顔を彼の懐にこすりつけ、幼い子どものように泣いていた。

彼女は、初めてだったのかもしれない。誰かにこんな言葉を掛けてもらった事が。

その理由は、彼女がその身に余るほどの『危険』を背負って生きているから。その小さな身体ですぐに押し潰されてしまうほどの大きな『危険』を。

だから彼女にはその『危険』と一緒に背負える仲間が必要だった。だが彼女は他人に自分の『危険』を押し付けられるような人間ではなかった。

仲間が欲しくても、一人を選ばざるを得なかった。孤独になるほか、なかったのだ。

彼女に残されたのは孤独だけだった。

もしかしたら彼女は『孤独』と言う苦しみに負けて、荒野で倒れていたユアンを助けたのかもしれない。

孤独は、一人は、とても辛い事だから。

“話し相手がほしかったんだよ”

ユアンの脳裏に少女の言葉が蘇<sup>よみがえ</sup>る。

その言葉にいったい、どれだけの思いが込められていたのか、彼は知らない。

でも、

(これも何かの縁だ。最後まで付き合ってやるよ)

心の中で、何かを誓うように言ったユアンは、優しく少女を抱いた。周りの目なんて一切気にせずに。少年は少女が泣き止むまで、何も言わずにただ抱いていた。

## 5 追う者

ここは『リーヴァリー』の町から南に数キロ離れた荒野。そこに一軒の小屋が建てられていた。

「やーっと、追い詰めた」

藁と小さな机しかない小屋の中に、黒いローブを羽織ってフードを被った一人の少年の声が響き渡る。

「……た、のむ。もう、やめて、くれっ」

そして、その少年の前には体重一〇〇キロ以上はあるだろう、太った大男が倒れていた。だが大男は両目を包帯で覆われていて、身体には無数の切り傷があった。その切り傷は以前誰かにつけられたものから、今さっきつけられたものまで様々だった。

「……『標的』の、護衛の特徴は、さっき説明、しただろっ。もう俺に、用は、ないはずだ。だから、これ以上は、やめてくれっ！」

血反吐を吐きながら必死に命乞いをする大男に対し、少年は、

「そいつはできねーなあ。お前は重大なルール違反をした。だからここで死ぬ」

「……そんな。嫌だ、俺はまだ死にたくない！」

大男はぼろぼろの身体を這い蹲らせて、少年から離れようとする。対する少年はローブの中に片手を突っ込んで、

「豚が。どこに行く気だそんな体で？ 逃げられると本気で思ってるのか？」

そして、

ドスツ、と大男の右肩から鈍い音が聞こえた。それは一本のナイフが突き刺さった音だった。

「がっ！ があああああ！」

激痛に大声を挙げて肩を押さえる大男に、少年はただ冷たい視線を向けるだけ。

「痛いかな？ 苦しいかな？ その痛みから解放されたかったら、さっさと他の逃げた奴らの居場所を吐け」

「しっ知らねーよ。俺は、目が見えねーから、奴らがどこ行ったかなんて、わかんねーよっ！」

「信じられないな。お前とデリック、それとアルデは兄弟みたいに仲が良かったじゃねーか。とくにデリックはお前らを実の弟のように慕っていた。あいつがお前を見捨てるのは考え難い」

「……そんなの、昔の話だ」

「それに、お前には『嗅ぐ』力があるだろう？ そいつを使えば奴らの居場所なんてすぐ分かるはずだ」

「……っ」

少年は大男の元上司だった。だから彼らの事はよく知っているの  
だろう。大男とその周りの人間との関係を。

「まあいい。言う気も『嗅ぐ』気もないならここにくたばるんだな」

「まつ待ってくれっ！ 分かった。あいつらの、居場所を教える。  
だから、殺さないでくれっ！」

立ち去ろうとする少年に、大男は縋るような声で呼び止める。

「本当か？」

振り返り、大男の真偽を確かめる少年。

「ああ。あいつらは、ここから北の所にある、山に向かった。別れ  
てから、まだそんなに時間は経って、いないはずだから、多分すぐ  
に、追いつける、はずだ」

途切れ途切れの言葉で、大男は必死に喋る。

「そうか」

少年はその場で大男の言ったことに対し頷き、考え込むと、

「嘘だな」

そう、即座に否定した。

「なっ?!」

「お前は賢い男だ。そして何より仲間思いでもある。デリック同様にな。どうせ時間稼ぎが目的だろう。わざと違う方向を言って俺から奴らを遠ざけようとしても考えたんだろ?」

「……っ、」

表情の固まった大男の顔を見て、少年はニヤリと歪んだ笑みを浮かべる。

「俺の勘だと、奴らは……そうだな、南東に向かったか。行けば黒海に突き当たる。船を使えば『組織』から逃げ切れる確率は格段に上がるからな」

ちくしょう、と大男の口から悔しさの籠った言葉が漏れる。

「どうやら、全て凶星のようだな」

少年は大男に嘲りの視線を向けると、

「豚の分際で俺に嘘をつくたーいい度胸だ。……肩爆せて死ぬ」

そう言い放った瞬間だった。

大男の右肩に刺さっていたナイフが、突如爆発した。

内部から弾け跳んだ肩・肺・胸襟、肩を押さえていた左手などが

小屋中に飛び散り、根元から引き千切られた右腕が回転しながら少年の足元に転がってきた。ナイフの破片が大男の身体のいたるところに突き刺さり、傷口からは大量の血液が溢れ出ている。

「太ってる割に、肉の弾け具合がまいちだったな」

上半身の半分を吹き飛ばされた大男は、悲鳴もあげずに絶命した。そして、彼の顔には悔しさの涙が流れていた。仲間にも迫る危険を遠ざける事ができなかったから。仲間を救う事ができなかったから。自分の死が、無駄死になっちゃったから。

「さーって、次はどうするか」

黒いローブを羽織った少年は、静かに小屋から外に出る。その際、小屋に風が吹き込んだ。風は少年の黒いローブを靡かせ、フードを頭から外していった。

少年の素顔が露になる。

黒と赤の髪の色をしていた。正確に言うなら元は黒髪だったのだろうが、毛先が血のような赤に染められている。耳には金色のピアス。瞳の色は赤っぽい黒。どこから見ても善人には見えない少年だった。

実際、彼は善人ではない。

「デリック達を追うか、それとも『標的』を抹殺するか」

少年は俯いて、しばらくその場で考え込む。そして、

「よし、決めた」

顔を上げ、次の任務に出かける。  
彼の通った道には、赤色しか残らない。

## 6 事情

「ここなら追っ手も無暗に近づこうとは思わないだろ」

ユアンは辺りを軽く見渡しながらそう言った。

ここは『リーヴァリー』と言う町の中心にある広場。中央には大きな噴水があり、周りは木とレンガの建物で円状に覆われている。東西に伸びている町の中央通りと直結していて、南北側もちよつとした大通りと繋がっている。噴水の水が穏やかな陽の光に照らされて輝いている。

噴水の周りでイチャつくカップルや、追いかけて遊んでいる子ども達。ベンチに寝転がって昼寝をしている人や、木の陰に入って本を読んでいる人。飼い犬と一緒に散歩しているお年寄りや、他愛ない雑談をしている奥さん方。

そんな何でもない普通の日常を見て、少女は呟く。

「本当に昼間は賑やかなんだね」

夜は誰一人として外を歩いていないのに、昼間はこの賑やかさ。まるで別の町のようにだ。

「『魔ジン』が生まれた町って以外は、他と変わらない普通の町なんだろうな」

ユアン達は広場に入り、誰も座っていないベンチを見つけると、二人揃って腰をかける。

「……いい天気だね」

「……ああ」

「雲一つないよ」

「そうだな」

「明日も晴れるといいね」

「ああ」

「いま何時だかわかる？」

「正確にはわかんねーけど多分一時二〇分ぐらいじゃね？」

「一時二〇分か。けっこう時間経ったね」

「だな」

二人は青い空を眺めながらポツポツと言葉を交わす。

「店、追い出されちゃったね」

「そりゃそうなるだろ。あんなにわんわん泣いてりゃ。むっちゃ周りの人迷惑がってたぞ」

「だってユアンが泣かすからさ」

「泣かすってなんだよ。俺は励ましたただけだぞ。お前が勝手に泣き出しただけだろ」

「女の子を泣かすような言葉を言ったのはユアンじゃん」

「俺は別にそんな言葉を言った覚えはないっ！」

「どさくさに紛れて抱いてきたくせに」

「先に抱きついてきたのはどこの誰だっけか？」

「鼻伸ばしながらわたしのお尻さわってきたくせに」

「伸ばしてねーし触ってねーよっ！」

いつの間にか言い合いに変わっている二人の会話。

朝食兼昼食を取った飲食店では、周りの客に迷惑だから、という理由で追い出されてしまった。だがユアンはキャロルから詳しい事情を聞かなければならないため、ゆっくり話せそうな場所を探して町の中を歩き回り、そして見つけたのがこの広場。

ユアンが最初に言った『ここなら追っ手も無暗に近づこうとは思わないだろ』と言うのは、この広場の前には『教会』があるからだ。『教会』とは、それぞれの宗教組織が領地内に置いてある役所的なところのこと。町に一つの割合で置いてあり、警察としても機能している。そのため指名手配されていたり、有名な犯罪組織に所属している者は近づけないところでもある。

「それじゃ、どこから話したらいい？」

キャロルはぼんやりと空を眺めているユアンに、首を傾げて聞いてきた。

「んー、そうだな。お前が追われてる理由……、いや、お前を追っている組織のことを最初に教えてくれ」

「……わかった」

彼女にはまだ事情を話すのに抵抗があるようだった。全く関係のない人間をこれから『危険』に巻き込もうとしているのだから、当然だと言えば当然なのだろうが。

「キャロル」

「分かってるって。ちゃんと言うから」

そう言うつと彼女は数回、軽い深呼吸を繰り返し、

「まず、わたしを追ってる組織の名前から言うね」

彼女の言葉に無言で頷くユアン。適度な緊張感を持った二人。そしてキャロルは言う。

「その組織は『薔薇十字団』って言うんだよ」

「薔薇十字団！！？」

キャロルが言った瞬間、ユアンは思わずっ！と言った感じに大声を挙げてしまった。

「ちよっ、（ちよつとあんまり大声でその名前呼ばないでっ！目の前に教会があるんだし、面倒な事になったらどうするのっ！？）」

「（あつ、悪い。まさかそんな大組織の名前が出てくるとは思わなかったから）」

声の音量を小さくしてきたキャロルに吊られ、ユアンも小声で言葉を発する。

案の定、キャロルが言ったとおり周りにいた数人がこちらに視線を向けてきた。

しかし、ユアンがつい叫んでしまったのも無理はないかもしれない。

『薔薇十字団』と言う組織は、世界中の宗教団体と敵対している秘密結社のこと。団員メンバーのほとんどが犯罪者として指名手配されている事から、犯罪者雇用組織とも言われている。

「世界一巨大な裏組織と言われておきながら、その全容は全く言っていないほど分かっていない、謎だらけの組織。唯一わかっているのは団員メンバーと、様々な組織に人材を派遣しているって事。一般的に知られているのはこの二つぐらいかな」

キャロルの言葉にユアンは頷く。

「でもさ俺思うんだけど。あの組織ってそんな大した事やってたかねーか？ それなのに無駄に有名だし」

「まあ組織事態はあんまり大きい事やってないよね。でもあの組織が有名な理由はそこじゃない。一番の理由は組織の団員メンバーなんだよ」

「メンバー？」

繰り返したユアンの言葉にキャロルは再び頷くと、

「ウィルア・U・ウエンスタウン、イマード・イーリヤー、キファ  
ーフ・スイナン、グレンガー・ザースロード……。今挙げたのは全  
員、上位二級以上の犯罪者。最初と最後に言った人は上位一級犯罪  
者。貴方が一〇人束になつてかかつて、傷一つ付けられないよう  
な化物たちだよ」

指名手配中の犯罪者には、その危険度を表す階級レベルが存在する。上  
から一級〜五級。それぞれの級には上・中・下とさらに細かい階級  
がある。危険度の最低が下位五級犯罪者（術を使って窃盗や暴行事  
件などを起こした術者など）で、最高が上位一級犯罪者（世界レベ  
ルで凶悪な事件を起こした術者など）。

「んっ、なんだよその言い方。俺がもの凄く弱い奴みたいじゃねー  
か」

「別にそんなムキにならないですよ。今のはただの例えだから。ちょ  
っと盛っちゃった感もあるし」

「……ふーん」

「話を続けるけど、『薔薇十字団』には上位一級犯罪者が五人いる  
の。そもそも上位一級なんて世界中で二〇人もいないんだから」

「まああんなのが大勢いたらこの世界とつくに終わってるしな」

「？ 『あんなの』ってユアン、上位一級犯罪者で知り合いでもい  
るの？」

「えっ！？ いや、そういう訳じゃねーけど」

「……」

不審な視線を向けてくるキャロルに、ユアンは思わず視線を反らした。すると彼女は一回溜め息を付いて、

「ま、今はそんなのどうでもいいか。それじゃ次はなに聞きたい？」

「……じゃあ、お前が追われている理由でも聞こうかな」

「わかった。でもこれはあんまり詳しくは言えないよ？」

「分かってるって」

「ならいいけど。それじゃかなり簡単に言うけど、わたしね、その組織の秘密を知ってしまったの」

「秘密？」

ユアンが聞き返すと、キャロルは『うん』と一回頷く。

「正確には組織の『計画』だけだね。でもこれ以上は言えないよ。これ以上知ったら本当に取り返しの付かない事になるから」

「一番大事なところが聞けないのかー」

「貴方がわたしを守るために、ずっと一緒にいてくれるって言うなら教えてあげる」

「んー、でもここまで聞いたんだからもう、いっその事全部聞いち

やおつかなーって思えなくもないんだけど」

ユアンは視線を上げてぼんやりと言った。だがキャロルは、そんな彼の言葉に、

「本当にもうダメ。今ならまだ引き返す事ができる。わたしと別れても貴方までは狙われない」

とても真剣な表情で言い返した。それを横目で見たユアンは、

「そつか。それじゃなんでお前は組織の『計画』ってのを知ったんだ？」

「それは……」

そこで彼女は言葉を詰まらせた。まるで一番聞いてほしくない事を聞かれたかのように。

でも、

「話さなきゃいけないよね。これは」

それは、ユアンに言った言葉ではなかった。

まるで自分自身に言い聞かせているかのように、自分自身に暗示を掛けるように言った言葉だった。

「少し、わたしの家族の話をするね」

そう前置きした少女は再び深呼吸をし、意を決して話し出す。

「わたしの家族はわたし以外、父も母も兄も全員『魔術師』ランク

の術者だった。特に母は術式の改造が得意で、術者試験を受ければ絶対に『魔道師』ランクに昇格できる実力を持ってたの」

術師階級と言うものがある。下から、

見習い術師      魔法使い      魔法師      魔術師      魔導

師・騎士      魔導仙人

と言った具合だ。

魔術師は自分に合った術式を見つけた、プロの術師。魔導師はその上で、一般的には術を他の者に教える事の出来る術師を言う。

「父も兄も母と一緒にでかなりの実力者だった。でもね、ある日突然、わたしの兄が消えたの」

「兄貴が消えた？」

ユアンが聞き返すとキャロルは続けて、

「術師教育学校スクールの帰りに、突然連絡が取れなくなったの。母たちは必死に兄を探してた。でも手がかり一つ掴めなかった。誘拐されたのか、それとも自分からいなくなったのか。兄はね、はつきり言っ  
て何を考えているか全く分からない人だった。術師としての実力はあつたらしいんだけど、何か難しい事ばかり言ってる、正直わたしは怖かった。よく母たちと口喧嘩してたのも覚えてる」

「なんか、兄の話をしてるにしては、ちょっと他人行儀すぎないか？」

「しょうがないじゃん。わたし、兄とはあんまりしゃべった事ないんだもん。いつつもどこかに出かけて、帰ってきても家ではいつも部屋に閉じこもってるし。それに、あんな人、……兄だなんて思

ってないし」

「なんでだよ？ 自分のアニキだろ？」

そこで、キャロルの雰囲気が一瞬、暗くなった。

「なんで？ そんなの決まってるじゃん。わたしの兄は」

そして暗い雰囲気は、殺気に似たものに変わって、

「父と母を殺したから」

「……っ」

その言葉に、ユアンは絶句した。

彼女の声は少し荒々しかった。今までに聞いた事のない、憎しみを抱いている声。

彼女には、明らかに似合わない感情。

「それはね、ある日突然だったの」

そして少女は語り出す。暗い、暗い、過去の記憶を……。

7 少女の闇（かこ）（前書き）

キャラクターが語る回です。

## 7 少女の闇（か）

その日、父は『兄を見つけた』って言って慌てて帰ってきた。

でも、父の顔は行方不明だった息子を見つけたって言うのに、全然笑っていなかった。それどころか、怯えているようにも思えた。

「本当なのあなた？ あの子が、ダニエルがどこにいるか分かったの？」

言ったのはわたしの母。

兄は半年以上、行方不明だった。父たちは仕事の合間や終わった後に兄を探していたらしいが、全く手がかりが掴めなかったようだ。だけど、その日突然『近いうちに帰る』と兄から連絡が入った。

「ああ。でも一体何を考えてるのか、あいつは……、『薔薇十字団』の団員になったらいい」

「え!？」

その言葉に母はひどく驚いていた。

父が言うには、兄から連絡がくる前に仕事の同僚の術師からその事を聞かされた、と言っていた。『薔薇十字団』のローブを羽織った兄を見た、と。

「あいつ、以前妙な奴らとつるんでいるなとは思っていたが、まさか『薔薇十字団』の連中だったなんて」

二人はひどく落ち込んでいた。その時のわたしは、まだ『薔薇十

字団』がどんな組織が知らなかったから何も思えなかったけど、今なら二人の気持ちかわかる。

そしてその日の夜、事件は起こった。

豪雨だったその日、わたしは雷が怖くて母と一緒に部屋で寝ることにした。でも、夜中にトイレに行きたくなったわたしは、母を起こして一緒に行ってもらうよう頼み込んだ。

部屋を出て、父の書斎しよさいの前を通り過ぎようとしたわたしたちは、突然父の書斎の中から大きな物音を聞いた。

わたしは驚いて反射的に視線を母に向けたんだけど、その時の母の表情がとても怖かった事を憶えている。殺気を放った、プロの術師の表情。

「キャロル、私の後ろに隠れてて」

そう言った母は、わたしを自分の後ろに付かせた。

そして、ゆっくりと父の書斎の扉を開けて、わたし達は、見た。見てしまった。

久しぶりに見た兄が、大剣で父の首を跳ねる、その瞬間を。

わたしにはその時の状況が理解できなかった。どうして兄が父の首を飛ばしているのかが。だから悲鳴が出なかったのかもしれない。状況に頭が付いて行っていなかったのだ。

でも、母は違った。実の息子がその父を殺したにも関わらず、不自然なほどに冷静だった。

まるで、覚悟していたかのように。こうなる事が分かっていたかのように。

母は後ろを振り返り、わたしの背の高さに合わせるようにしゃが

み込むと、わたしの額に熱でも測るかのように触れた。

「キャラル、いい？ 今から言う事をよく聞いて。わたしは今、あなたの頭の中に情報を送り込んで。大切な情報を。これを近くの教会まで行って、伝えてきてほしいの。いや違う。それだけじゃだめ。頭の中の情報を引き出せる術者を探して。手遅れになる前に。わかったら、この紙を開いて中に描かれている陣に触って。そうすればあなただけはここから逃げられるから」

「えっ？ なに？ どういうこと？ お母さんはどうするの？」

「お母さんはここに残って、あなたの兄さんを止める」

そう言うのと、母は立ち上がって、兄のいる父の書斎へ入っていった。その時の母の顔は、とても悲しい顔をしていた。

母は術を発動させると同時に、兄に襲い掛かった。狂気を放ち、完全に殺す気で。

そして、外で雷が光ると同時に、

母は呆気なく、兄に切られた。

今度のわたしの反応は父の時とは違った。自分から離れていく母の後ろ姿をしっかりと見ていたわたしは、目の前で起こった現実を理解していた。

だからわたしは父の時みたいに無反応ではいられなかった。

「あつ、ああつ、あああつ！」

だからわたしは、絶叫した。



自分の頭の中にある『情報』を引き出せる術者を探すために。  
母との約束を果たすために。

## 8 似たもの同士

周りは陽気な陽の光に包まれて、子ども達は追いかけて楽しんで遊んでいる。

この広場はそんな、平和を絵に描いたようなところだった。

（両親を殺された。自分の目の前で。しかも殺した相手が実の兄だなんて……）

だが、広場の隅にある幾つかのベンチの内の一つに、明らかにこの場には相応しくない暗い雰囲気を出している少年と少女がいた。

「……」

二人は黙り込んでいた。話し終えたキャロルは俯いて喋らなくなり、黙って話を聞いていたユアンは未だに黙ったまま。

なのだが、ユアンの場合は黙るしかないのかもしれない。

なぜなら、キャロルが抱えている『闇』<sup>かこ</sup>は、彼が思っていた以上に残酷で、深かったから。

（……くそっ）

ユアンは心の中で吐き捨てた。

（何だよそれ、ふざけんなよ。こいつ、今までこんなもんを一人で抱えて旅してたのかよ）

普通なら、心が壊れてしまってもおかしくない現実だった。生きる気力をなくし、自ら死を選んでしまっても不思議じゃない

い。この誰もいない世界で、一人だけの世界で、殺される恐怖に怯えながら毎日ビクビク過ごすより、死んだほうがマシかもしれないから。

でも、彼女は生きる事を選んだ。自分に託された使命を果たすため、生きようとしている。

それはとても厳しい選択で、強い心を持っていなければ決してできない事だ。

(……この娘は、いったい)

だからユアンは思う。心の底から。

(なんでこんなにも、真っ直ぐなんだ)

彼にはキャロルの気持ちがあつただけ、いや、それ以上に分かる。それは、彼も彼女と同じような経験をしているから。同じような思いをした事があるから。

「……お前は、強いな」

「えっ？」

と、さっきまで何も喋らなかつたユアンが突然言葉を放つたせいで、キャロルは少しびっくりしたらしい。ユアンは続けて、

「俺は、お前みたいにはできなかった。怯える事しかできなかった。お前みたいに、前に進む事ができなかった」

彼の脳裏に、薄汚れた暗い部屋の隅で震えながら丸まっている自分の姿が一瞬過ぎる。

「……どういっ、うと？」

ユアンの言葉にキャロルは怪訝な表情を浮かべる。だが、彼は優しく笑って、

「俺とお前は、似たもの同士ってこと」

キャロルの頭を撫でるだけ。

その時のユアンの笑みが悲しみに沈んでいた事は、この場にいた彼女しか知らない。

## 9 別々に

「つーかさ、お前のその話だと少し不自然なところがあるよな」

「?」

気を取り直して本題に戻る二人。

「まず一つ目が、お前の両親は術者で、しかも相当な使い手だったんだろ?」

「そうだよ。周りはみんな『魔道師』並だって言ってた」

「でもお前のアニキに呆気なく殺られたと」

「……?」

そう言った途端にキャロルの表情が暗くなった。だが、ユアンはそれをあえて無視して、

「でも、それおかしくねーか?」

「……?」

「だって『魔道師』ランクの術者がそんな呆気なくやられるとは思えねーんだよな。お前のアニキも『魔道師』ランクだったとしても、勝敗は一発や二発じゃ決まらない」

同じ実力を持つ術者同士の戦闘は、一瞬で決着が付く事はほとん

どない。互いが数々の攻防を繰り返し、体力や元力マッナを削り合い、そこで出た経験の僅かな差や術式の相性、また戦闘中での術式の使いどころの判断で、初めて勝敗が決まる。

ましてやキャロルの両親（特に母親）は術者試験を受ければ『魔導師』ランク間違いなし！なんて言われていた術者だ。戦闘の経験に至っては心配ないだろう。

そんな術者が、自分の息子にあっさり殺されるとは考え難い。不意打ちを食らったのならまだ納得できるが、さっきのキャロルの話だと、彼女の母親は真正面から兄に立ち向かったと言っている。しかも術式を発動させて。

「つまり、何が言いたいのかと言うと」

ユアンは一泊置いて、言葉を放つ。

「お前の両親は、わざと殺された可能性がある」

「ッ!？」

当然、キャロルは驚く訳だが。

しかし、それは飽くまで可能性の範疇でしかない。実際にキャロルの両親や兄の実力を知っている訳でもないし、その時の現場に居合わせていた訳でもない。もしかしたら兄は半年でもの凄い成長を成し遂げ、両親を軽く越す力を身につけたのかもしれない。もしかしたら他に術者がいたのかもしれない。

「ま、根も葉もないただの仮説だがな」

ユアンは片手を振りながら、

「それと次に、どうしてお前の母親は『薔薇十字』の計画を知っていたのかって事なんだが」

「……、」

それは、この件で最大の謎と言ってもいいだろう。

『薔薇十字団』はどういう組織なのか、ほとんど分かっていない秘密主義な組織だ。そんな組織からこれからしようとしている『計画』が漏れるとは考え難い。

だが現に、情報は漏れてキャロルの頭の中に入っている。そして連中はどういう経緯で知ったのか、キャロルが『計画』を知っている事を知っている。

「多分、これにはもっと深い何かがある。俺なんかが想像もできない何か」

なぜキャロルの兄は『薔薇十字団』の団員になったのか。

なぜキャロルの両親は彼女の兄に呆気なく殺されたのか。

なぜキャロルの母親は『薔薇十字団』の計画を知っていたのか。

他にも彼女の住んでいた町が破壊されていた事や、彼女の背中にあった謎の『陣』の事など、不可解な所はかなりあるがユアンはそれら全てを口に出す気はなかった。

「いろいろ謎は多いが、まずはその頭の中にある『薔薇十字団』の『計画』を教会に伝えなきゃいけない。だが、口で言っただけじゃ誰も信じてくれない。だから頭の中の情報を引き出せる教会の術者を探しているって事か」

大体事情を理解したユアンは、ベンチから立ち上がる。

「よし。それならさっさと行こう。もしかしたらその教会に頭の中の記憶を引き出せる術者がいるかもしれないし」

ここで彼は、ふと思った。

この町に探している術者がいたら、おそらく彼女とは別れる事になるだろう。『薔薇十字団』の計画を知っている彼女の身柄は、教会が保護してくれるだろうから。そうなったらユアンは不要になる。そう思うと少し寂しさが残るが、彼女の命が掛かっているんだ。そんな自己中心的な事は言ってられない。

心のどこかで彼女との別れを決意したユアンだったが、

「この町の教会にはわたしが探してる術者はいないよ」

彼女はそう口にした。

「は？ お前この町くんの初めてなんだろ？ 何でそんな事知ってるんだよ」

「初めて来る町でもその町にある教会のメンバーぐらいは簡単に調べられるんだよ」

マジで？ とユアンはキャロルの言葉に驚嘆する。

「ついでに言うと『メインドトフェイスブレイ記憶表示』系の術式を使う術者がどこの教会にいるかもわかってたり」

「そうなのか！？ じゃあ何で早く会いに行かないんだよ」

「だって居場所知ったのつい最近だもん。これでもかなり急いでるんだから」

彼女の話だと、この町から北西に向かった先にある『ワルシャ』と言う町の教会に、目的の術を使える術者がいるらしい。

「それでね、ワルシャに向かう道中にわたしの知り合いが住んでる町があるの」

そう言ったキャロルの声が少しだけ楽しげに聞こえた。

「知り合い？」

「元は父の友達でアーウエル＝ローマーって言う人なんだけど、むかし何度か家にきてくれて遊んでくれた人なの」

「……」

この時、ユアンは少しだけ驚いていた。

彼女は既に両親を亡くしている。そして兄は『薔薇十字団』の団員。だから今の彼女には自分以外、頼れる家族や仲間、知り合いがないと彼は勝手に思い込んでいた。

しかし、家族がない事が世界中で一人だけになるとは限らない。今までずっと部屋で閉じこもっていた訳ではない彼女には、さまざまな人との出会いがあり、さまざまな人とのつながりがある。

ユアンはその事に内心ホツとしていた。彼女が完璧な孤独ではない事に。

「じゃあどうするよ？　すぐにでも会いに行くか？」

ユアンの意見にキャロルは『うーん』と考え込む。そして待つこと数秒、

「実はね、アーウエル小父さんにはもう連絡してあるんだよね」

「え？」

彼女の意外な言葉に彼はまたもや驚かされる。

「『一週間後に会いに行きます』って手紙送ったの。でも手紙送ってからすでに一週間経っちゃってるんだよね。だからここでわたしから提案があるの」

「提案？」

「役割分担するの。わたしは教会に行つてアーウエルさん宛ての手紙を書いて、それを送る。その間に貴方は旅の食料を調達するの」

「？　なんで別々に行動する必要があるんだ？　食料なんて後で一緒に買いに行けばいいじゃねーか」

「でも絶対一緒に行かなきゃならない理由もないでしょ？」

「そりゃまあそうだけど……」

「それとも貴方はわたしと買い物デートしたいの？　手を繋いで仲良くカップルみたいに」

「なっ、別にんな事言つてねーだろ！」

若干顔を赤くしながらユアンはキャロルの言葉を全力で否定した。  
するとキャロルは、

「……むっ、そんなに強く否定しなくてもいいのに」

と、頬を膨らませてなぜか拗ねてしまった。だが次には、

「ま、貴方がそう言うならいいんだけどね」

何だか怒っているような感じに変わっていた。

「それじゃわたしはこれから教会に行つて手紙書いてくるから、貴方はちゃんと旅の食料二人分買つておくんだよ」

そう言い残すと、彼女はさっさと一人で教会に向かつて行く。

しばらくキャロルの背中を眺めていたユアンは、彼女が教会の中に入つていくのを確認すると、ベンチから立ち上がった。

「何でキャロルが怒つてんのかわかんねーけど、暇になったしあいつの言う通り、旅の食料でも買いに行きますか」

現在時刻は一時四十九分。

キャロルは教会、ユアンは町の市場へ足を運ぶ。

## 10 迫りくるは

ここは大勢の人が行き交い、賑わっている『リーヴァリー』の市場。新鮮な野菜や魚、肉などがあれば食器や武器などもたくさん売られている。

と、そんな市場の中を、一人の少年が歩いていた。フードを被り、薔薇の刺繍が入った黒いローブを羽織っているその少年の格好は、周りから明らかに浮いている。はずなのに、彼は不自然なほどに目立っていない。

(ブラウンの髪の色をした十二・三歳ぐらいの少女と、黒髪で東洋系の十五・六歳ぐらいの男……、か)

少年は人を探していた。知り合いではない。少女の方の顔は写真で見たことがある。名前も聞いている。だが相手の方は自分の事は全く知らないだろう。一方的に彼が追っているのだから、当たり前と言えば当たり前なのだ。

それではなぜ少年はその少女を探しているのか。それは『組織』から命令されたからだ。

その命令内容は至って簡単。

『キャロル＝マーキュリーとその周りにいる者を全て抹殺せよ』

「やっ」

少年は人ごみの中で足を止めた。行き交う人々は彼に迷惑そうな視線を向けていたが、当の本人はこれまた全く気にしていない。

「どこにいやがるのか」

周りには老若男女さまざまな人がいる。人ごみの隙間に入って走り回っている子どもや、大きな声を出して客引きをしている大人。店の前で何を買おうか悩んでいる主婦や、商品の値段を値切るうとして店の人間ともめている男など。

すると、遠くの方から一際大きい声が聞こえてきた。

正確には少年の後ろからだ。もちろん彼に掛かった声ではない。

「ゴラア！ 待ちやがれクソガキイ！ 店のもん返しやがれ！」

乱暴な口調の男の声。

どうやら店の品を子どもに盗まれたらしい。それを聞いてか、周りが少しざわつき始めている。

当然ながら少年はその事に一切興味を示していない。彼がここに来た理由は飽くまで任務を遂行するためなのだから。それにこの手の騒ぎはすぐに収まるものだ。解決するかしないかはさて置いて。

ところが、周りのざわつきは一向に収まらない。それどころか次第に大きくなっていつていつていっているような気がする。

と言つよりこちらに近づいてきている気がする。

「……」

今まで全く興味を示していなかった少年だが、さすがにこれだけ騒がれては任務に集中できないと思い、後ろを振り返り少しだけ視線を向けようとした。

だが、突然後ろから走ってきた子どもが少年を横切っせいで、またさっきと同じ方向を向いてしまう。その際、少年は走ってきた子

どもを無意識に目で追ってしまっただが、すぐに人込みに消えていったので彼も同時に視線を外した。

（あの子ども、両手に何か持っていたな）

おそらくさっきの子どもが店の品を盗んでいった犯人なのだろう。周りのざわつきもさっきの子どもが通り過ぎて行った事で治まっていた。ついでに言うとさっきの子ども服、もう何日も洗っていない感じだったから、おそらく孤児なのだろう。

（まあ、俺には関係のない事だ）

周囲も落ち着いた事なので、少年は再び任務を続行しようと歩き出そうとした。その時、

ドンッ！ と後ろから何かが、いや誰かがぶつかってきた。

少年の体が衝撃で二歩ほど前に出た。

「  
」

そして彼は無言のままゆっくりと後ろを振り返る。

そこには白いＴシャツを着た筋肉質な男が立っていた。身長は一八〇センチ前後で、敵つい顔つきのおっさんだった。着ている白いＴシャツは黄ばんでいてピッチリ体に張っている。この男がさっきの子どもを追っているのだろう。

「ってーな。おいガキ！ そんなところで突っ立ってんじゃねーぞ  
」

「……」

自分からぶつかっておきながら逆ギレし出す筋肉質な男。再び子どもを追いかけるため、その男は少年を片手で押しのけ前に進もうとする。

少年の体が後ろにさがる。男の足が前に出ようとする。

すると不意に、何かが切れる音が回りに響いた。それは比喻でもあり、そのままの意味でもある。

少年は片手をローブの中に突っ込んで、

子どもを追いかけるため、一歩前に踏み出そうとしている筋肉質な男。

だが男がその足を踏み出す事はなかった。

何故なら、

前に踏み出すはずだった男の左脚と左腕が、空中で赤いラインを引きながら舞っていたからだ。

「……は？」

間拔けた声が入込みに響く。

男の視界には宙を舞っている人間の片腕、片脚が映っている。だがそれが自分のものだと言う事は、このときはまだ気付いていないのだろう。

太股の半分から下をなくした左脚に体重を移していたせいで、男は体勢を崩す。しかしこれも、どうして自分が体勢を崩しているのか本人は分かっているようないようだ。

倒れかける自分の体を男は左手で支えようとする。それは人間な



( やっべー。思わずやっちゃったよ )

少年は右手に隠し持っているナイフをローブの中に仕舞い込む。

( さっきのは多分誰にも見られてねーはず )

常人では決して目で追うことができない早業。音も無く、命を狩る暗殺の技術。

( でも確実に教会の連中は駆けつけてくる。見つかると面倒な事になるし念のため場所を移動するか )

一秒にも満たない一瞬の時間で大人の片腕と片脚を切り落とした少年は、小走りで現場から遠ざかるうとした。

その時、不意に少年の視界の隅に一つの人影が映った。

周りにも大勢の人間がいるにも関わらず、その人影だけ意識が向いた。少年は思わず足を止め、視線をその人影に向ける。

二〇メートルぐらい先にいるそれは、十五・六歳ぐらいの少年だ。黒い髪に東洋系の顔立ちの、( ここらでは珍しいが ) どこにでも居そうな普通の少年だった。

しかし、黒いローブで身を包んだ少年には、そうは映っていないかった。

( ……まさか )

それはついさつき逃亡を図ろうとして彼に殺された大男から聞いた、標的の特徴と合致していたから。

（東洋の人間はここらへんじゃ珍しい。そんなにいるもんじゃねえ）

つまり、おそらくあれが標的の一人。

大男が言っていた護衛の男。

「さっそく、見つけた」

周りは筋肉質な男が倒れている場所から、少しでも早く遠ざかろうとする人間と、騒ぎを聞きつけてきた野次馬とでこった返していた。そんな中をロープを羽織った少年は立ち尽くしている。

対する黒髪で東洋系の顔立ちの少年は野次馬の方らしく、その場から離れるどころか現場に近づこうとしている。

少年は標的を見据え、動き出す。

人の流れを慎重に掻き分け、少しずつ近づいていく。そして標的との距離が一〇メートルを切ったところで、不意に標的が進むのをやめ方向を変えて動き出した。

正確に言つと少年から距離を取る形で、標的は離れていく。

（くそっ！ 逃がしてたまるか！）

今までは周りの人間にはそこまで迷惑をかけずに少年は進んでいた。変に目だつてしまうから。

だが、今となつてはそんな気遣いをしている訳にはいかない。

強引に人の流れを引き裂き、標的に近づいていく。ところが二人の少年の距離は離れていくばかり。

( ツ )

すると、標的である東洋人の少年が人気のない建物の隙間に入っていた。それを確認した黒いローブの少年は、

( おうおう、自分から狩られやすい場所に移動するとは )

さっきまでの焦り顔とは打って変わって、ニヤリ、と邪悪な笑みを浮かべている。

彼は人の流れの中を強引に進むのをやめ、ゆっくりと歩く事にした。

「焦っちゃいけねえ」

ポツリと少年の口から言葉が漏れる。

幸い、標的の少年は建物の隙間の中で動かない。

そして、少年の笑みは止まらない。

「こづいづのは楽しんでこそ、だろ？」

まるで自分の狩心に語りかけるように言った少年は、ゆっくりと、だが確実に標的を狩るため、その足を進める。

## 1 襲撃者

「……暑い」

両手に買い物袋を持ったユアンは、建物と建物の隙間にある陽の光があまり届かない小道の入り口付近で、立ったまま壁に凭れかかっていた。

「つーか、何だったんだ？ さっきの騒ぎは」

先ほど、市場で騒ぎが起きた。彼は騒ぎの起こった現場の近くにはいたが、現場そのものに居合わせた訳ではないので、一体どんな騒ぎだったのかは知らない。気になったので近づこうとしたのだが、大勢の人の流れに遮られ現場には行く事ができなかった。何より、無理をして現場に行く必要もなかったため、彼は人込みを避けるため一先ず人気のないこの小道に入り込んだのだ。

「人込みは苦手だ。人の熱で暑苦しいんだよ」

右手の買い物袋を地面に置いて、服の首元に人差し指を引っ掛けてパタパタ扇ぐユアン。

しばらくの間、そこでぼーっとしていたユアンだったが、買い物物を再開するため地面に置いた袋を手に取り、小道を出ようとした。

「あと旅に必要なものは、っと」

そう言ったユアンだが、しかし彼がこの薄暗い小道から出る事はなかった。

妨害が入ったからだ。

風を切るような音と共に、後ろからユアンの足元に何か刺さった。当然彼は足元に視線を向ける訳で、

(……ナイフ?)

それはレストランなどでいつもフォークやスプーンの隣に置いてあるあのナイフ、ではなく、正真証明人を殺す為だけに作られた鋭い短剣<sup>ナイフ</sup>だった。石畳の地面にしっかりと突き刺さっている辺り、切れ味は相当なものだろう。

(何でこんな物が後ろから……)

考えて、彼は警戒した。すぐに後ろを振り返ろうとしたが、その前にそれは起こった。

突如、足元の地面に刺さったナイフが起爆した。

「ッ!?」

何かを叫ぶ暇もなかった。

慌てて両手を顔の前で組んだユアンだったが、そんな程度ではそれを防ぐ事はできない。

爆炎は上がらなかった。

ところが、その代わりと言うように耳を割るような甲高い爆音と、普通の爆弾の数倍はある異常な爆風がユアンを襲った。

その場から五メートル以上吹き飛ばされた彼は、地面に背中を打

った衝撃で肺から酸素を根こそぎ吐き出す。さらに至近距離からまともに爆音を聞いたせいで、尾を引くような耳鳴りが鼓膜を支配している。

「……ッ」

そして、それ以上に体の至るところから鋭い痛みが走っていた。両腕を顔の前で組んだお陰で視界だけは潰れていなかったから、彼はすぐに自分の体に視線を向けたのだが、

「……くそッ」

思わず毒づいていた。しかし一時的に爆音で聴覚を潰されているユアンには、自分の放った言葉がしっかりと発音されているのかどうかもわからない。

彼は体中に無数の切り傷や刺し傷を負っていた。理由はおそらくナイフが爆発した際に、刃の破片が飛び散りユアンに襲いかかってきたのだろう。一つ一つの傷の規模は小さいものの、未だに刃の破片が所々刺さっていて、鋭い痛みが体中を巡っている。

「ぐっ……」

なんとか体を起き上がらせたユアンは、汚い地面に座ったまま近くの壁に凭れかかる。周りを軽く見渡すと爆発で袋が破けたのか、さっきユアンが買ってきた旅の食糧や道具などが地面に散らばっている。

「……あーあ、最悪だ」

それを見てうつろな声を出すユアン。

視線を自分の体に戻すと一本ずつ体に刺さった刃の破片を抜いていく。そして彼は作業を続けながら考える。

(こいつは、もしかして『薔薇十字団』の仕業か？ だとすると、キヤロルが危ねえ)

痛っ、と破片を抜くたびに痛みが走る。

(でも、よくよく考えれば今あいつは教会の中にいるんだよな。じゃあ俺なんかと一緒にいるより遥かに安全じゃね？ それでも相手はあの『薔薇十字団』。教会だろうがなんだろうが構わず突っ込んでくるかもしれねーし……)

迎えに行くべきか、行くべきではないか、と悩んでいる内にユアンは体中の破片をある程度抜き終えた。

(ま、考えるのは後にして今はここから離れよう)

そう思ったユアンだったか、そこで違和感に気付いた。

なぜ、敵は襲ってこないのか。

今までユアンが倒れている間にいくらでも攻撃を仕掛けるチャンスはあったはずだ。なのにどうして何もしてこないのか。だが、それを深く考える暇はなかった。

「敵前でゆっくり体の破片取りとは、随分と余裕だな」

今まで耳鳴りに支配されていた聴覚が機能を取り戻しつつあるのか、突然聞こえてきた少年の声に、ユアンは対応できなかった。

そして同時に、

ドスッ！ と鈍い音と共に鼻を中心とする形で顔全体に衝撃が走った。

それが顔面を蹴られた事だと認識したのはその一瞬後の事です。

前からの衝撃で後頭部を壁に叩きつけ、ユアンの意識が一瞬飛びかける。

「があ　ッ」

悲鳴がうまく上がらない。喉のところまでつつかえたみたいになっている。頭を打った衝撃で脳を揺さぶられ、視界の焦点が合わず、思考がうまく働かない。

「どーだった？ 俺の特性ノイズボマーナイフ（今命名）は。かなり効いただろ」

顔面と後頭部に鈍い痛みを感じる中、ユアンはグラつく思考でなんとか襲撃者の声を聞き取り、襲撃者本人に視線を向ける。

歪む視界に映ったのは、頭にフードを被り黒いローブを羽織っている少年（？）だった。フードのせいで顔つきまではわからないが、声のトーンから自分と歳の近い男だとユアンは判断する。ただその少年は、片手で頭を押さえながら何だか苦しそうにしていた。

「っ痛ー、でもあんま使い物にはなんねーな。離れてたこっちにまで音来たぞ。まだ耳鳴りがおさまらねーし」

どうやら、襲撃者の少年もさっきの爆弾ナイフのダメージを受けているようだった。

(こいつ、俺が破片取ってる間に襲ってこなかったのは、襲わなかったんじゃないかって、襲いにいけなかったのか？ 自分の攻撃を自分にも喰らっちゃったせいで)

ドジっ子かよ、とツツコミを入れられる程、まだ彼の思考は回復していない。

「やっぱりお遊びで創った術式を実戦で使うもんじゃねーな。何が起こるかわかったもんじゃねー。相手が雑魚じゃなかったら結構まずい状況になってたかもな」

ユアンは襲撃者の言葉に歯軋りする。

(クソツ、不意打ち掛けといて何が雑魚だ。真正面からやってたためーなんぞ一発KOだくそつたれっ)

そんな負け惜しみを思ったところで状況は全く変わらない。

「さて、ここでためーを殺してもいいんだが、それじゃあ『本命』がどこにいるかわからねー。拷問して無理やり聞き出すって手もあるんだが、俺の場合すぐ殺っちゃうからダメだ。だからためーは餌として使わせてもらっぜ」

ニヤリ、と邪悪な笑みを浮かべる黒いローブを羽織った襲撃者の少年。

(……餌、だと?)

襲撃者の言葉に不安を抱かずにはいられないユアン。

だが、彼の体は既に相当なダメージを負っている。歩くのが精一杯と言うこの状態で、とてもこの襲撃者から逃げられるとは思えない。でもここで捕まる訳にもいかない。もし捕まったら襲撃者の言うとおり、キヤロルを誘き寄せる『餌』になっってしまうから。彼女を守るはずの自分が、彼女を危険な場所に引き寄せる足掛かりとなっってしまうから。

だから、ここでダウンしている訳にはいかない。

(捕まる訳には……、いかない！)

拳を硬く握り締めたユアンは重たい体を無理やり動かし、襲撃者に襲い掛かるうとした。対する襲撃者の少年は、『耳鳴りうぜー』と呟きながらユアンから視線を外している。

(チャンスだ！ 今だったらやれる！)

だが、硬く握り締められた彼の拳が襲撃者に当たる事はなかった。

「ナメてんじゃねーぞ、雑魚が」

ドツ！ と、無感情な言葉と共に襲撃者が放った一発の膝蹴りが、ユアンの鳩尾に直撃した。

「じゅ、ぶっ…」

肺から酸素が搾り出される感覚がした。襲撃者の膝が鳩の深くに抉りこむ感覚がした。

「そんなにながつつくなよ。楽しく行こーぜ？　楽しくよ」

襲撃者のあざ笑うような声は、しかしユアンには届かない。前からの衝撃で今度は壁に背中をぶつけたユアンは、ズルズルと背中の服を壁に擦り付けながらゆっくり地面にしゃがみこむ。

(ちく、しょう……)

視界が眩み、その言葉を思い浮かべたのが最後だった。

そして今度こそ、確実にユアンの意識は飛んだ。

## 1 襲撃者（後書き）

第三章いきなりの急展開です！

## 2 不安

教会内は騒がしかった。

「通り魔事件の次は爆発事件!? 一体どうなっているんだ!」

神父らしき男が部下の報告を受けて昏倒しそうになっている。

アーウェル「ローマー宛ての手紙を書き終えたキャロルは、受付に手紙の配送を頼みにいつていた。

しかし、

「すみません、お客様。ただいま本教会はこの通り立て込んでおりますので、配送の受付は一時中止となっております。しばらく経ったらまたおこしてください」

と言う受付お姉さんの丁寧なお断りのせいで、手紙を送れなかった。

「もータイミング悪すぎだよ」

ぐだー、と教会の隅に並べてある丸いテーブルに、気だるい声を放って突っ伏せているキャロル。

「こんな事になるんだったらあの人と別行動なんて取るんじゃないかなった」

はぁ、と溜め息を付いた彼女は、どこで購入してきたのか、紙コップに入ったオレンジジュースをストローで飲みはじめる。

「とゆーか何で教会の中はこんなに騒がしいんだろ？ さっきまでは全然静かだったのに」

ユアンと別れてから教会の外に出ていないキャロルが、外で起きた騒ぎの事を知らなくても無理はないだろう。

「何か通り魔とか爆発とか言ってたけど」

大きな事件でも起きたのかな？ と思ったキャロルは、暇なので近くを通りかかった教会の人間に聞いてみる事にした。

「通り魔事件と爆発事件の事ですか？ どちらともまだ詳しい事は分かっていないんですけど……」

突然話し掛けられた事にびっくりしたのか、それともただ弱気なだけなのか、黒い修道服を着た教会のシスターは困ったような表情をしている。だが、弱気な性格でもなければ、突然話し掛けられても大抵はすぐ受け答えできる社交的な少女キャロルは、そんなシスターの動揺などお構いなしに聞き続ける。

「詳細とかはいいから、大雑把に教えて」

ぶつちやけ彼女が聞いてきているそれは建前で、本音は「暇だから話し相手になって」なのだった。

はぁ、と困り顔のままシスターは話し出す。

「先に起きたのが通り魔事件の方で内容は、『店の品物を盗んでいった子どもをその店の店主が追いかけていたら、突然その店主の片腕・片脚が切り落とされた』って事です。当時、現場にはたくさんの方がいたにも関わらず、目撃者がいない不可解な事件だって私の

上司が言っていました」

「何それ？ 迷宮入りでもしそんな事件なの？」

「いや、そこまではないと思いますよ。おそらく何らかの『術』を使った事件だろうから、その場の残存元力<sup>マグナ</sup>を調べれば犯人を見つけられる事ができると言っていました」

ふーん、と自分から聞いたという興味のなさそうな相槌を打ったキヤロル。

シスターは続けて、

「そのすぐ後に、今度は爆発事件が起こったそうです。現場は通り魔事件の現場からそんなに離れていない、三階建ての建物に挟まれた小道で、その内容が、『小道の中が突然爆発した』との事です」

「そのまんまだし」

「……はい、そのまんまですね」

なぜか申し訳なさそうにしているシスターだが、彼女の話はまだ終わっていないらしく、キヤロルは紙コップに入ったオレンジジュースをストローで飲みながら、話を聞く。

「それで、その爆発のすぐ後に現場となった小道から、黒いローブを羽織った少年が若い男の東洋人を肩に担いで出てきたのを、近くにいた主婦たちが複数目撃しているらしいんです」

(若い男の東洋人？)

キャロルはシスターの放った言葉を反芻して、

ぶべツ！　と思わず口に含んだオレンジジュースを吹き出した。

そのまま咳き込んでいたが、彼女は咳きが治まるのを待たずに無理に話そうとする。

「ちよつ、え！？　若い男の東洋人！？　黒いローブを羽織った少年！？」

「……あの、少し落ち着いてください」

ゲホツゴホツ！　と咽ているキャロルをシスターは優しく背中を摩って落ち着かせる。その甲斐あってか、彼女は数回深呼吸をしようやく落ち着きを見せる。

もう大丈夫だから、と片手で制したキャロルはシスターに話しの続きを要請した。

「えつと、黒いローブの少年の方はフードを被っていたらしく、素顔までは分からなかったらしいですけど、その少年の肩に担がれていた東洋人はぐったりしていて、体中血だらけだったそうです」

キャロルはゴクリと唾を飲み込む。そして今までの態度とは打って変わって慎重な面持ちになると、シスターに問う。

「それで、その黒髪の東洋人って言うのはもしかして……、十五・六歳ぐらいの少年だったりする？」

その問いにシスターは軽く驚いた表情になり、

「よく分かりましたね。もしかして探偵さんだったりするんですか？」

「いや、そう言う訳じゃないんだけど……」

キャロルは言い淀んだ。

(もしかして、あの人だったりするの?)

冷たい汗が頬を伝うのを感じながら、彼女は再び質問する。

「それじゃあ、その事件が起きた現場って……」

「市場ですよ。この町で一番大きな。って言っても今日は一ヶ所だけしかやっていませんけどね。もしかして現場の近くに知り合いでもいたんですか？」

シスターの答えを聞いたキャロルは、呆然としていた。

(……まさか)

嫌な予感が彼女の脳裏を過ぎる。

(まさか!)

考える前に勢いよく椅子から立ち上がったキャロルは、走って教会の出口に向かう。背後からさっきのシスターの呼び止める声が聞こえたが、彼女は無視して教会の中を走る。

(……うそ、うそだよそんなの! 絶対ないよそんなの!)

願いにも似た思いをキャロルは心の中で叫んでいる。

(きつと、人違いだよ。きつとあの人じゃないよ……)

そう思ったかった。でもここで東洋人は珍しい。そう何人もい  
るとは思えない。

だから、嫌な予感が浮かんでくる。

「……ッ！」

教会を出たキャロルは走る。嫌な想像をかき消すように。  
自分の早とちりだったと思えるように。

### 3 連行

そこは『リーヴァリー』の北西入り口。

大勢の商人が行き交うその入り口に、一人の男が立っていた。

「やっと、着いたか」

男は三〇歳過ぎのおっさんだった。背は高く、黒く短い髪に赤い瞳、頬に大きな切り傷を負っている。体つきはよく、小さなバツクを右肩に担いでいた。服装はグレーのジーンズに青いＴシャツなのだが、かなり汚れている。そのためか、彼はあまり周囲の人間に良い印象を与えていなかった。

「途中、道に迷うわ砂嵐に巻き込まれるわで散々な旅路だったが、無事着いて何よりだな」

砂嵐に巻き込まれても生きていた男は、一人事を言いながら周りを軽く見渡す。

「さて、彼女はどこにいるのか」

そして前に視線を向けると、町に一步踏み入れた。すると、

「ちょっといいですか？」

隣から黒い修道服を着た神父に呼び止められた。

この町、と言うよりこの世界では、神父などの聖職者は警官の役目も果たしている。つまりこれは警官に呼び止められた事と同じ状況で、それは何かしらの疑いが掛けられていると言う事で……。

「……」

男はリアクションに迷って困って固まって動かなくなった。

「……あの、聞いていますか？」

神父は男に訝しげな視線を向けている。固まっていた男は何とか冷静さを取り戻し、

「あつ、はい！ 全然聞いてますっ！」

平静を保とうとする。だがその行為が逆に怪しい感じを醸し出している事をまだ本人は気付いていない。神父の視線はどんどん悪くなっていく。

（ここで変に焦っちゃダメだ！ 俺は別に何も悪い事はやってねーんだから捕まる理由もない！）

「はあ、それなら良いんですけど」

神父は相変わらず怪訝な視線を向けている。

「それで、何か御用でしょうか？」

「ああはい、ちょっと一緒にその教会まで来てもらえますか？」

「……」

現代語に翻訳すると『ちょっと署まで来てもらえますか？』にな

る。

つまり、

「いきなり連行かよ！」

と、言葉に出すわけにはいかなかったので心の中で叫んだ男。

(理由もないのにいきなり捕まっちゃったよ！ 着いて早々意味わかんない疑いかけられちゃったよ！)

そして男は教会きやうに連れて行かれた。

### 3 連行（後書き）

とあるおっさんの話です。

#### 4 知らないこと

人が多く集まっていたのは『リーヴァリー』の市場付近にある、三階建ての建物と建物に挟まれた狭い小道だった。だが、一応そこは事件現場なので人だかりはその周りにできている。

と、そんな野次馬達の中を掻き分けて必死に現場に近づこうとしている少女が一人。

キャロルだ。

彼女の年齢は十二・三歳ぐらいだ。よって背も高くない。周りは皆彼女より背の高い大人ばかりで彼女は丈の長い草原を掻き分けるように進んでいた。

「……ここだ」

そう言ったキャロルは、足を止めた。彼女は今、爆発事件が起こった現場の前にいる。理由はある事を確かめるためだ。事件の現場となった小道の入り口には、『Keep out』と記された黄色いテープで塞がれており、その前を複数の修道士が警備している。

だが、今の彼女の視界にはそんなものは映っていない。

映っているのは現場の状態だった。

簡単に言うと、たくさんの物が転がっていた。それは食べ物もあれば食器などの家具や服などの日用品もある。

キャロルはユアンが何を買ったのか知らない。だからそれらがユアンの物だと言う確証もない。最近知り合ったばかりだから、どういふ買物の仕方をするのかも分からなければ、買ってくる品の特徴も分からない。

つまり、キャロルはユアンの事を何も知らないのだ。

（やっぱり、本当に、一緒に買い物、行けばよかった）

知らない事を、こんなにも辛く思った事はない。

（あの人は、人のことばかり聞いてきて自分のことは何も話してくれない。わたしが聞かなかつたからってのもあるけど……）

いや、と彼女は首を横に振り、

（わたしが聞かなかつたから、だよ。わたしがいろいろ聞いていれば、あの人のことをもつと知ろうとしていれば……）

この事件とあの人は関係ないと分かったのに。

キャロルは小さな掌で作られた小さな拳に力を込めて、齒軋りした。

（あの人は絶対に関係ない。それを証明するにはあの人を探し出さなくちゃならない）

現在の時間は二時二五分。

市場の最盛期だ。

特に今日の市場はいつもより人も多いらしく、殺人事件や爆発事件があつたのにも関わらず人が減った気配はない。さらに増えたと言っても過言じゃない。

（ここじゃあ東洋系の顔立ちの人は目立つから、聞き込んでいけば必ず見つけられるはず！）

もつとも、それは爆発事件の被害者でなかった場合だが。  
彼女はそれを決して信じない。

(必ず、あの人はわたしが見つけ出してみせる！)

## 5 誓い

ぼんやりと、人の話し声が聞こえる。

「う……」

頭と体に疼くような痛みが走る。

目が覚めたら見覚えがない建物の中で転がっていた。建物と言っても屋根が半分ほどしかなく、レンガで造られた壁と柱だけの古びた廃墟だ。広さは学校の体育館ほどで、入り口が左右に複数ある。だがどれも扉などはなく、ただの囲いと化していた。

（ここは……？）

一種の記憶障害なのか、自分がどうしてこんなところで眠っていたのか、彼は覚えていない。その事について考えようとしたユアンだが、そこで気付いた。

自分の手足が、動けないよう縛られている事に。

そして同時に思い出した。自分の身に起きた全ての事を。

（……くそ）

『拉致』と言う言葉が頭の中に思い浮かぶ。

（今は、何時だ？）

彼は首を動かして周りを見渡す。

汚らしい廃墟には物などはなく、半分しかない天井からは夕日のような紅い光が差し込んでくる。

( ってもしかして、もう夕方なのか!?)

ユアンが襲撃され捕まったのはおそらく午後二時過ぎの事だろう。そして今の時期、陽が翳り出す時間帯は午後五時から六時ぐらい。

( 三時間も気を失ってたって訳か)

キャロルとは大雑把だが夕方ぐらいに、ホテルの前で合流する事になっている。早く行かなければ彼女に余計な心配をさせてしまう。ユアンは腰の後ろで縛られている両手首を動かしてロープから抜け出そうとするが、全く意味を成していない。相当強く縛られているのか手首に痛みすら感じる。足首の方も手首と同じだった。

と、何とかここから抜け出そうとしているユアンの耳に、左側の一番近い入り口から再び人の話し声が聞こえた。声のトーンから男だろう。

「まったく、ラージーさんにも困ったもんだ。餌だかなんだかしらねーが、俺たちにあんなガキの見張りを言いつけるなんて」

「全くだ。あんなガキ、さっさと殺しちまえばいいのによお。』二人同時に殺ったほうが面白い』とかなんとか言ってさあ」

「あの人のドSっぷりにはホント鳥肌もんだよな。絶対すぐには殺さねーぞ」

「なんか素直に同情するよ」

「おいおい、変な気は起こすなよ」

「起こすかバカ」

そんなような声を聞いたユアンは、

(敵は二人か。こっちに向かってきているな)

状況を分析し、行動に出る。

彼は両手両足をロープで縛られている。そのロープは普通のロープではなく、何かしらの術が掛かっているようだった。

(どうせ元力の循環を阻害するタイプのもんだろ。無理に術を発動させれば力が塞ぎ止められて体が破裂するってお決まりのな。でも、俺にそれは通用しないんだな、これが)

汚い地面に横たわっているユアンは両の掌を拳に変えて、目を閉じる。そして彼が息を吸い、吐き出し、また息を吸った瞬間、

両手両足を縛っていたロープが弾け飛んだ。

もしそれを他の人間が見ていたならば、必ず驚いているだろう。

理解できないだろう。

なぜなら彼は『術』を使っていないから。

(うまくいったな)

手足が解放されたユアンがその場にしゃがみこむのと、数ある廃墟の入り口の一つから黒いロープを羽織った青い髪の男と黒い髪の男が、話しながら入ってくるのはほぼ同時だった。

(奴らはまだ気付いていない。やるなら今！)

決意を固め、戦闘の準備を開始する。

大気が不自然に蠢いた。するとユアンを中心とするように、回りに溜まっていた砂や埃などが突然発生した風に巻き上げられ、渦の形に変わっていく。その渦は最初、半径二メートルほどもあったが次第に小さくなっていき、ユアンの両足に巻きついた。

それは例えるなら風のプーツ。

一緒に渦を巻いていた砂や埃などは一切取り除かれていて、透明な、しかし視界で捉えられるほどに圧縮された風の渦。

そして会話をしていた男達だったが、青い髪の男が、ユアンがロープから解放されている事に気付き、

「おい！ あれやバイんじゃねーか!？」

その言葉に残るもう一方の男もユアンに視線を向けて、

「なっなんであいつロープから抜け出してんだよ!！」

かなり驚いていたがもう遅い。

ダンッ！ と地面を蹴り飛ばして前に飛んだユアンは、そのまま真っ直ぐに男達の元に向かう。

そのスピードは尋常ではなかった。男達との距離は二〇メートル以上もあるのにも関わらず、一切地面に足を着かずに、弾丸のような速さで向かって行く。

そんな高速的な状態の中、ユアンは両手を広げて、青い髪の男は顔を覆うように両腕をクロスさせ、黒髪の男は突っ立ったまま。

そしてユアンは、そのまま二人の男の間に入り、首元に腕の内側部分を打ち当てた。

プロレス技のラリアットだ。

鈍い音が聞こえた。

「が　ッ！」

「ぐ、ぶ　ッ！」

合計四本の足が地面から離れると同時に、二人の男は直後ろ（ユアンから見たら前）に吹っ飛んでいく。構えが取れなかつた黒い髪の男は地面の上を、砂ぼこりを立てながら転がっていき、構えを取つた青い髪の男は黒い髪の男ほど派手には転がっていかなかった。黒い髪の男は完全に気を失い、青い髪の男は体を起き上がらせようとす。だが、その前にユアンが胸を踏みつけて、背中を地面に叩きつける。

「ぐっあ、てつてめえ……！」

男はユアンを睨み付けているが、彼は全く取り合わない。ユアンは男に問う。

「俺をここに連れてきた男はどこだ？」

「……言つと、思つか？」

「言わなきゃ殺す。と言つたら？」

「じゃあ殺せよ。俺達はいつでも死ぬ覚悟はできてる」

「ご立派な誠心だな」

「覚悟してなきややっていけない世界なんだね」

「……そうかい」

苦い声で言ったユアンは、胸を押さえつけている足でそのまま男の顎を蹴り飛ばした。大きく上を向いた男が動かなくなったのを確認すると、自分の周囲を見渡す。

周りにはユアンが倒れていた廃墟の他に、同じような古びた建物がたくさん並んでいた。どうやらここは町だったようだ。地平線に沈みかけている夕日に照らされて、どこか神秘的な雰囲気醸し出している。

だがそれに見惚れていられるほど、今のユアンに余裕はない。

「くそっ、ここどこだ？ 町には近いんだろうな」

先ほど周囲を見渡したが他に人の気配などはなく、彼を攫った男も今はいないようだった。

「ここが『薔薇十字団』の拠点ってことなら、ここで待ち伏せていればあいつは来る」

だが、その前にキャロルと合流しなければならぬ。

「きつとまだあいつは捕まってるはずだ」

そう思う根拠は『薔薇十字団』の一次的な拠点であるっ、この廃

墟の人の少なさを見れば分かる。もし捕まっていればここは奴らで埋め尽くされているだろうから。それ以前にそうなっていれば、自分分はもう天使に連れられて天国に行っている。

「あのクソ野郎、何が『二人同時に殺ったほうが面白い』だ。つまらねー事考えやがって」

ユアンにはあの襲撃者が何を考えているのか想像がつく。

(どうせ俺がキャロルのどっちかを先に殺して、残った一方が泣き叫んでいるところを見て悦に浸ろうって言う、胸クソ悪いことでも考えてんだらうなあ。あの野郎は)

そういう事を考える人間かどうかは、相手の目を見れば分かる。と言つかあの襲撃者はどう見てもそんな人間だ。

「絶対に、殺らせねえ」

ユアンは荒野の向こうに小さく見える、一つの町を睨み付ける。ここから町へは三キロ以上あるだろう。だが、そんなものは関係ない。そんな事ではユアンの足は止まらない。彼は誓う。

「必ず、守ってみせる」

自分の心に。守るべきモノに。

## 6 審問室

「だから俺は違つて！ 今来たばかりなんだって！」

「ここは『リーヴァリー』の教会。その中にある審問室と言つ所。どつという事をする部屋なのは、名前の通りだ。」

「はいはいそれは何度も聞いた」

部屋の中には机一つとそれを挟むように椅子が二つ置かれている。とても殺風景な部屋で柵が取り付けてある窓が一つと、その反対側に入りの扉が一つだけ。

黒い修道服を着た神父は扉側の席に座り、その後ろに同じ黒い修道服を着たシスターが立っている。窓側の席には黒い髪に赤い瞳、頬には大きな切り傷を持ち、薄汚れたグレーのジーンズに青いTシャツを着た三〇代過ぎの男が座っている。

「じゃあ何でさっさと解放してくれないんだ！」

「だからそれもさっきから説明しているように、あなたの身元を確認するまで解放できないんですって」

神父は呆れたような口調で言う。

「がー！ こんな事しとる暇なんてねーのに！ 何で捕まらなきやなんねーかな」

「だからそれは」

「あーはいはい分かってますって、言わずとも聞きましたからそれも何度も」

この町は現在、厳重警戒態勢を取っている。

理由は昼過ぎに市場の真ん中で起こった殺人事件と爆発事件が原因。教会の聖職者は皆、事件解決または事件の再発防止のため、調査及び警備に狩り出されていた。そのため、町の住人ではない『不審』な人物はこうして連行され、身元を調査されるのだ。

「ったく、何で俺が不審に思われるんだよ」

「それは自分の格好を見てから言ってください」

溜め息を付いた神父は後ろに立っていたシスターに何やら書類を渡している。

それを見ていた男は一見落ち着いているように見えるが、内心かなり焦っていた。理由は彼がこの町に来た事と関係している。

（ちっ、なんつータイミングの悪さだ）

神父から視線を反らし、男は齒軋りした。

（悪すぎて嫌な予感しかしねーぞ）

## 7 焦り

時刻は既に午後六時を回っていた。

太陽は地平線の向こうに沈み、闇が町を飲み込み始める。

「ちくしょう！ いねえ」

ユアンはホテルのロビーにいた。だが明かりが灯り、戸が全開だったにも関わらず、中には誰もいなかった。

「あのじじい、こんな時にどこ行ってんだよ！」

落ち着きがなくなっているユアンは、荒い足取りでホテルの三階

昨日ユアンとキャロルが借りた部屋に向かう。そして勢いよく扉を開け放ったユアンだったが、

「くそっ」

そう吐き捨てただけだった。

部屋の中もロビー同様、誰もいなかった。端っこに自分とある少女の鞆が置かれているが、触られた形跡はない。それは昼食を食べに行つてから、誰もこの部屋に入ってきていない事を意味していた。その後も他の部屋や風呂場など、様々な場所を探し回った。しかし結果はどれも同じで、誰一人として見つける事ができなかった。

「まだ、帰って来ていない」

その事実にも、ユアンの焦りは増すばかり。

ホテルの外に出ると、町の中央へと進路を取る。

「後は、教会と広場だけ」

拳を握り締めて、彼は再び走り出す。

## 8 力ある者

審問室と書かれた部屋で待つこと約四時間。

頬に大きな切り傷を持ち、黒髪で青いＴ＝シャツの男は、ようやくそこから解放された。

「がー、長かった」

彼は教会の二階から一階に降りてきた階段の前で背伸びをすると、辺りを見渡す。

教会の営業時間は基本午後五時まで。しかしもう午後六時過ぎだと言っのに、教会の中は騒がしかった。やはり例の事件が関係しているのだろう。

「俺には、あの子には関係ないと祈るしかねーな」

男は小さなバッグを肩に担いで教会の外に出ようとした。すると、受付に見知った顔のおじいさんが立っていた。

「あれ？もしかしてガルト隊長じゃね？」

男と受付にいるおじいさんとの距離は一〇メートル。男は一人事のように口元でボソッと呟いただけ。だが対するおじいさんは男の方に振り返り、

「その声は……、アーウエルか？」

いとも容易く聞き取り返事をした。

「うおお、相変わらずとんでもない聴覚ですね」

「おお、やはりアーウェルじゃったか」

「でも口調は変わりましたね。年寄り臭くなってますよ」

「うるせえ。年取ると皆こうなるんじゃないよ」

彼らの距離は未だ一〇メートル。端から見たら一人事を喋っているように見えるかもしれない。

男はガルトと言うおじいさんの元まで歩いていく。

「久しぶりですね。まさかまだこの町にいるなんて」

「いいじやる別に。わしはこの町が気に入ってるんじゃない。昼は賑やか夜は静か、いい町じゃないか。ところでお前さんはどうしてこの町におるんじゃない？」

「人探しですよ」

人探し？ とガルトが聞き返し、男は首を縦に振った。そして続きを話そうとして、

ドンッ！ と叩くような音と共に教会の扉が勢いよく開け放たれた。

ガルトとアーウェルは二人同時に扉の方に視線を向ける。そしてそこにいたのは一人の少年だった。

「なんだあの汚らしいガキは。全身血だらけじゃねーか」

「それを言うならお前さんも似たようなもんじゃろ」

ガルトはアーウエルの服装を見て呆れたように言う。

「東洋人か、珍しいな」

その少年は黒い髪に黒い瞳と言う東洋人特有の顔立ちで、年は十五歳か十六歳ぐらい。背の高さは年相応と言ったところか。

かなり焦っているようで、自分が周りの注目を集めている事に全く気付いていない。

「すつげえ挙動不審になつてんな、あのガキ」

怪訝な視線を向けているアーウエル。すると隣に立っていたガルトが不意にこんな事を言ってきた。

「ああ、あれはわしの知り合いじゃよ」

「マジっすか!？」

「昨日わしのホテルに泊まりに来たんじゃ。まあわしが強引に泊めただけじゃがな」

「何でそんな事したんすか」

「何でつてお前さん、わしが無理やり誰かを泊める理由なんて決まっておるっつが」

その言葉に『ああそうか』とアーウエルは相槌を打った。

「あんたはまた匿ったんですね。どこの誰だか知らない人間を」

呆れたように言ったアーウエルは知っている。

ガルトはアーウエルがとある組織に所属していた頃の上官で、仕事が終わるとよく二人で飲みにいったりもした。だから知っている。ガルトはいつも、自分から首を突っ込まなければ、絶対に巻き込まれないであろう面倒事に自ら足を踏み入れる事を。

「力のない人間を力のある人間から守るため、ですか。その誓いは今も変わっていないようですね」

「今でもわしが驕おごっていると思うか？」

「まさか。あんたは驕おごってもいいほどの實力を持っている。だからそんな誓いを立てても驕おごっているなんて思えませんよ。今も昔も」

アーウエルは顔の前で片手を振って、

「と言う事は、あのガキも何かしらの事情を抱えている、と」

「そう言う事だ」

「それであんたはまた助けると」

「そう言う事だ」

全く躊躇わずにそう言い切ったガルトは少年の元へ歩いていく。そしてその後を追うようにアーウエルも足を踏み出す。

「全く変わってませんね、あんたって人は」

「それがわしと言う生き物なんじゃから、仕方なかるう」

「あ、でも口調だけは変わってました」

「うるせえ」

言いながら二人は歩いていく。

一人は力なき者を力持つ者から守るために。そしてもう一人はその後ろ姿を追うように。

「それよりもいいのか？ わしなんかについて来て。お前さん人を探しているんじゃない？」

「あ、そーだった」

## 9 クライシス

時は少し遡る。

午後五時三〇分前後。

どこ？ と少女の声が聞こえる。  
どこなの？

「ユアン！」

初めて、少年の名前を呼んだような気がする。  
キャロルは陽の沈みかけた町の中を走り回っていた。息は切れかけ、走っているか歩いていているか分からない状態だ。  
ユアンを探しに出てから、既に三時間以上が経過していた。  
町中を探したキャロルだが、一向に彼を見つucker事ができない。  
必ず、この町のどこかにいるはずなのに。

「絶対に、捕まったりなんてしていない！」

そう何度も自分に言い聞かせて、キャロルは再び走り出す。  
だが、不意にどこからか声が聞こえてきた。

「キャロル＝マーキュリーだな」

聞き覚えのない男の声が自分の名前を呼んでいる。

彼女が今いる場所は町の出入り口に近い、三階建ての建物が立ち並び通りだった。陽が沈みかけているせいか、周りは昼間の賑やかさは打って変わって変わって誰もいなかった。

だが、声は聞こえた。

キャロルは音源を辿っていき、とある三階建ての建物の屋上に視線が向いた。

そこには、一人の少年が屋上の枠ギリギリの所でしゃがんでいた。その少年は毛先を赤く染めた黒髪で、瞳の色は赤っぽい黒。その凶悪な風貌をさらに際立たせるように、黄金のピアスが両耳に二つずつ。

そして黒いローブを羽織っていた。

「ッ！」

キャロルはすぐにその場から、黒いローブを羽織った少年から逃げようとした。だが、

「ばーか。もう手遅れだ」

あざ笑うような少年の声は、少女に残酷な現実を突き付ける。

「……そんな」

それに彼女は言葉を失うだけ。

一言で言おう。

キャロルは囲まれていた。複数の黒いローブを羽織った人間達に。

トン、と背後から小さな音が聞こえた。その音の正体が、屋上に

しゃがんでいた少年が飛び降りて地面に着地したものと認識したのは、彼女が振り返ってからの事。

乱れた服装を整えた少年は、告げる。

害意に染まった音色で。無慈悲な言葉を。

「さあ、一緒に来てもらおうじゃねえか」

光浸樹と言う木がある。

その木はとても変わっていて、年中葉や果実などが生らない不思議な木だった。果実が生らないのに、どうやって子孫を残しているのかはまた今度話すとして、木は人々の生活に深く根付いていた。

なぜなら、その木は光を放つから。

昼間、光浸樹は太陽の光を吸い込む。そのため木の周囲は歪んで見えるが、夜になると木の枝が白い光を放ちだす。どうして光を放つのか、その理由も分かっていない。だが人々はその木を加工し、街灯や部屋の明かりなどに使っている。

だから電気や電球がなくても、この世界では夜でも光が灯っている。

そして、そんな加工された木の光に囲まれている町の広場を、一人の少年が走っていた。

ユアンⅡバロウス。

彼は教会の前で立ち止まり、扉を乱暴に開け放った。

そのせいで周りから注目を浴びたが、彼は全く気にしていない。

(どこだ？ キャロルはどこだ！？)

教会の中を、首を振り、眼球を動かして必死に見渡す。端から見たらちよつとした不審者に見えてしまっている。

一通り教会内を見渡したユアンだが、彼の探し人は見つからなかった。

(くそっ！ ここにもいねえ。外の広場にも見当たらなかつたし、後はどこ探せばいいんだよ！)

ユアンは考える。キャロルがいそうな所を。

(あいつは頭が悪いわけじゃない。絶対に人気のないところには行かねーはずだ)

だが既に陽が沈みかけているせいで、外を歩いている住民はほとんどいない。昼間の活気が嘘のように消えていた。そんな町の外を歩けばどこでも人気のない危険な場所になる。

(じゃあ、もう考えられるのは )

最悪な状況だけだった。

そしてなぜか今の彼にはそれが最も現実的な事実だと思ってしまう。

(何なんだよ、この胸騒ぎは。なんで俺の頭はこんな最悪な考えを否定できないんだよ……)

彼女は既に捕まっているのかもしれない。

そんな、想像もしたくない、悪夢のような事態が頭の中から離れない。

(でも、もしそうだったとしたら……)

彼女は廃墟はいくめにいるだろう。

「行くしか、ねえか」

敵地のド真ん中に。一人で。

無謀でも、足を止める訳にはいかない。

ユアンは拳を握り締め、振り返って教会を出て行こうとした。すると、

「そんな傷だらけな格好で、何しとるんじゃ？」

背後から年寄りじみた男の声が聞こえた。それは聞き覚えのある、勘に触る声だった。

「……あんたか」

振り返って、やっぱりと言う表情を作ったユアン。

そこにいるのは六〇歳過ぎの老人だった。彼はユアンとキャロルが泊まっているホテルのオーナーで、得体の知れない年寄りだと、ユアンはあまり好いていない。

「別に、あんたには関係ない」

「おいおいそんなつれない事を言わんでくれ。一度助けてやった仲間だろ？」

「でも友達になった訳じゃない。それとも助けた借りを返せってんならまた後にしてくれ。俺は今急いでるんだ」

素っ気ない態度で言うと、ユアンは再び教会の入り口に進路を取り直そうとした。

と、そこでユアンの耳に、今度は聞き覚えのない男の声が響いて

きた。

「おいガキ、お前は何をそんなに焦ってた？ そんなんじゃ何にも出来やしねーぞ」

声のした方向に視線を向けると、そこには案の定見知らぬ男が立っていた。

背が高く、黒髪で赤い瞳、頬に大きな傷を持ち、服装は薄汚れた青いTシャツにグレーのジーンズ。教会の人間ではない事は一目で分かった。

「誰だあんた？」

「そのじいさんの知り合いだよ」

見下すような視線を向けている男に、ユアンの目つきが少し鋭くなる。

「何だかよくわかんねーけど、ガルトさんはお前の力になってやって言ってるんだ。この人の実力を知ってるなら断る事はねーだろ」

確かに、このガルトと言うじいさんが手助けをしてくれるって事は、ユアンにとって相当心強くなるだろう。四〇人の術者を一人で全員潰したとも言っていたし、『薔薇十字団』相手でも引きを取らないかもしれない。

でも、ユアンにはこの人を巻き込む事ができなかった。

もし巻き込んでしまったら、彼女の意思を、今までの思いを、全て踏みにじってしまう気がしたから。

「……悪い。俺に構わないでくれ」

「は？ 何でだよ。困ってんなら助けを求めりゃいいだろ」

納得がいかないような表情になっている男に対し、ユアンはわずかに視線を逸らした。

「これアーウエル、手助けの押し付けは己の傲慢さを自嘲しているようなものじゃぞ」

「でもよお……」

「相手が助けを求めてきたら、何も言わずに助ける。それが一人前の騎士つてもんじゃろうが」

ガルトの言葉に男は黙り込む。だが彼の表情はやはり変わっていない。『あんただって強引に泊めたって言ってただろ』とぶつぶつ言いながら、拗ねた子どもみたいになっている。

「……アーウエル？」

そんな中、疑問形で言ったのはユアンだった。彼は以前にもその名前を聞いた事がある。それほど昔の事ではない。聞いたのはついさつき、四時間ほど前だ。

（キャラルの言っていた知り合いの名前も、確か『アーウエル』だったような……）

「どうした？ 突然阿呆の名前なんぞ呼んで」

「あ、いえその……」

突然話し掛けられて言い淀んでいるユアンを側に、名前を呼ばれは本人はと言うと、

「ちよつ、ガルトさんっ！ 阿呆って何ですか阿呆って！」

そんな風に一生懸命抗議していた。だがガルトはそれを完全無視。ユアンの返答を待っている。

ここで何も言わなかったらあまりにも男が哀れに思えてしまうので、ユアンはガルトに自分が抱いた疑問を話す事にした。

「……なるほど。お前さんと一緒にいたあの嬢ちゃんの知り合いも、『アーウェル』と言うのか」

復唱するように言ったガルトに、ユアンは一回だけ頷くと続けて、

「確か、姓が『ローマー』だったような……」

「ほう、それは凄い偶然じゃのう。実はこの阿呆の姓も『ローマー』なんじゃよ」

「え？ それって」

どこかわざとらしく言ったガルトと、その言葉に驚いているユアンは、同時に話題の原点になってしまった男に視線を向けた。

「……え、俺？」

いまいち状況を飲み込めていないような態度を見せている男に、

ユアンは一つ質問する。

「あんたが本当に『アーウェル・ローマー』なら、『キャロル』って少女を知っているはずだ」

内心ちよつとだけ緊張しながら言ったユアンだったが、男の返答は呆気なかった。

「キャロル？ 知ってるけど」

当たり前のように肯定した。同時にユアンの鼓動が一瞬だけ大きく脈打った。

「つーか俺の探し人ってキャロルなんだよな。手紙受け取ってからもう一週間以上経ってんのに全く来る気配がなかったから、わざわざここまで探しに来たって訳なんだが……、それよりもその当の本人はどこにいるんだ？」

「そう言えば、お前さん一緒じゃないのか？」

男とガルトの問いかけは当然の事だった。男はともかく、ガルトの方はユアンとキャロルと一緒に旅をしている事を知っている。一緒にいなければ不自然だと思うのも無理はないだろう。彼らの言葉には疑問しかなかった。彼らはただ純粹にそれを口にしたただけだ。しかし、今のユアンには、彼らの質問が尋問だと感じてしまうのは何故だろうか。

それはとても簡単な事だ。  
とても単純な事だ。

「……………」

なのに、ユアンは理由を言えなかった。とても簡単に単純なはずなのに。

(言える訳がないだろッ！)

砕ける勢いで奥歯を噛み締め、彼は心の中で吐き捨てた。

ユアンの瞳は男を見ていない。どこも映していない。

キャロルは言っていた。今、目の前にいる男は昔よく遊んでくれた人だと。それを話している時の彼女の声が、少しだけ楽しそうだったのを彼は覚えている。

それはおそらく信頼の証だろう。そして彼女がそんな風に思っているのなら、おそらく思われている相手も、それと同じ気持ちを抱いているはずだ。

曖昧な予想でも、勝手な決めつけでもない。

確信だった。

……ちくしょうッ。

心の中で放った言葉は、しかし心の中以外にも響いていた。

「それは、何のための苦悶だ？」

言ったのはアーウエルと言う男だった。

声に出すつもりはなかった。だが、いつの間にか、自分の予期せぬ内に、その言葉は音になって自分の口から漏れていたのだ。

「お前とキャロルがどういう関係なのかは後で問い質すとして、今はあの子がどこにいるか、それを知るのが先決だ」

そんな前向きな、全てを知っているかのような男の言葉に、ユアンは視線を上げていた。

そして男と視線が重なり合ったと同時に、ユアンは男の言葉の『意味』を悟った。

><><><><><

その後、ユアンは二人に全ての事情を話していた。  
キャロルと別行動を取ったこと。

自分が『薔薇十字団』に捕まって、すぐに逃げ出したこと。  
今までキャロルを探していたこと。

そして彼女はもう捕まっているだろうと予測を立てたこと。

「それで、お前は一人で『薔薇十字団』に挑もうとしてたってか」

言ったのはやはりアーウェルと言う男。ユアンは男から視線を逸らさない。

「……」

そもそも何故ユアンは全てを喋ったのか。

その理由は、彼らにはそれを知る権利があると思ったから。

(いや、違うな)

教えるだけならまだ良いと思ったから。

(そうじゃない)

彼はただ……、

(俺は、ただ……)

誰かを強く思っている男の目に、気圧きあつされただけ。  
自分の力だけではどうにもならないと、直感しただけ。

「だから、あいつを、キャロルを……、一緒に助けてください」

安っぽいプライドを捨てたユアンは、一歩大きく前に出た。

## 11 余裕から絶望へ

時刻は午後六時三〇分。

太陽は地平線に隠れ、荒野は暗闇に沈んでいた。静寂が辺りを支配し、虫の音が響き渡っている。だがその暗闇を破るように光を放つ廃墟郡があった。そこからは複数の人の気配があり、人の声も聞こえる。

「逃がしただと？」

黒いローブを羽織った少年がそう問いかけているのは、彼よりも明らかに年上で屈強な体つきの二人の男だった。

「……すみません、ラージーさん」

言ったのは二人の内の一人、黒い髪の子。年下に頭を下げているのを見ると、少し情けないように映ってしまう。

「縛っていたローブには阻害術式を組み込んでいたはずなんだが」

ラージーと言う少年は、地面に座っている二人の男を見下ろしながら言う。

阻害術式とは、術者が術を発動しようとする<sup>マクナ</sup>と発動し、元力の循環を遮ってしまう効果を持つ。術的拘束力が弱いものは簡単に破られるが、強力なものだと強引に術を発動しようとした場合、元力<sup>マクナ</sup>が体内で暴発し内臓などが破裂する事がある。

彼らの使っていたのは後者の方だ。

「奴はそれを破ったんです」

「あれはそんな簡単に破れるもんじゃねえ。お前らはちゃんと見張ってたんだよな？」

「それは……」

口の中で言い籠った黒髪の男に、ラージーは怪訝な視線を向ける。

「……まさかとは思うが、席を外していた、なんて事はないよな？」

「……」

何も言わない部下達に、ラージーは溜め息をついた。

今、彼の後ろにはロープで縛られた一人の少女が倒れている。その少女はとある少年を誘き寄せるための餌であり、自分の任務対象でもある。

そして、周りには大勢の黒いロープを羽織った人間が囲んでいた。それを外からさらに囲うように、廃墟の角や木の枝など様々などころに、円柱状に加工された『光浸樹』の枝が取り付けてある。そのため辺りはそれなりに明るかった。

と、不意に別の男の声が割り込んできた。

「まあそんなにイジメてやんなよ。そいつらだって逃がしたくて逃がした訳じゃないんだろ？」

ラージーは声のした方向に視線を向ける。

そこにいるのは一人の男。名はキファーフ・スイナン。歳は二〇代前半ぐらい。青に近い黒髪と青い瞳。黄金のネックレスを首に下げている、不良みたいな男だ。

彼は二階建ての廃墟の上に座っていた。ラージーは見上げながら、

「ダメっすよキファーフさん。こういうのは厳しく教育しねーと」

「相変わらず頭硬いなお前は。鞭ばかりじゃ部下はついてこねーぞ」

「生憎と俺は力しか使えないんでね」

皮肉そうに言ったラージーは再び二人の男に視線を向ける。

「それで、奴はどこに逃げた？」

「……」

二人の男は黙ったまま。

「知らねえのか」

黙りこむ二人の男にラージーは再び溜め息をつく。

「面倒くせーなあ。また町に行かなきゃなんねーのかよ」

うんざりしたような声を出した少年だが、そこで再びキファーフがこんな事を言ってきた。

「どうやら、探さなくてもよさそうだぞ」

「？」

唐突な言葉に訝しげな表情をしたラージーは、キファーフに視線

を移し、彼の視線の先を追う。そして行きついたのは、小さな光がポツポツと灯っている町景色だった。

だが、彼の注意はすぐに別のモノに移った。

その手前にいる三つの人影に。

「あれは……」

はつきりとは見えないが、ラージーは確信した。

あの三人の内の一人は、東洋人の少年だと。

理由は分からない。ただ直感したのだ。

「自分からきやがるとは」

ニヤリ、とラージーは彼特有の邪悪な笑みを浮かべる。

「こつちから探しにいく手間が省けたな」

彼はローブの中に片手を突っ込み、一本のナイフを取り出す。銀色の刃が周りの光に照らされて輝いている。

（目標は東洋人だが、まあ端から潰しに行くとするか）

ラージーと三つの人影との距離は、まだ一〇〇メートル以上ある。だが足に仕込んである、身体能力を一時的に強化する術式を使えば、五秒でゼロにする事が出来る。

「右から首を跳ねてやる」

姿勢を低くし、体勢を整える。暗闇の向こうから近づいてくる三

つの人影、特に右側の影に鋭い視線を向ける。ナイフを握っている右手に力を込めて、前方向に体重を移し走り出そうとした。

しかし、彼がその場から離れる事はなかった。

原因は、自分が今まで凝視していた右側の人影が、不意に消えたからだ。

(な！？ 消え )

そして、それが起こったのもほぼ同時。

突如、轟音と共に右側にいた黒いローブを羽織った人間、合計二人が、上空約一〇メートル位置まで紙のように吹き飛ばされた。た。

「ッ！」

大地が震え、絶叫が迸る。

走り出す寸前だったラージーは、一瞬遅れて不自然な体勢なまま右側に視線を向ける。

そこにはさつきまで立っていた部下たちはおらず、代わりに巻き上げられた粉塵と、一人の老人が立っていた。

右手に白い大剣を持ち、左手に黒い鞘を携えた、白髪が目立つ老人が。

その老人の瞳はひどく冷めていて、直接睨みつけられている訳でもないのに寒気を感じさせられる。

地面に振動が伝わった。それが空に上がった人間が地面に落下したものだど気付いた時には、既に連続で同じような振動が地上を揺らしていた。

（あいつは……、ヤバイ！）

ラージーは直感した。あの老人は危険だと。レベルが違い過ぎると。

今までの余裕は跡形もなく消え去り、代わりに恐怖と絶望が沸々とこみ上げてくる。

固唾を呑み、無言のままラージーは立ち尽くす。

## 12 強大な力

一人の男が二階建ての廃墟の屋上から、自分の部下たちが上空に吹っ飛ばされるのを眺めていた。

(……こいつは、おもしろい)

だがその男は、笑っていた。

『薔薇十字団』の幹部であり、上位二級犯罪者であるキファーフは、胸の奥からこみ上げてくる昂揚感に浸りながら、心の底から楽しそうに笑っていた。

そして地面に置いていた一本の銚ほこを手に取る。

その銚は矛先の形状が二等辺三角形で、刃根元には両側に突起が設けられていた。所々黄金の装飾がなされており、置物のようにも見える。

右手に銚を携えたキファーフはその場に立ち上がり、粉塵の中に堂々と佇む一人の老人を見下ろす。

「久々に、とんでもねえ化物と闘り合えそうだ」

ニヤリ、と口元を歪ませて、二階建ての廃墟から飛び降りた。

そのまま両手で銚を握り締め、大きく真上に振り上げる。

狙いは一人。二〇人以上の人間を一振りで薙ぎ払った常識外れの老人。

対する老人は、上空から迫るキファーフに気配を感じ取ったのか、夜空を見上げ大剣を構える。

殺気の籠った両者の視線が重なり合い、次の瞬間には、

轟ッ！！ と、右から左へ振るわれた老人の白い刃と、上から下

へと振り下ろされたキファーフの矛先が火花を散らし交差した。

大気が震えた。

同時に耳をつんざくような轟音と地震のような振動が大地を揺らす。

元力マグナと元力マグナが衝突し、視界で捉えられるほどに圧縮された衝撃波が二人を中心に球状に広がった。そして地面を薄く剥がし、粉塵を巻き起こす。

それは単に鉾と剣が交わっただけと言う領域を越えていた。二つの隕石が正面から衝突し砕け散ったかのように、強大な二つの力がぶつかり合い弾け飛ぶ。

(……)

隕石並の一撃を放ったキファーフだったが、彼の表情は若干険しくなっていた。

(このじいさん。俺の元力マグナと全体重を掛けた一振りを、片腕で受け止めやがった)

並みの術者なら剣の上から真つ二つに両断されていたはずの一撃を、老人は右手一本の一振りで受け止め、さらにそのまま振り返してきた。

「な　ッ！」

攻撃が通じなかった上にそのまま弾かれたキファーフは、大きく体勢を崩し後ろへ飛ばされる。靴の裏を地面に引き摺りながら何とか速度を落としたが、気を抜く事はできなかった。

何故なら白い大剣を握った右腕を左肩の上に回し、半身の状態で

飛び掛る老人がキファーフの眼前まで迫って来ていたからだ。

「……………」

「ッ！」

隕石並の一振りを経々とあしらった老人の大剣が、月明かりに照らされて白く輝く。

そして高速で身を捻り、老人はキファーフの体を左上から右下へ切断するべく、豪快に振り下ろす。

空気が強引に裂かれ、大気が乱れる音がした。

だが同時に、金属の甲高い音も鳴り響いていた。

「はっ！！！」

そう吐き捨てたのはキファーフだった。隕石以上の破壊力を持つ一撃を真正面から受け止めて、屈強な両足を地面に打ちつけ立っている。

「やっぱりあんたで間違いなさそうだな。うちの部下を殺しまくったって言う殺人狂は！」

「……………」

叫ぶキファーフに、しかし老人は取り合わない。

次の一撃を放つべく、相手との距離を取り大剣を構えるだけ。

### 13 救うために

キファーフと老人の激闘を眺めていたラージューは、そこで気付く。今度は左側にいた部下たちが、青いＴシャツを着た男に次々と斬られていつている事に。

「あの野郎！」

ラージューは男に握っていたナイフを投げつけようとした。だが、その前に動いた者がいた。

三つの人影の、最後の一人。

両手両足に、目に見えるほど圧縮された風の渦を巻きつけたユアンバロウズが、拳を硬く握り締めイッザラージューの眼前まで迫ってきていた。

「ッ！」

一瞬反応に遅れたラージューだったが、彼はそこで思う。

(こいつ、素手でやる気か!?)

ナイフを持った敵に素手で挑もうとするユアンの行動は、無謀としか思えなかった。鋭く尖ったナイフと人間レベルで硬くなった拳とでは、結果は目に見えているから。

「武器もなしによく突っ込んでくれるなあ！」

嘲るように叫び、ラージューは刃先を青いＴシャツの男からユア

ンに向ける。

同時に右肩を引いていたユアンの右拳が、風を纏って前に突き出る。

ナイフと拳が正面から衝突し、

ナイフが刃先から削れていった。

「な　ッ」

瞬間、ラージーは愕然とした。

ナイフと素手の拳とでは勝負にもならないはず。実際に勝負にもなっていないが、その結果が明らかに異常だ。

ユアンの拳は鉄製のナイフを大根みたく削っていき、そしてラージーの顔面に突き刺さる。

ドッ！ と鈍い音が響き渡った。

そのまま一〇メートル以上殴り飛ばされたラージーは、地面に大の字になって倒れこむ。

砂ぼこりが彼を包むように舞い立った。

「……………どういう事だ？」

しかし今の彼は顔面を殴られた事よりも、自分が生きている事を不思議に感じていた。

（ナイフを削り取った拳だぞ。それをまともに喰らった俺が、なんで生きてんだ）

考えられるのはただ一つ。

あの少年が手心を加えた。つまり力を抜いたのだ。

「殺しはしねーよ」

言ったのはユアンだった。彼は倒れているラージーを見下ろし、静かな声で発語する。

「俺はただ、キャロルを助けに来ただけだからな」

### 13 救うために（後書き）

第三章はこれで終りです。

次は第四章の前にまたまた行間が入ります！

## 孤独な決意

轟音が聞こえた。舞い上がった砂粒が皮膚を叩く。

悲鳴が聞こえた。恐怖に怯える男女様々な声が辺りに轟く。

振動が伝わった。気持ちの悪い鈍い音が頭に響く。

風が吹いた。温かくもあり、冷たくもある不思議な風が。

そして、

『俺はただ、キャロルを助けにきただけだからな』

少女の鼓膜を振動させて脳に伝わってきたのは、一人の少年の声だった。

「……ユ、アン？」

気がついて、掠れた声で最初に放った言葉は少年の名前。

少女は瞳を開け、少年の声が聞こえた方向に焦点を合わせる。

そして一〇〇メートルぐらい離れた所に、彼はいた。

拳を固く握り締め、黒いローブを羽織った少年を殴り飛ばして。

「……」

気を失っている間に一体何が起こったのか。少女は知らない。

自分は『薔薇十字団』の追っ手に捕まったはず。現に手足はローブで縛られていて動けない。

そのため、どうして少年は戦っているのか。彼女には分からない。

否、戦っているのは少年だけではない。

周りを見渡すと、六〇歳近いおじいさんが右手に白い大剣を握って、飾り物のような鉾を持った青に近い黒髪の男と剣を交えていた。

短い黒髪で頬に大きな傷を負っている見知った顔の男が、黒いロブを羽織った集団に突っ込んで行っていた。

(……これ、どういう事なの?)

現状が理解できていない訳ではない。

彼らは自分を助けに来てくれたのだと、彼女は正しく理解している。

ただ、信じられないのだ。

あの三人は自分のために戦ってくれている。彼らは命懸けで自分を救おうとしてくれている。その事実が。

(……なんで?)

彼女の頭の中には疑問しかない。

(……どうして?)

自分を助けた所で得られる物など何もないはずなのに、得する事など何もないはずなのに、どうして彼らは自分を救おうとしてくれるのか。

自分たちの身を危険に晒してまで、どうしてそこまでしてくれるのか。

確かに、少年には自分が抱えている状況を大雑把ではあるが告げた。だが告げただけ。だから助けて、などと言った覚えはない。

しかし彼女は気づいていない。少年に事情を話した事そのものが、既に救いを求めている事に。

そしてその救いに少年は応えていた。

“ いったつってんだろ！ 何度も聞くな！ そんでさっさと事情言

いやがれ!”

ふと、少女の脳裏に少年の声が響いた。  
乱暴だけど温かい。優しさの塊のような言葉。  
全てを受け入れてくれた人の声。

(そっか……)

そこで少女は気が付いた。  
今まで、自分は一人だった。他人を巻き込みたくなかったから。  
他人を不幸にしたいくなかったから。孤独を選ぶ他、なかったのだ。  
でも少年と出会った事で、彼女は独りではなくなった。  
母親からの頼みを果たすまで独りでいよう。そんな自分の信念と  
引き換えに。

一時の気の迷いや思い切りの判断は、間違いなく彼女を孤独から  
救ったのだろう。だがその代償は途轍もなく大きくて残酷だったと、  
彼女は今更ながら思い知らされた。

取り返しのつかない過ちに気付いてしまったのだ。

ポタリ、と少女の瞳から涙が落ちる。

生暖かい滴が頬を伝い、地面を小さく濡らした。

その涙が、一体どういう意味で流れたのか、本人にしか分からな  
い。

ただ、それがどんな事であれ、彼女にはこれから自分がすべき  
事は分かっていた。

だから彼女は覚悟を決めた。

だから彼女は瞳を閉じた。

「だから、わたしは……」

そんな消え入りそうな少女の声は、決して誰にも届かない。

## 1 破壊の衝撃（レーヴァシユラーク）

ユアンはバロウズは普通の人間ではない。

この世界での『普通の人間』とは、体内に『元力』<sup>マクナ</sup>を宿し、『術』  
と言う魔法に似た力を使える者たちの事を指す。

だがユアンはその普通とは少しばかり違っていた。

まず、彼は異常な回復能力と動体視力・反射神経を持っている。  
音速で迫る弾丸の軌道を目で読み取り、弾丸で貫かれた傷は一晩  
で水に浸かっていいほどには回復してしまう。体中に切り傷を負っ  
ても三時間ほど寝ていれば大抵は治っているし、体力の回復速度は  
常人の二倍以上。それらの身体能力はとても普通の人間の体が持ち  
合わせている機能ではない。

次に、彼は術を使わない。『元力』<sup>マクナ</sup>の総量が極端に少ないから。  
どんなに規模の小さな術式を発動しようとしても一回が限界。そ  
の術式を維持できるのもほんの数秒と言う、無に限りなく近いのだ。

最後に、彼は風を操る力を持っている。

その力は『術』ではない。『元力』<sup>マクナ</sup>を全く使わずに、彼は大気を  
操る事ができる。

なぜ自分がそんな力を持っているのか、彼は知っている。

『元力』<sup>マクナ</sup>の総量が少ない理由も、身体能力が高い訳も理解している。  
全て分かっているからこそ、彼はそれらの力を存分に振るう事が  
できるのだ。

「ははっ」

男の失笑するような声が聞こえた。

それはユアンの視線の先に倒れている一人の少年のものだった。

その少年は黒いローブを羽織っていて、瞳の色は赤っぽい黒。毛先を真紅に染めた黒髪で、耳には黄金のピアスが二つずつ。

ユアンは知らないが、その少年の名はイツザ「ラージー」と言う。

そんな、まさに悪人そのものと言う顔つきの少年は、地面に大字になって倒れていた。

「殺しはしねーよ、だと？」

ユアンに殴り飛ばされた少年の口から言葉が漏れる。

金属と金属がぶつかり合う甲高い音が辺りから響いてくる。

「俺はキャロールを助けにきたただだから、だと？」

ガルトと鉾を持った男が戦っている方向から、衝撃波に乗って粉塵が巻き上げられ、

そして、

「なめてんじゃねえぞッ！！」

少年の叫びが辺りに轟いた瞬間、

爆ッ！！ と彼の体を中心に地面が爆ぜた。

埋められていた地雷が起爆したかのように地面が弾け飛び、大量の粉塵が舞い上がった。振動が大地を揺らし、轟音が鳴り響く。

「なっ」

それを一〇メートルほど先から眺めていたユアンは啞然とした。

(……自爆!?)

爆発は明らかに地面に倒れていた少年の背中から起こっていた。背中の地面があれだけの規模で爆発すれば、人間の体なんて一瞬で木っ端微塵に砕け散ってしまう。

だが、

「上から目線でもの言ってるじゃねえぞ雑魚がッ!!」

ラージの叫び声が聞こえた。そう。

「上からッ!?!」

上空二〇メートルぐらいだろうか。爆発によって吹き飛ばされた敵の体が、五体満足で空を舞っていた。

「てめえみてえな野郎が一番勘に触るんだよッ!」

空中で体勢を整えているのか、ラージは両腕・両足を大きく広げて、頭から落下しないように上手くコントロールしている。

「てめえみてえな野郎を俺が一番ぶっ殺してえんだよッ!」

あまりの怒りに表情が歪んでいるラージーは、噛み付くように吠えている。

すると彼は、両手を剣の柄を握るように揃えると、自分の頭上に振り上げた。

「だからよお！」

そして、振り上げた両手の中からその物体は現れる。

全長は二メートルほどで、柄の長い剣の刃を、円柱型の金属塊に替えたかのような殴打型の武器。

中世では鎧を纏った人間に対して、その上から体を叩き潰せる事で有効だった兵器。

それは、撲殺用の金属製打撲武器だ。

(あの野郎。一体どこからあんなもんを　！？)

何らかの術である事は間違いないが、今はそんな素朴な疑問などいちいち解いている暇はない。

ラージーが叫ぶ。

「拉げろおおおおおおおッ！！」

「い　ッ！」

ユアンは即座に回避しようとした。だがメイスの出現により重量が増えたのか、ラージーの落下速度が急激に上昇し、

予想よりも早く頭上にメイスが振り下ろされた。

もしユアンの身体能力が並だったのなら、確実に頭から体を潰されていただろう。常人以上の反射神経を駆使して、間一髪の所でその一撃を後ろへ下がる事で回避した彼だったが、しかし攻撃はそれ

だけでは済まなかった。

ドッ！ と地面にめり込んだメイスを中心に、  
轟ッ！！ と爆破が生じた。

爆発が起こる前、ユアンとメイスの距離は一メートルもなかった。そんな距離で地雷並の衝撃を受けたらどうなるのか。考えるまでもなく、その結果は目に見えている。

視界を覆った眩い光が熱・音・衝撃を纏って襲い掛かった。反射的に両腕で顔面を覆ったユアンだが、そんなものは気休め程度にしかならない。

石を壁に叩き付けたような鈍い音と共に、両腕全体に細かい粒の衝撃が走った。爆発により挟まれた地面の破片が、爆風に乗って襲い掛かってきたのだ。同じような衝撃は既に体の至るところから伝わってきている。

そしてその衝撃を痛いと感じた時には、焼けるような熱さが触覚を、裂けるような音が聴覚を刺激していた。

「ガアああああッ！！」

一〇メートルほど吹き飛ばされたユアンは、乾いた地面の上を転がっていく。背中から伝わってきた衝撃に一瞬意識が飛びかけ、痛みにも思考が削られていく。すぐにでも起き上がりたいのに、体が言う事を聞かない。自分がいる一帯だけ重力が何倍にも膨れ上がったかのように、地面から体が離れない。

(……あいつ、また、やりやがった)

疼くような痛みを感じながら彼は思う。

先程の爆破は、地面にめり込んでいたメイスを中心にして起こっ

ていた。ユアンはかなりの近距離でその衝撃を受けたが、彼よりもさらに近くでその衝撃を受けているはずの人間がいる。

それは、爆破を起こした本人。つまり黒いローブを羽織った少年  
イツザ・ラージーだ。

(でもあいつは、多分何らかの防御術式を使っているはずだ)

最初と同じで敵は無傷だろう。そもそも自分の攻撃を自分にも食らうバカはそうはいない。

そう思ったユアンは、霞む視界でなんとか爆発地点を映した。そして案の定、黒々と立ち籠る煙の中にラージーは立っていた。

最もあの衝撃を間近で受けたはずなのに、彼は無傷のまま佇んでいた。

「無様だな。まあてめえにはお似合いだが」

悪意しか籠っていない少年の言葉が、ユアンの耳に入ってきた。

「でも、まだくたばんじゃねえぞ？ こっちは全然もの足りねえんだからよお」

例え黒煙に映った影しか見えなくても、ユアンには今の少年の表情が思い浮かぶ。歪んだ笑みを浮かべているであろう少年の顔が。

「そうだな、立てるようになるまで少し時間をやるよ」

薄暗い乾いた大地にラージーの声が響いている。

「とある聖書に載っている『ソドムとゴモラの滅亡』っつー伝説…、いや神話を知ってるか？」

片手にメイスを携えているであろう彼は、語りかけるように言葉を放つ。問いかけているにも拘らず、彼はユアンの返答を待たずにそのまま続けて、

「ソドムとゴモラつてのは町の名前なんだが、そこじゃあ強姦、殺し、盗みに恐喝、ありとあらゆる悪徳行為が延々と繰り返されてたらしい。だからか、その町の住人は神様の逆鱗に触れちまって、空から降ってきた火と硫黄の雨に町ごと跡形もなく消滅させられたんだと」

黒煙の中には、まだ所々赤く揺れる火が灯っている。

「まあこの話はある種の例えみたいなもんなんだが、神様つてのはつくづくやる事が派手だよなあ？ どの神話でも」

語り続けるラージーが攻撃を仕掛けてくる気配はない。それを悟ったユアンは重たい体をゆっくりと起き上がらせる。

「でも神様からしたら人間の町の一つや二つ破壊する事なんて、人間が蚊を叩き潰すのと同然の事なんだろうけどよお、もしも人間にも神様と同じ事ができるとしたら、てめえならどうする？」

「……何が言いたい」

「ちょっと回りくどすぎだったか？ もうちょっと簡潔に言うとな、この世には神様の扱う術式が記載された本が存在する。つてのは知ってるよな？」

「神の十二聖書の事か？」

ユアンの言葉に『ああ』とラージーは言った。

『神の十二聖書』。それはこの世で最も強大な術式『セフィロト法』が記載された術導書<sup>バイブル</sup>。

名前の通り十二冊に分けられており、それら全てを解読し、習得すると神またはそれに近い存在になる事ができると言われている。

因みに術導書<sup>バイブル</sup>とは、術式や術式の使い方などが記載された術の手引書のようなもの事。世界中に数え切れない程存在する。

「その中の一冊に『ゲブラー』<sup>バイブル</sup>って術導書があるんだが、そいつは破壊と鉄を司っていて、あらゆるモノをあらゆる方法で破壊する事ができる術式が記載されてるって話だ。噂だと、ソドムとゴモラを消した術式も載っているとか」

「……………」

「それってつまりは神様の術式が載ってるって事だよなあ？ 犯罪<sup>おれ</sup>者にとつちや夢のような話だ。そいつを使えりゃこの世の頂点<sup>てっぺん</sup>取れるかもしれねーんだから」

ラージーの口調は幼い子どもが自分の夢を語っているかのようなうだつた。とても純粹に『破壊』を望んでいるようだった。

そんな語りを聞いているとユアンの背後から風が吹き、黒煙を少しずつ薄くしていく。

「まあ最終的に俺は何が言いたいのかと言つと……………」

そして黒煙が完全に消え去ると、

「俺は『ゲブラー』に載っている術式の改良版を使ってるっつー事

「なんだが、その意味ぐらいは分かるよな？」

「ふらふらな足取りで立ち上がったユアンの黒い瞳と、堂々とした態度で佇んでいるラージーの赤黒い瞳がぶつかった。」

「鉄は破壊の象徴。だから俺の獲物は鉄製のメイス」

予想通り邪悪に歪んだ表情で、敵は笑っている。

「刻んだ術式は光・音・火・衝撃の四要素をかね揃えた『爆発』<sup>エクスプレッション</sup>。獲物がメイスつてのは、この術式を使っても耐えられる強度をもっているからだ」

そして周りには赤く揺れる小さな炎。少年は鉄のメイスを見せ付けるように天へと掲げる。

「他にもいろいろあるんだが、それら全てを上手い具合に組み上げたのが、この『破滅の衝撃』<sup>レイヴァンシュラック</sup>だ」

「『神の十二聖書』系列の術式の取得は、世界的に禁止されているはずだが」

「言ったのはユアンだった。」

「彼が言った通り『神の十二聖書』に記載されている術式の全ては、例外なく『禁術』。法で習得及び使用を固く禁止されている。大体『全て習得したら神になれる』術式なんてものを、この世界のお偉い方々が禁止しない訳がない。」

「禁術を習得した術者は大抵指名手配される。捕まったら即監獄行きだ。」

「おいおい、俺を何だと思ってるんでめえは？ 犯罪者がそんな決まり守る訳ねーだろ」

もっとも過ぎるラージーの言葉に、ユアンは齒噛みをするだけ。

(レーヴァシューラク、か。名前から見て『レーヴァテイン』が元ネタだろうな)

ユアンは術を使えない。だが術に関する知識 特に『神の十二聖書』の事なら、それなりに知っている。

『レーヴァテイン』とは、とある神話において、世界に幕を引いてしまうほどの強力な剣だと記されている。剣と言ってもただの鉄で出来た剣ではなく燃え盛る炎の剣で、その輝きは太陽のそれを凌駕するほどと言われている。

(だからと言って、奴の武器が世界を焼くほどの威力を持っている訳じゃない)

所詮は紛い物。本物には到底敵わない。

だが、それを分かっているからこそ、彼は気を抜けなかった。

なぜなら、『神の十二聖書』に載っている術式の密度を一〇〇〇分の一にしたとして、その威力は建物一つぐらいなら簡単に吹き飛ばす事ができるからだ。

(こいつ、面倒なものを使いやがって)

予想以上に苦戦を強いられるかもしれない。

心のどこかでそう思ったユアンは、体中の痛みを押し込めて、構える。

「さて、長話はこれくらいにして……」

話に区切りをつけたラージーも、重々しいメイスの先端をユアンに向けた。

そして彼は告げる。

「そろそろ、始めるか」

## 2 怒り

アーウェル「ローマーの戦い方は、ガルトのそれとは違う。  
一振りですべての敵を薙ぎ払うなどと言う、ぞんざいでもつたいない事はしない。

敵地の真ん中に飛び降りて、一人一人の命を丁寧に、そして確実に摘み取っていく。

それがアーウェルのポリシーだ。

どんな人間の命でも、命である事には変わらない。悪人だからと言ってその命を虫けらのように扱っていいとは思わない。

などと言う善人被れの綺麗事を思っている訳ではない。

彼はただ、戦闘を楽しみたいだけなのだ。一振りですべてを終わらせてしまつては、一度に得られる快感は大きいかもしれないが、それらは全て一瞬で終わってしまう。

一度に得られる快感は少なくとも、その快感を長い間感じていたい。

それがアーウェルの本性だった。

戦闘において、本来彼が抱くべき感情だった。

しかし、今の彼が抱いているものは、それとは違う。

「……許さねえ」

怒り。

『薔薇十字団』に対する完全なる怒りだった。

「お前らだけは絶対に許さねえ!!」

彼の怒りはとある少女と関係している。

彼にとってその少女は何者にも代えられない、特別な存在だった。昔、共に戦場で戦った友人の娘。そして、その友人からの最後の頼み。

“娘を頼む”

手紙に書いてあった言葉の意味を理解したのは、友人の町が焼かれたと知った時だった。その友人が死んだと知ったのはそのさらに後の事だ。

細かな事情は全て自分で調べた。寝る間も惜しんで必死に調べた。そうして全ての事情を知った彼は、すぐにでも友人の娘を探しに行こうとした。

その時だった。

本人から手紙が届いたのは。

内容は『一週間後に会いにいきます』と、とても簡潔なものだった。

彼は一週間待った。ここで変に家を空けたら入れ違いになってしまいかもしれないと思ったから。

だが少女は来なかった。それから三日経っても来なかった。だからここまで探しに来て、見つけた。

『薔薇十字団』に捕まった状態で。

(……俺がもっと早くキャロルを探しに出ていれば)

黒いローブを羽織った人間を、次々と切り裂きながらアーウェルは思う。

(こんな事にはならなかった)

口の中に鉄の味が充満する。奥歯を噛み締め過ぎたせいで、歯肉が出血しているのだ。

(俺がもつと！ ……っ)

今更そんな事を思っただけでも、起こってしまった事実は何一つ変わらない。

分かっているながらも、彼は後悔を止められなかった。

(くそっ、体が全然動かねえ)

アーウエルの右手には、全長一・五メートルほどの刃幅の狭い黒スタードソード片手半剣が握られている。彼がそれを握ったのは二年ぶりだった。それは二年間一度も闘っていない事を意味している。

(道理で体が動かねえ訳だ)

本人はそう思っているが、他から見たらバリバリの現役騎士にしか見えない。

アーウエルの動きは、彼を狙っている者の動きを遥かに凌駕していた。

その証拠に、彼は切り傷一つ負っていない。数では圧倒的に勝っているはずの『薔薇十字団』。しかし二年間剣を握っていなかった男一人に苦戦している。

と、そこでアーウエルの視界に複数の敵の動きが映った。

離れた所から銃口を向けてきた女が三人。

槍の先端を心臓に向け迫ってくる男が二人。

それは今まで防戦を余儀なくされていた『薔薇十字団』初の攻め。最初に動いたのは槍を持った二人の男達だった。両脇から同時に迫る鋭い切っ先に、アーウエルは臆する事なく『術式』を発動する。

ポケットの中から取り出したのは一枚の紙だった。喫茶店などでコップの下に敷くコースターのような正方形の紙だ。

アーウエルはその紙を地面に落とし右足で踏み潰すと、左側から迫る男に黒剣の切っ先を向ける。

迫る二人の男達は気付いていないが実はこの時、既にアーウエルの『術式』は発動していた。もし相手がガルト並の実力者、又は元<sup>マ</sup>力の流れを読み取る事のできる術者だったのなら、この『術式』は通用していないかもしれないが、それ以外の術者に彼の『術式』を見破るのは極めて困難。なぜなら彼の『術式』は気付かれない事にこそ意味があるからだ。

普通の視界では絶対に、感覚では限りなく感じ取る事のできない六芒星を基盤にした『陣』が、アーウエルの右足を中心に半径五メートルまで展開された。

既に『陣』の中に入り込んでいる二人の男達には、数秒後の自分たちの姿は想像できない。

同時、標的であるアーウエルを刺殺するべく、二つの矛先が両側から突き出され、

アーウエルが消えた。

比喻でもなく、何かの例えでもなく、言葉通りにパツと消えたのだ。

「ッ！？」

突然、貫くはずだった標的を見失ったため行き場を無くした二つの矛先が、正面から衝突した。左側の槍が衝撃に押されて跳ね上がり、勢いを消しきれなかった右側の槍がそのまま男の脇腹へと突き刺さる。

「ぐ、があッ！」

短い男の悲鳴が聞こえた。

しかし、それは仲間の槍に腹を刺された男のものではない。仲間を刺した方の悲鳴だ。

「相打ち、ご苦労さん」

言ったのは、消えたはずのアーウェル。彼は仲間を貫いた男の心臓を半剣で背中から突き刺し、引き抜いた後だった。黒い刀身に付着した赤い液体を真横に振るって払い落とし、一歩足を引く。

「俺も一応術者だからな。真正面から突っこむだけのバカじゃねえんだよ」

その言葉が、倒れていく二人の男に届いているのか、彼には分からない。

もとより彼らの死に捧げるために言った訳ではない。

と、今度は三人の女が、二〇メートル先で構えている歯輪銃（火縄銃的なもの）の銃口から火花が吹いた。

同時に放たれた三つの弾丸だが、しかし『狙い』であるアーウェルを貫く事はなかった。

なぜなら、既に『狙い』はその場からまた消えていたからだ。

「俺が今まで、何も考えずに暴れまわっていただけだと思っただけか？」

感情の籠っていない冷たい音色が響く。

アーウェルが現れたのは、弾丸を放った一人の女の背後。

鉄で出来た銃身を切り落とし、そのまま女の腹部を蹴り飛ばして気絶させると、アーウェルは半剣を肩に担いで見下すような視線を『薔薇十字団』全体に向け、

「お前らには、神に祈る時間すら与えねえ。一人残らず<sup>なぶ</sup>翫って殺す  
! ! !」

そして放った言葉は死の宣告。

### 3 激突

ユアン＝バロウズは思う。

(俺の目的はキャロルを助け出す事)

一〇〇メートルほど先で倒れている少女に視線を向けるが、気を失っているのか彼女が動く気配は全くない。

(でも先にこいつを止めなきゃ意味がない)

だから、彼は戦う。

一人の少女を救うために。拳を握って体勢を低くし、己の敵を見定める。

(力押しだけで勝てるかどうかって言うたら……、まあ普通に考えて無理だろうな)

敵の武器が今まで通りの短剣ナイフだったのなら、話はまた変わってくるかもしれないが、鉄の鎧の上からでも人体を叩き潰す事が出来る金属製打撲武器メイスに、直撃した物を爆破する術式を組み込まれていては、はつきり言って手の出しようがない。

(でも、必ずどこかに抜け道があるはずだ)

根拠はある。最初の爆発と先程の会話で不可解な点を幾つか見つけたから。

しかしそれを確かめるためには、もう一度あの爆発を受ける事になるかもしれない。

(ビビってる訳にはいかない。俺の知識が正しければ何とかなるはずだ)

そのための、先制。

ユアンは握っていた両の拳を開き、掌サイズの風の渦を形成した。それは次第に薄くなり、鋭くなって刃やいばとなる。

チャクラムと言う武器を連想させて貰えば分かりやすいだろう。チャクラムとはCDやDVDのような円の形をした手裏剣みたいな物。

彼の手の中にあるのは正にそれだ。鉄ではなく空気で創られているが、その用途は変わらない。

彼は一度両腕を後ろに引き、狙いを定める。

対する敵はメイスを肩に担ぎ、掛かって来いと言わんばかりの態度だ。おそらく挑発しているのだろう。

ユアンは後ろに引いていた両腕を振るうと同時に、チャクラム型の空気の武器を投擲する。

速度は弾丸の二分の一以下。だがその利点は視界で捉えにくい事であり、今の場合はただの陽動。致命傷を狙っている訳ではない。

ユアンの両足に風が渦巻く。

そして地面の乾いた土を吹き飛ばし、先に飛ばしたチャクラム型の空気の塊を追うように狙いに迫る。

敵の動作は至って単純だった。

四〇キロはあるだろうメイスを片手で軽々と振るい、回転しながら飛翔してくる風の刃を真横へ一線し消滅させる。そのまま両手に握り直すと新たに迫る自身の敵を、爆破の撲殺武器で叩き潰すべく大きく再び真横に振るった。

バットで球を打ち返すが如く。

高速かつ強大に。  
大気を強引に引き裂きながら。

ブオンツッ！ と壮大に空振った。

「…………ツ!？」

ホーミング  
直撃確定だったはずの一振りだが、球であるユアンの体が急激に高度を下げたせいで、何もなくなつた空間を通り過ぎたのだ。

ユアンが敵の目の前で着地すると、敵がメイスを振り切るのとは同時だった。

風を纏つた拳を、両手でメイスを握っている為防御が出来なくなつている敵の顔面に突き刺そうとするユアンに対し、敵はメイスを引き戻して自身の敵に振り下ろそうとする。

(いけるか…………ツ!?)

「ぐ　ツ!」

奥歯を噛み締めた両者。

固く握つた拳を突き出そうとするユアン。到達まで約一秒弱。

完全に振り切つたメイスを早急に引き戻し、再びユアンに叩きつけようとする敵。到達まで約二秒強。

一秒弱VS二秒強。

秒単位の戦闘。

結果は一目瞭然。

そして、

敵の腕が異常な動きをした。

人間としての腕の機能が異常なのではない。

腕を動かした速さが異常なのだ。

四〇キロ以上のメイスを握っているのにも関わらず、敵はそれを

〇・三秒で真横から真上に掲げ、

「  
」

〇・一秒で、何かを思う暇もなくユアンの頭上に振り下ろされた。

地面を割る振動と大気を裂く爆音が鳴り響いたのは、その〇・五秒後。

#### 4 強敵への宣言

秒単位の死闘を繰り広げているのはユアンだけではない。

ガルトVSキファーフ。

率直に言おう。

この二人の死闘はユアン達のそれを更に凌駕していた。  
斬って突いて、防いでかわして。

そんな、戦闘において当たり前の動作を、彼らは一秒間に一〇回は繰り返していた。

一見すれば二人は均衡しているように見えるだろう。

(ギ……ッ！)

だが、蓋を開ければどちらが優勢なのか、明白だった。

(「ッ、の……」)

「腐れジジイがアあああああああああああああッ！  
ッ！」

キファーフは極めて珍しく絶叫していた。

今までの攻防とは違う、大振りな一撃。ガルトを遠ざけようとす  
るその動きが、逆に仇となり大きな隙を作ってしまう。

体を軽く逸らしキファーフの渾身の一振りを軽々とかわしたガル  
ト。

そして左脇腹へと。

両手で握られた白い大剣が、キファーフの上半身と下半身を切り

離すため横薙ぎに振るわれる。

「ッ！」

鉾を回し辛うじてその一打を防いだが、衝撃に負けて地面から両足が離れていた。

(ぐ、ちくしょ……ッ！)

抗いようのない力が鉾の刃に掛かる。一方からの強烈な負荷によって空気が壁のように感じられる。

ガルトの腕の筋肉が爆発的に膨らむのが分かった。六〇歳近い老人の腕とはとても思えない、化物のような太さ。怪物のような引き締まり。

そしてキファーフの体は上へは行かず、地面を抉り粉塵を掻き立てながらぶっ飛んだ。

「ごがアあああッ！！」

背中や腕、脚が摩擦により削れ、体からの振動により脳が大きく揺さぶられる。地面から抵抗が掛かりながらも二〇メートルは進んだ彼の体は、粉塵の中、鉾を手放し仰向けになって動かない。

(腕が……、重い)

乾いた喉。揺らぐ視界。

(体中が……、痛え)

霞む思考に抜ける力。口から吐き出された物は粘着いた赤黒い痰。

(あのじいさんの一撃一撃が、体の芯まで響いてきやがる。受ける度に、体の中から壊されてってる感じだ)

例えここで立ったとしても、同じような攻防が続くだけだろう。そうになったら自分はどくなってしまうのか。そんなものは容易に想像が出来る。

体の芯から砕かれて、殺される。

「……上等じゃねえか」

だが、裂かれた口から放たれた言葉は、老人への挑戦だった。キファーはゆっくりとその場に立ち上がり、地面に転がっている己の銚を再び手に取る。

「体の芯を砕かれて、一步も動けなくなるその時まで、俺は銚を放さねえ。全力で、あんたを潰す」

目の前でカーテンのように立ち込める粉塵を、彼は一振りで払い飛ばし、再び視界に現れた老人に宣言する。

「だからあんたも」

自分が抉った地面の先に立っている、強敵に。

「本気で来いッ！」

その首を取ると。

この時、今まで何をするにも無表情だった老人が、一瞬だけ笑ったように見えた。

そして、二人の攻防は再び会かいされた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1720w/>

---

アルス×マグス

2011年11月18日07時08分発行